

113-Ta83ウ



1200500725145

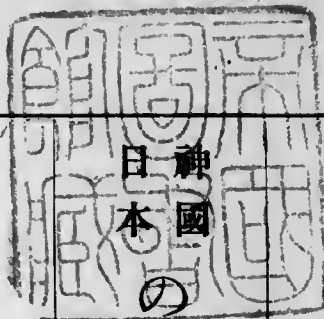
83

神國の 世界觀

田邊讓著

東京
人文書院





神國
日本
の

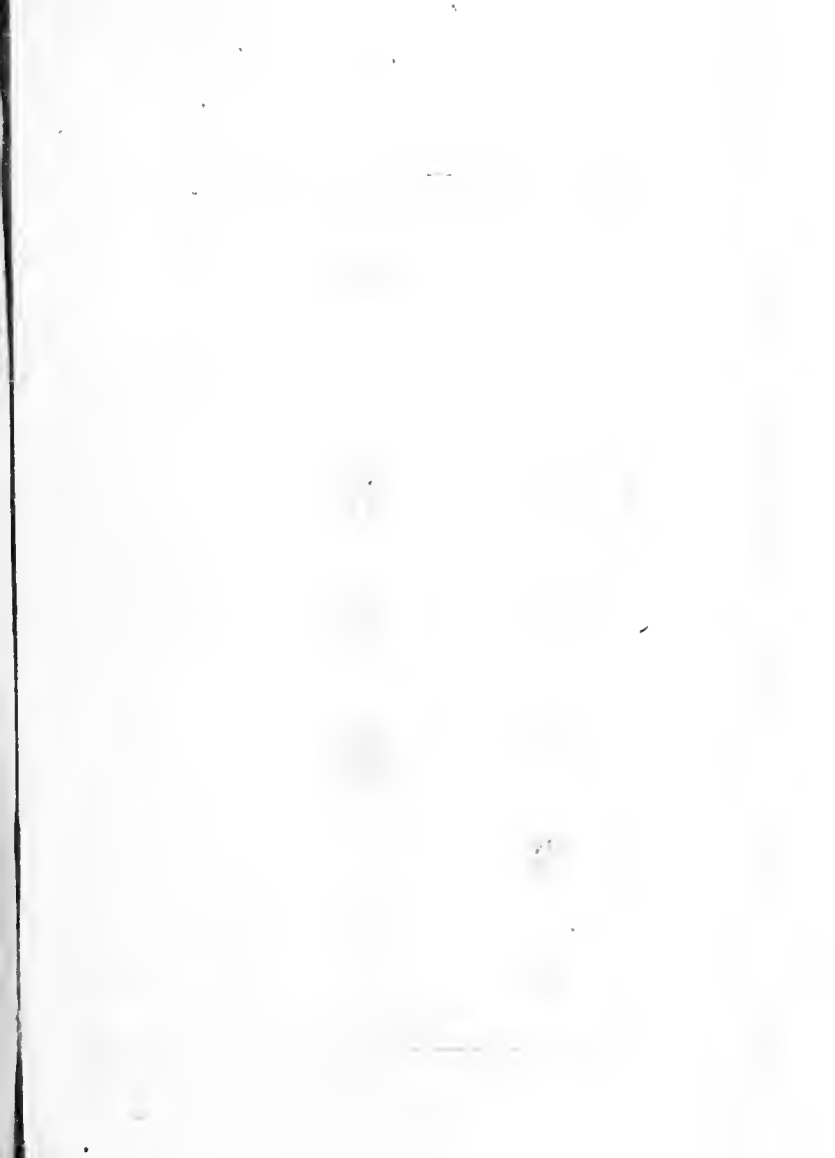
田邊

讓著

世界觀

東京
研文書院





神國日本の世界觀 目次

序 論 一

神國日本の超然性 二

神國たる所以 二

神 道 五

神 觀 九

日本文化の根源力 三

國體の理念・實相 六

祭祀と日本民族の生活 四

966
265
(E)

古代の祭祀……………四二

祭政一致……………四七

祭祀と臣道……………五三

祭祀と經濟……………五五

日本生活の中心思想……………六〇

崇祖觀念……………六〇

敬神觀念……………六六

敬神崇祖の實踐……………七〇

日常生活の内省……………七五

歴史を貫く民族精神……………八二

民族精神の發生……………三八

國家的姿態としての高天原……………三八

日本精神の時代的意義……………三九

大化の改新……………三九

建武の中興……………四七

明治維新……………一〇一

日本精神の現代の意義……………一三

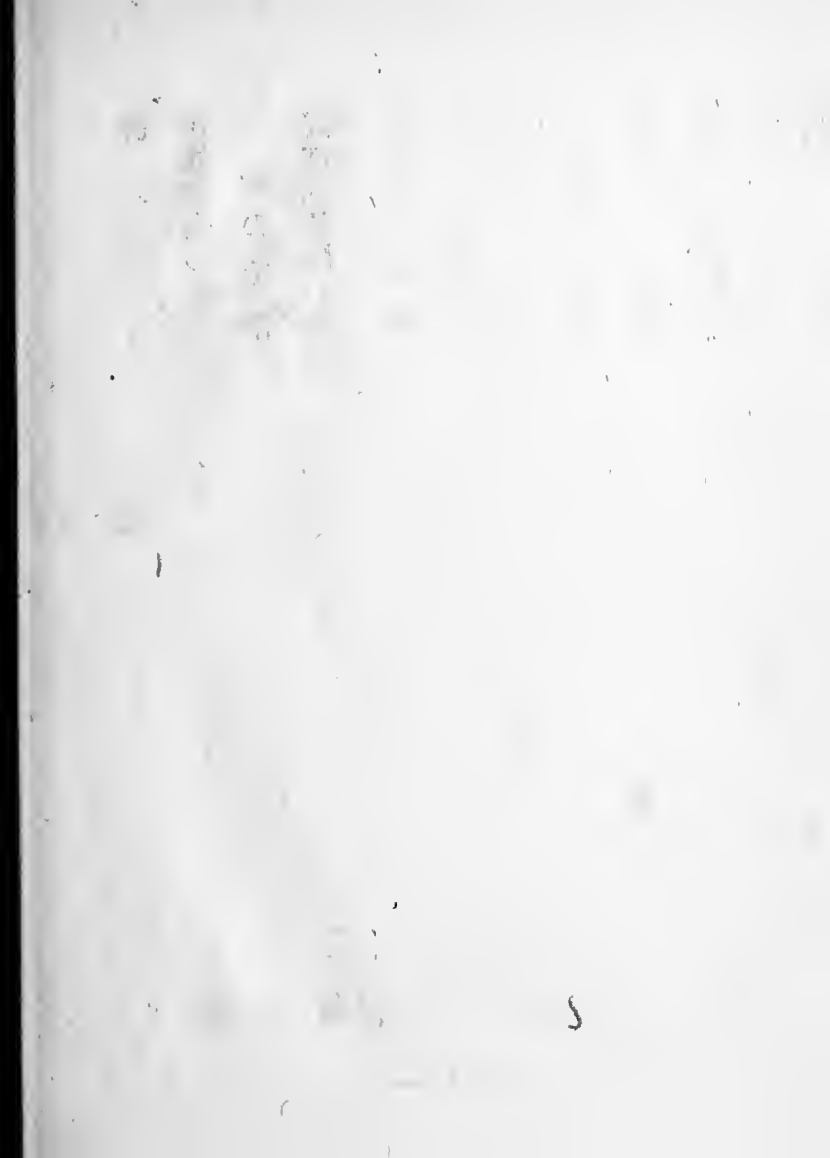
世界一大家族の創立……………一四

一體生命的世界觀……………一四

個人主義世界觀の自己清算……………二〇

皇道の世界光被	二七
惟新民族の自覺	三三
世界指導の必然性	三三
國體の普遍性	三九
天皇の近衛兵	四三
萬國の祖國	四五
議會即天岩屋戸の神集	五〇
民族設計	五五
國力支柱と民族強化	五五
數の設計	五五

質の設計	一五七
民族増強の源泉	一六二
結婚の奨励	一六四
民族前衛陣の覺醒	一六六



神國日本の世界觀

序論

轉換期とは何を指して謂ふか。世界的に觀て、それは單に世界地圖の色別けを變へることのみを意味しない。眼前に起生する小さき事象のみに觸目して言はる可き事ではない。永遠の世界の中に眼を向けず、一個の時代的英雄兒ヒットラー、ムッソリーニ等に注目するのが、何んと小さき見解であらう。少くとも、神國日本はクレイオンで彩る薄つぺらな紙上の小兒的遊戲を歡ぶものであつてはならぬ。

今、神國日本は貴重なる民族的純血を多量に流して戰つてゐるが、それは永遠無窮の生命を持つ絶對眞理の爲めの戦ひである。我等は貴い民族の血で染められた異域の枯草の中より、新に善きもの、美しきものを發芽せしめんが爲めの神の戦ひを戰つてゐるのである。

故に我等は此の戦ひの目的を達する爲に、個人主義乃至自由主義（力のある者が力だけの生活をする）の範域を超えては眞理がないと迷信し、或は西洋化學の論證を離れては學問がないと錯覺してゐる近代歐米人を、それ等の夢より呼び覺す可く、兵器に依る戰爭の外に更に又、思想的な烈しき戦ひを將來に

開始せねばならぬ。否、今これを開始してゐるのである。而して世界を禍亂に導いた不良の思想を悉く清算し盡して、眞實なる神の光の中に全人類を救ひ取らねばならない。それが行はれて初めて、我が神國日本が剣を取るに至つた根本精神が徹底するのである。それが爲には、先づ我等は神國日本を再認識し、而して我が國に於ける現實の生命力として働いてゐるところの「道」を、我等の精神の基底に徹せしめて置かなくてはならない。

由來、我が神國日本は、國難の襲來或は非日本的分子が横行し、國家が變態的情勢を呈するに至つた時は、常に神中心の生活を復活する。若しくは神を國民生活の上に取戻すのである。文永弘安の役、明治維新等がそれであつた。而して國民はこれを契機として、健全に歩み直すことを以て史的常徑としてゐる。我等も亦、今の戦争が與へた現在の良き効果を、將來の國民生活の基調として、同時に不健全なる刺戟の諸々を揚棄し、世界を率ゐて新時代生活の建設を有効にせねばならぬ。我等は茲に、我々の神の導き指ざしを看過し、神意を不完全に奉公するが如きことあつてはならない。

如何なる民族も神を持つてゐる。それは過去のみでなく現代でもさうである。曾て印度人は佛と呼ばれる神を持つてゐた如く、現代でもそれを持つてゐる。歐米諸國に於ける基督教の神についても同じことが云へる。併し乍ら、彼等は其の神に於て生活してゐない。神に對する信仰と、彼等の社會生活とは互に絶縁されて、別々の極へ流向してゐる。神を中心に全體的な生活が営まれず、民衆の各々は小さき

「個」の爲めの生活を營んでゐる。故に神はあつても、それは只天上に隔絶した存在であつて、地上の人間生活の力ある基底とはなつてゐない。同時に又それは民族理想乃至國家理想の中心とはなつてゐない。故に神の道は、かゝる國には漸次衰滅して我慾的な人間意力が、神の力を無視し、神を追放せんとする兇惡なる現代世相を示し、野獸的な侵略主義國爭が歐洲の地上を血に染め續けるのである。

然るに神國日本に於ては、神の言葉が常に發展を指導した。國土は單に自然物として存在したのではなく、神の愛兒として生産されたのである。そこに生命の分散、對立、解消はあり得ず、統一、融合、成長があるばかりであつた。神意は森羅萬象生きとして生けるものに滲透し、あらゆる存在は神の體系としてのみ存在し、相互に連結された。神はこの一體性の原理であり、この原理の圈内に於て「國體」が形成されたのである。このことは伊邪那岐・伊邪那美の二神の御事業に依つても能く實證されてゐる。

而して最後に現はれたのが統治者・主權者の確立である。即ち茲に、天照大神が生れ給ふた。日本國土の一體性の原理は、この神によつて始めて具體的に表現され、この神の下に一切が還元歸一し統合されることになつた。この萬物の一體化、この世界秩序こそは人類最高の理想であり、永遠の眞理でなければならぬ。日本はその肇國の太初に於てこの理想を實現し、この哲學的眞理を具現した。而してこの不滅の榮譽が、天地幽昏・人獸未分の原始草昧の世に、すでに此の亞細亞の一孤島の上に輝き出で、悠久二千六百餘年の時の流を貫いて、日の神の子たる我等の世にまで映え續けて來たことを思ふ時、我

等はたゞ感涙に咽ぶばかりである。高天原の曙以來、この不易なる眞理の光に比ぶれば、時の流れに浮ぶ西方オリンポスの聖火も一つの果敢ない螢火の明滅に過ぎず、眞理の超時間性は特に日本民族の上にのみ妥當なる事が示唆されるのではなからうか。

さて國土生成の神話の中に認められるものは、神々と大八洲の國、神々と山川草木、神々と歴代の天皇、神々と人民とが血縁的一體であると云ふ觀念、血縁的起源、血縁的統一の觀念、即ち血縁主義である。神々は國土と人民とを自己の延長として、自己の分身として、自己の中より生み出すのである。生み出されたるものは、成程自己が生んだものではあるが、而も最早自己そのものではない。それは一つの他者である。しかし乍ら、この他者は自己と全く無縁な絶對的他者ではなく、飽くまで自己の分身として自己の血を引いたものとして、謂はば相對的他者に過ぎない。生れたものは、生んだものゝ分身として、二つにして一つである。生むといふことは自己が分身することであり、一つのものが只「身二ツ」になることである。兩者はまさに骨肉を分けた間柄であつて、その間には只一筋の血液が流れてゐる。生むものは自己をその儘生れたものゝ中に再現する。かくて元靈はいよゝ多元なる分靈として自己を世界に顯現して行く。而して高御產巢日と神產巢日の末廣がりの作用が無限に繰り返されて行くのである。これ即ち日本民族の無窮膨脹の嚴たる事實である。

我が神國日本に於ける道は、この「むすび」と同じものである。その本質は常に生成發展の作用を行

ふ生命そのものであると言ふことが出来る。即ち我が日本民族は、天皇が「國生み」の神事に依り、地上の萬物を生み出された伊邪那岐、伊邪那美の二神の宇宙生命を、かみながらに繼承された現人神であらせられ、従つて、天皇の御政治は、道その儘の創造的化育即ち「むすび」と少しも變らぬものである、と云ふ確乎不動の信念を持つてゐる。

換言すれば、天皇はこの「むすび」の本體であらせられるところの、天照大神の御本質を受け繼がれ、天照大神と御一體であらせられる御存在であつて、日本、否世界を生成化育す可き力の體現にましますのである。故に人類生活の一切の活動は、天皇に發露して、天皇に還元するものである。天皇の御本質は直ちに國體の本義と同一である。何んとなれば、中心即全體、全體即中心、天皇即國家、國家即天皇であつて、この不二一體の關係こそは、宇宙萬有生成發展の原則であり、日本生成發展の原則であるからである。

要するに、天皇の御本質は萬世に亘つて持續する唯一の生命體であつて、國家生活に於ける價值一切の根源であり、全世界を神意に依つて統治し給ふ可き力である。換言すれば、天皇は地上に顯現し給ふ神であらせられる。故に我等は、眞心を以て、天皇に歸一還元し得るものである。

されば皇國は世界の他の諸國家とは全然格式を異にするものであり、萬物の生命を統合する國家である。「すめら」とは多を一に統合することである。即ち我が國は神ながらの「元靈國」であり、他國は宇

宙元生命の中心より分派した「分靈國」たる構造をもつに過ぎない。かゝる國體の全人類の普遍性をはつきりと把握せずしては、東亞新秩序の建設は行はれない。

我等日本人が 天皇に歸一することが、とりも直さず「忠」となるのであるが、忠は、我々人間生命が、宇宙絶對者の中心生命より派生せるものであると云ふ哲學的自覺である。孝は我々の生命が、親の生命に廻り、親の生命は祖先の生命に廻り、更に祖先の生命は民族の生命に廻ると云ふ、生物學的事實に基く倫理的自覺である。而して我が國に於て 天照大神は宇宙絶對神であらせられると同時に、民族祖神であらせられるが故に、忠と孝とは不可分一本となる。これが所謂忠孝一本であり、日本の哲學の根本原理である。

忠と孝とを基本道徳とする我が國は、世界に類例なき「家族國家」を構成してゐるのである。而して「日の神」の現世に於ける御顯現たる「天津日嗣」の 天皇が大御親として皇道を實踐し給ひ、凡ての臣民を赤子として慈しみ、而して「むすび」の原理に依り、これを青人草として愛ぐみ給ひ生成發展せしめられるのである。

淳仁天皇が、その御詔勅に於て

「六合ニ母臨シテ兆民ヲ愛育ス」

と仰せられた如く、我が國に於ける 天皇政治は諸外國の如く決して權力政治ではない。それは、親殊

に母性の愛情を以て、單に精神的であるのみならず、同時に又經濟的にも民を愛育し給ふことである。
天照大神が天孫を降臨せしめ給ふに當り、三種の神器と共に齊穗の神勅を下し給ふことに依つても
深き大御心の存することが拜察せられる。かくの如く我が神國日本に於ては、最も自然な人間生活原理
がその儘に、我が國家原理となつてゐるのである。かくて我が國家に於ては、くにとひととは一致融合
し得るのである。

天壤無窮の神勅に

「宜シク爾^{イニ}皇孫就イテ治セ」

とあるが、「シラス」は「シロシメス」とも云ひ、共に語源は「シル」即ちよく知るの意味である。神
の子にとつて國土の統治は、同時に國土の認識でなければならぬ。統治されるものと、統治するものと
は共に神に依つて生産形成され、神の分靈としての「ワケミタマ」に他ならず、故にそこには統治と被
統治との對立がなく、却つて相互に認識することに依つて、相互の同一性を反省し、共に神意を奉體す
ると云ふことが「シラス」の眞意である。

この原理は神の統治範圍が擴大され、そこへ包容されて來る異種族に對しても適用されるのである。
即ち民族を同化し、統一し、之を主宰して全一的一體性にまで生成化育するには、その自性を知り、過
去を知り、現在を知り、未來の動向を察して、一切を我が存在と同一の根源に於て認識せねばならぬ。

他を知らざることは、他を永遠に異物として助長せしめる外に、何等の意味もない事である。實に「シラス」は知る事に依つて愛し、愛する事に依つて治めると云ふ統治の最高形態であり、これに依つてのみ「八紘を宇と爲す」と云ふ神國日本政治の理想は實現されるのである。「シラス」なくして國體の進展持續なく、世界に對するその普遍性、絶對性はあり得ない。かくて 天照大神に依つて御啓示せられた「シラス」の教知的原理は、その御直系たる 天皇に依つて、天壤無窮に繼承せられ今日に及んでゐる。

而して今や、西歐人に依つて、個人主義世界觀の上に築かれたる近世文明は終焉を告げんとし、これに代つて新しく輝かしき時代が黎明しつゝある。即ち世界史發展の運命的必然性は、皇國日本をして個人主義の齎らした對立、分裂、相剋を超克して調和、統合、歸一の世界を實現し得べき、全個一體の産靈を指導原理とする「すめら時代」創始の原動力たらしめてゐる。而して日本の世界を創造す可き神機は歩一步と出現しつゝある。如何なる人爲の策謀も、巧智も、天運も阻止することは出来ない。近世文明の立役者米、英が「すめら文化」の指導者皇國日本の前に、拜跪せざるを得ない時代が到來した。

歐洲に於ては、近世文明の危機を超克す可く必死の努力を展開したる獨逸が、全體主義國家を建設することに成功した。全體主義は個人を中心とする自由主義並びにこれを溫床として發生したる社會主義及び共產主義とは、別個の世界觀に立つ。それは個人ではなく、國家若しくは民族を中心とするものである。従つてその本質に於て、世界的變革の動向に隨順するものである。故に我が日本と提携して、世

界新秩序建設に邁進してゐるのである。

しかし乍ら、獨・伊の全體主義は、個人と階級との誤れる理念が克服せられ、凡てのものが、國家若しくは民族に結ばれてゐるが、それより更に一步進めて、凡ての民族を一つの宇宙大生命に結ぶ根本的生命原理が把握せられてゐない。故に、彼等は假令個人的又は階級的利己主義は排撃し得ても、國家的又は民族的利己主義の域に止まる可能性がある。茲に於てか、我が皇國の大字宙生命原理のみが「すめら時代」の唯一絶對の指導原理とならなければならない。この指導原理の徹底的滲透に依つてのみ、階級闘争と帝國主義的侵略として、顯現してゐる近代主義の二重の内面的矛盾が、始めて力強く克服せられ、國內に於ては各個人が、世界に於ては各民族が、何れもそのところを得て、百姓昭明、萬邦協和の道義的新秩序が實現せられるのである。

されば我等日本民族にとりて、今日の如く重大なる意義を持つ時期は未だ嘗てない。而して又、この千載一遇の好機に生を得たる光榮と歡喜は、到底他民族の味ひ得ざるところである。故に、我等は只徒らに昂奮の雜音を放送するのみでは足りない。そこには愛國的な純粹情熱に強燃されつゝ、而も學的精密な思索と眞摯な討究とに依り、日本生活の眞實相への沈潜的回顧の深底から、日本的信念の本質的泉源を、新しき獨創を以て掘出し出して、民族固有の生命を來る可き時代の上に、活躍させる懸命の努力が爲されねばならない。それには競ひ寄る戰車群の中に立つて、裸身で戰ふ者に見る死に身な戰國精神

を必要とする。この大覺悟あつてこそ、初めて日本独自の哲學を以て世界に向上と進化とを與へる新時代の建設、困難にして光榮ある聖業の最終の劃期的な役割は完遂されるのである。

神國日本の超然性

神國たる所以

大日本は神國であると謂ふ。此の言葉は日本人の信仰である。勤くとも、吉野朝の忠臣北畠親房卿がその名著「神皇正統記」の劈頭に於て、

大日本國ハ神國ナリ、天祖始メテ基ヲ開キ、日ノ神長ク統ヲ傳ヘ給フ、我國ノミコノ事アリ、異朝ニハ其ノ類ナシ。此ノ故ニ神國ト云フナリ。

と喝破して以來、全日本の隅々にまで一層深められ強められた信仰である。單に「神在す國」とか、「神の靈力が發揮せられる國」とか云ふ事を遙かに超越して、天皇を神と仰ぎ奉ると共に、國家の理想に神を認め、此の理想達成に向つて、上下協賛結束して進む國家生活其のものを宗教とする所に、神國の眞義が存するのである。これ、即ち日本の中核精神（皇道）であつて、此の精神に弛緩、龜裂を生じない以上、國民の總ては、完全なる魂の平安に住み得るのであり、斯る國家生活さへ確固と營まれてゐる限り、それ以上個人的な魂の救済を必要としないのである。併し一旦、此の結束が何れかの一角より崩

れて、國家の組成分子相互の間が絶縁され、新な抵抗が起る時、茲に精神的疎通は妨げられて、中間的なもの、爲に、上意下達、下情上通とが共に遮斷せられ、政治は腐敗し、社會は糜爛し、社會傾斜に因る變態的局所熱發より人心の違和を生じ、而して苦しみ悩む者の中より個人的な魂の救済が烈しく求められ、やがては、其れが悪く低俗的に歪曲され、國體に反した個人的自利的な貌を帯び來るのである。即ち非日本の狀態が現出し、反國體性低俗宗教の跳梁を見るに到るのである。

國家生活其れ自體が宗教であると云ふが如き事は、建國以來一系の國家理想を鍛鍊進化せしめ來る我が日本に比すべくもあらざる他國人、即ち時の勢とか、四圍の情況、或は英雄の出現により、頻々たる革命を経て絶えず國家の根本的改革を餘儀なくされたものには、恐らく考へ及ばざる所であらうが、我が日本には、儼乎としてそれが實在するのである。故に我が國に於ては、國家生活が正常狀態を保持して居る限り、如何なる宗教も、此の國家的宗教精神に反しては存在し得ないのであつて、之に背反せざるものは、神道に限らず、總て正規的な宗教である限り、それ／＼獨自の原理に立ちつゝ、而も日本人の宗教として榮え得るのである。

斯る日本の國家的宗教精神は、宗教と呼ぶ可く餘りに非排他的、包擁的な本質を有する點に於て、一般の宗教とは明らかに異つてゐるが、而も、國民の之に對する傳統的な熱狂、執着は、確かに宗教的なものである。古來、日本民族の國家に對し、皇室に對し奉つての熱烈なる殉國的忠誠は、凡てかゝる國

家的宗教心より生れ、歐米式の愛國心を越え、一般的に考へられる程度の國民的熱誠を超越して強然するのである。我々は常に民族の誇りに於て、斯かる超越的宗教精神に生きつゝ、反國體的な低俗宗教の跋扈より時代を擁護せねばならぬ。

江戸時代に於ける先儒林道春が、

「我國は、天照大神以降、神は以て神に傳へ、皇は以て皇に傳ふ。皇道と神道と豈二あらん哉」と喝破してゐる通り、即ち天皇の國土、人民を統治せさせ給ふ根本の大道を意味するが、遑及的には皇祖神の道であると同時に、國土的には神の國の理想を地上に實現する道である。換言すれば、國家の大祖神 天照大神の御理想を其の儘に、現代日本人の理想として遂行に置くのが皇道であり、惟神の道であり、神道であり、それを發揮に置くのが所謂日本精神である。故に皇道とは畢竟全日本人の道であり、神官神職と謂ふが如き一部祭祀を職とする者のみに限られた事ではない。

随つて其れは、古來宗教を越えて全日本人に遵奉せられ、神社は宗義、宗學を超越して敬虔に禮拜された。例へば弘法大師が南山の開創に當つて丹生津姫神を頼み、傳教大師が北嶺の定礎に臨んで比叡山神の守護を仰いだが如き、如何に日本人僧侶が烈しい苦行の中に於て、神の加護を頼んだかを、後人の證知せしめるものである。これは神國日本人たることより出たる自然の要求であつて、一種の番人的性質を有する印度・支那の伽藍神とは、異つた認識に立つものである。假令佛僧でも、斯る場合、日本人

なるが故に、日本の神に擁護を呼びかける所に民族的な心の動きが存するのであつて、遠く異域に出て生活を営む日本人が、其の部落の中に神社を建設せずには居られないのと、恐らく共通の心理に屬するのであらう。

佛教が上部生活階層に、優勢なる浸潤を爲し得て以來、勢ひ募つて民族本有の神を佛の下位に押し下し、神職側の反感を激發するに至つたが、それが佛教側全體の態度では無く、佛僧の中にも日々の神拜を以て日本の禮佛作法としたる者があり、又相互の反撥感情が生んだ差別待遇を、默然と忍従しつゝも、皇祖の神靈を齋き奉りたる宮城の垣外に跪坐して、熱心に國民としての禱請を捧げた細流が多數に上つて居る事實に據つても知られる。西行法師の如きも確に其の一人である。彼は神宮に謁して、痛烈なる日本人的感激の極、かの有名なる

なにごとのおはしますか知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

と、詠を残してゐる。斯くの如く僧侶にして、崇拜と同時に敬神の意を表示してゐる者は、相當の數を算へることが出来る。かゝる敬神觀念こそ、神道が我々日本國民の精神生活に入り來りたるものとみるべきである。

神 道

神道、即ち我が國に於ける神々の道である。神々の道とは、我が神國日本の肇國以來、否我が天地開闢以來の神々の御稜威を仰ぎ奉り、その御力を國民生活の中に廣く實現して行く道である。換言すれば皇室を中心としたる日本國民祖先以來の生活原理である。即ち神道とは、上 皇室におかせられては、皇祖皇宗の御遺訓であり、又其れを御繼承遊ばされ、それを遵守し給ふところの歴代 天皇の御聖業であらせられる。而して下、國民に在りては、神代以來の祖先の遺風及び其の遺風を顯彰することが共に神の道に他ならぬのである。故に、神道の本義は神ながらの道であり、惟神の大道であつて、皇道と云ふ事も亦、この神道の眞髓であるのである。

日本國の歴代の源頭は神代である。神代の傳へ、即ち我が悠久なる建國の事實は、貴い古典に依つて堂々と語り傳へられてゐるが、其の神代に於ける活動の主體は多くの神々である。神道はその根本として、是等の神々の御稜威を貴び仰ぎ奉り、その御行動に順ひ奉り隨ひ奉ることに依つて、其の御神德を發揚し奉り、その御遺風を實踐し奉る可くなす事を以て、生活規範とするものである。

而して是等神々の中我々國民にとつて、最高至貴の神は、伊勢の神宮に齋き奉られてゐる 皇祖天照

大神に在しまし、その御稜威を其健御承け繼ぎ遊ばされる　天皇は、畏くも現御神として、　天照大神と御一體に拜し奉られてゐる。故に、神道は萬世一系の　天皇に絶對的に奉仕して、皇國日本の神國としての發展に貢獻することを以て、その第一原理とするものである。

日本民族の祖先は神として崇められ、祖先以來、極めて貴いもの、或ひは深く敬ふものを神として神社に祭つて來た。而して、その最も嚴肅なる國民感情、或は最も高い道德的感情及び最も深い宗教的氣持を敬神觀念と呼んでゐるのである。是が日本民族の心の底に深く育ち來つた傳統的信念である。

現今に於ても、國家の爲、國民としての最高の義務を果して英靈となられた方々を、護國の神として靖國神社に崇め奉つてゐる。しかも、夫れは實に、　天皇陛下の御恩召に出づるところであつて、新に多數の英靈を合祀せられる時、畏くも、屢々靖國神社に行幸あらせられることは、國民の齎しく感泣措く能はざる處である。

斯くの如く我が國の神道に於ける神と云ふ觀念は、日本民族の最も緊張した、嚴肅な、極めて貴い心持である。故に、その神の道と云ふ考へ方、即ち神道精神なるものは、現今の如く極度に緊張せる非常時局には、自然に國民の間に強く湧き起つて來るのである。今日の如く「日本」と謂ひ「皇國」と謂ふ民族的、國家的に湧き起つて來た自覺は、實に神道精神に他ならぬのである。神道を斯る國體觀念及び民族的、國家的信念とは違つた、狭い特殊の信仰生活のみを考へるのは、日本國民の生活原理を發揮す

べく起り來つた神道の學說及び宗教團體とそれをと混同せる誤れる認識に基くものである。畢竟、神道は眞劍にして崇高なる日本人としての純乎たる信念に基づき、又尊嚴極りなき國體意識を本とした國民生活であり、日本精神である。

日本の神代は崇高な嚴かな時代であるが、又明るい世界でもあつた。神を祭るには清淨でなければならぬと信じ、この國の生活に、罪や穢れがあつてはならぬと信じてゐた日本國民は、神代以來、褻シラサ及び祓ハヒ等を重んじつゝ、不斷の活動を續けて、この世の生活を明るく力強く進めて行く事を樂しみとして來たのである。この爽々しく晴ればれとしたさわやかな心持が、又實に日本民族の生活意識であつて、常に希求し實踐してゐるところの民族性である。

故に神道精神は嚴かな緊張せる信念を貫いてゐる方面と、それを繞り、それを包擁してゐる明るい晴れやかなる情操の動きつゝある一面が存する。かゝる神々しく明るき神の道は、清明心に依り實踐せられ、顯現されて行くのである。神道は明るき、美しき眞心を重んじ、純眞にして晴れやかな、正直な心持を貴ぶ生活の中に存するのである。而して實に人々の清明心を國家に結び付け、誠の心を皇室に結び合はせる正しく、明るき、廣き一筋道である。

斯かる神道精神が國民生活の中に表現されて、或は神社となり、或はその敬神觀念を基調としたる民間の神事風俗となり、或は嚴肅な忠君愛國となり、或は日本の農業及び武士道等となつて居るのであ

る。且又、かゝる神道精神を文化的に表現することによつて、特殊なる日本文化が創造され、或は神道に關する種々の學說及び團體的運動の發揚となつたのである。現今の如く緊張せる時代に、神社參拜の氣風が全國的に澎湃として起り、學界・教育界に國體明徴の精神が強く漲り、又種々の會合等に際して先づ宮城遙拜が嚴肅に行はれる等、何れも皆、神道精神が自覺され、神道意識が高調せる現象に他ならぬのである。

以上述べ來りたる事により、神道の特殊な根本的性質、即ち特質とも云ふべきものは明らかにし得たと思ふが、繰返して云ふならば、我が國に於ける神道は、神の道であり、神々の道であつて、神及び道に就て夫々の特殊性が存するのである。神道の神に付いての重要な特質は、多くの神々、即ち天神地祇アミツカミクニ八百萬の神の中で最も高く極めて貴き神は、天照大神におはしまし、最も現實に近き神は現御神と仰ぐ、今上天皇であらせられると云ふ事である。茲に、神道に於ける神の根本的特殊性が存するのである。次に神道に於ける道、即ち生活原理に就いての特質としては、その本質的傾向を考察するに、凡べては祖先への奉仕といふ事を以て根本的方向としてゐるのである。畢竟、祖先の傳統を生かし、祖先へ感謝すると云ふ崇祖觀念がその底流となつてゐる。而して日本に於ける根本の道、即ち我が國民生活の原理は、何を以て最も現實的、實踐的な道としてゐるか、それは、全く君國への奉仕、公への歸一と云ふ事であつて、忠君愛國、或は盡忠報國、若くは至誠奉公の努力である。

茲に於て、この神の特質と、道の特質とを結び合はせる時、そこに敬神崇祖と云ふ信念と、敬神尊皇及び敬神愛國と云ふ信念とを生ずるのである。而して是等の精神が神道の根本的、本質的特色として發達して來たのである。神道とは畢竟、敬神崇祖の信念を基礎とし、敬神愛國の實生活に依つて、敬神尊皇の奉仕を致すところの皇國臣民の民族的信條に他ならぬのである。

斯くの如く、神道精神は肇國以來、我が國史を一貫する力であつて、且又實に我が國民道德の特色を形成し、その眞髓をなしてゐる傳統的信念である。この力を祖先及び自己の實生活の中に見出し、この信念を心の光として、未來の歴史と生活とを展開して行く所に、神道と云ふ民族精神としての信念が生成され、神の道としての日本的信仰が躍動してゐるのである。

神 觀

前述の如く、日本民族の祖先は神として崇められ、祖先以來、極めて貴いもの、或は深く敬ふものを神として神社に祭り來つたのであつて、我が國に於ては、全國否海外に於ても、日本人の在る所、必ず神社の存在を見ざるところはない。而も、この神社の祭神は甚だ多く、所謂八百萬の神の名がある所以である。然し乍ら、此の神々は總て同格ではない。即ち 天照大神は最高最上の絶對神であらせられ、

苟くも諸神とその地位を異にし給ふのである。かの古語拾遺に、

「天照大神は惟れ祖惟れ宗にして、尊きことならびなく、その他の諸神は乃ち子又は臣にして、何れもよく對立し得ず。」

と述べられてゐる如く、實に神中の神であらせられ、その他の神はみな悉く臣下であらせられるのである。

故に、この八百萬の神々は、各々相違した神徳を具へられ、武神としての神、文神としての神、工神としての神、農神としての神、その他種々なる相異があり、或る神は武には非常に長ぜられるも、文に於ては神徳薄く、又ある神は統治上に偉大なる神徳を有せらるゝも、武神としての神徳に於て足らざるものある等、枚舉に追ないが、要するに此の八百萬の神は、夫々天照大神の表現神であり、且表現神としてのみ神々の存在の意味があるのである。故に、天照大神は八百萬神なくしては存在し給はず、八百萬の神は、天照大神の御存在に依つて其の存在を考へられるのであつて、天照大神の御神徳が愈々輝けば輝く程、八百萬の神は其の自らの御神徳發揚の爲に、いよいよ一生懸命になつて、天照大神に歸一し給ふのである。されば、我々の神社に参拜すると云ふことは、その氏神を通じて、天照大神に歸一せんとすることに他ならぬ。

畢竟、八百萬の神は各々その職分を通じて、天照大神に歸一還元するもので、今日我々が特に聲を大

にして提唱する職域奉公も、實はこの神々の歸一精神を現代に再現せんとするものであり、こゝに臣道實踐の理想的な典型がある。

惟ふに我等國民は顯界に於ては、各自の職分、職域を通じて大政を翼賛し奉り、臣道實踐に精進し、幽界にありては、全國神社の神々が、その御神徳を通じて 皇大神に奉仕あそばさるゝのである。これ即ち我等日本人の神觀である。

茲に我等が深く感銘せねばならぬことは、上述の如く日本の特殊性を表現したる全國十二萬の神社が伊勢に齋き奉る神宮を中心として、正に一君萬民と云ふ我が國體の特色を保持し、全く一なる絶對的な中心を本として、他の總てが組織的に、而も自然に纏り結ばれてゐることである。この自然にして統一ある姿は、更に一社々各地に於ける鎮守の社に於て、氏神氏子と云ふ組織となり、神と人との關係として全國的に存在してゐるのである。それと同時に既に氏神氏子と呼んでゐる如く、我が國の神社には日本の國體に於ける家族的國家としての特色の如く、凡ゆる神々が、天照大神を中心として極めて親密な關係に於て御一體となつてをられるのである。換言すれば神々の御關係が、現實に於ける君民一體の活動と同じ姿であるといふことである。

これは自然の姿であり、當然の歸結ではあるが、神社は在つても我が國體の特色を顯現してゐること、とりも直さず、皇國の國體を培養し、よく國體の精華を發揚する爲に、神社の崇敬及び神祇の祭祀

が、如何に重要な意義を持つものであるかを自ら理解せしむるものである。

日本文化の根源力

如何なる民族、又は國民の文化と雖も、必ずそれ自身何等かの貌に於て特色づけられた個性・特質を保持して存在してゐる。而して、水準、或は形態の相違こそあれ、それ等の各個が全體的に等同であるとは考へられない。却ち或る意味に於て、世界の文化史的過程は、斯かる文化的異別性の闘争記録であると云ひ得るであらう。しかし乍ら、文化闘争の結末が必ずしも武力闘争の結末と相伴ふものでないことはいふまでもない。如何に優強なる武力が決定的な勝利を占め、その戦勝威力を背景とする民族の政治的強壓が敗者に加へられても、其の壓力は、必ずしも徹底的な効果を示し得ず、却つて戦敗民族の文化が逆に優勝者を征服するに至つた幾多の實例が存在する。平和の際に於ても、必ずしも優強國の文化が、劣等國の文化を服従せしめ得るとは限らないのである。

かく觀じ來る時、一般に、或る民族又は國民の持つ文化個性は、二つの面に於て各自の働きを示めることが窺知出来る。即ち一つは、他の文化の侵襲に際して、それに對應反撥する働きであり、他の一つは、積極的に異國又は異民族の中に進入して、自らの文化を恢弘する働きである。この反撥する働き

と、恢弘する働きとは、一應相互の矛盾を考へさせる。何故なれば、若しも文化個性の排他性が絶対原則的であれば、同時に、それは他面に於て恢弘の不可能を意味するからである。しかし乍ら、文化が或る民族の占據地域又は國家領域の境界線を越えて流入する場合、それが如何なる手段方法に依るを問はず、流入文化と被流入國の文化とは、互に可容限度を以て接觸同交する。この可容限度を内觀したるものが、即ち個性の限度であつて、可容限度の濶いもの程、排他性が少く、従つて又恢弘性が大であるといふことになる。

我が日本文化の躍進過程は、周知の如く實に悠遠の歴史を持つ。其の間、純乎として日本的に固有なる文化個性を基本とし、一切の外來文化の長所を統合しつゝ、修理固成の神道の大道を進み、而して世界の人類的に、至大崇高なる絶対眞理への、最も理想的な歩みを續けてゐるのである。

眞理を欣求することは、凡ての國の文化の進程に通有的なものであつて、敢て日本文化のみに限つたものではないが、西洋諸國の文化は、理論の上のみ打ち樹てられた文化であり、單に概念のみを捏ね上げたところの眞理を標的とする文化である。従つてそれは血と肉とを持つた人間の文化ではない。尠くとも日本文化は、西洋文化の如く人間生活を遊離して、理論のみを弄ばざる所に、本質的な温かさといふところがある。その温かさこそ、接觸する他國文化の凡てを、除々に、知らず識らずの間に熔かし込んでゆくのである。日本文化の持つ特質と個性は、恐らくその熔融過程の中觀取し得るのではなからうか。

會て、黎明時代に於て、東亞細亞に國を打ち建てゝゐた諸國は、或る程度まで日本文化と相似的な文化を持つてゐたものと想像される。而して、又相互の交通に由つて受くる所の影響も、略ぼ同様であつたと考へられる。即ち、凡て東亞の舊文化國は、我が日本と同一環境の中にあつたのである。かゝる時、大部分の國は他の國々との文化の接觸に當り、絶對排他主義をとり、固陋な因襲文化の介殻内に蓋を閉ぢて籠居するか、さもなければ、より強き侵襲文化の新しく鋭い力に打ち破られて退嬰するか、何れかの途を採つた。斯くして現に見るが如き、本然の個性を失ひ去れる雜種文化となつたのである。然るに我が日本は原種の本來的個性を永遠の後代に保持しつゝ、而も進んで凡ゆる外來文化を包容攝取し、これを日本的全一生命の中に熔かし込み、その絶えざる創造進化の路程を歩み進んで來た。茲に日本の文化個性の特異質を見ることが出来るのである。

文化の本質が宗教にある事は、既に多くの學者に依つて汎く認められた所である。而もその宗教文化に於て、日本のそれは特異な發達を示してゐる。古く惟神の道と呼ばれ、日本民族固有の古宗教信仰に胎を持つものが、現代社會の道念に訴へて、果して宗教と謂はれ得る形態を具へてゐるか否かは別として、事實に於て、會て外來的であつた儒教も、佛教も、陰陽道乃至道教のたぐひも、久しき歲月の間に日本化され、現今に於ては、殆ど全一的な日本宗教體を形成してゐる。會ては、到底日本化することの不可能を信ぜられたる基督教でさへ、最近著しい同化色を示めてゐる。

かくの如く外來文化を採用し、日本化し來れる、本質的な固有の力は、實に神道である。即ちこの外來文化を攝取し、同化し、展開して行く「は。た。ら。き。」そのものゝなかに、神道の文化的な力が存在するのである。換言すれば、同化の根源的な特異力は、神に本づいてゐるのである。故に、儒教及び佛教を始め種々なる外來思想、學說、文化を、日本化する「精。神。的。な。は。た。ら。き。」を指して、敬神崇儒或ひは敬神崇佛等と云つてゐる。由來、神道は物を生み、力を増すところの生々發展の靈力に對する信仰をもつてをり、これを「むすび」(産靈)と稱してゐるが、「むすび」といふ靈力は、二つの物を結合し、新しき物を生み出す所の「は。た。ら。き。」を有してゐるものである。かゝる點より考察しても、神道は偉大なる日本文化を創造しつゝある、根本の力であると云ひ得るのである。

「神から來てゐる力」それが、神國日本歴史の全時代を通じて絶えず日本民衆を勵まし勇氣づけて、理想の目標へと雄々しき前進をなさしめてゐるのである。それは、神の博く大なる御心を心としたる前進であり、神意の金剛不壞性を支柱としたる精神的建設を理想としての進前である。

勿論如何なる民族も神を持つてゐる。それは過去に於てのみではなく、現代に於てもさうである。會て、印度人は佛と呼ばれる神を持つてゐた如く、現代でもそれを持つてゐる。歐洲諸國に於ける基督教の神に付いても、同じことが云へる。しかし乍ら、彼等はその神に於て生活してゐない。神に對する信仰と、彼等の社會生活とは互に絶縁され、別個の極へ向つて流動してゐる。神を中心に全體的な生活が

營まれてをらず、民衆の各々は、小さな「個」の爲めの生活を營んでゐる。

故に神は在つても、夫は只天上に隔絶したる存在であつて、地上の人間生活の力ある基底とはなつてゐない。同時に又、それは民族理想乃至國家理想の中心となつてゐないのである。それ故に、神の道はかゝる國には漸次衰滅して、我慾的な人間意力が神の力を無視し、神を追放せんとする兇惡な現代世相を示現し、野蠻的な侵略主義鬭争が、歐洲の地上を血に染め續けるのである。而して眞實に神と共に生活し、神意を地上に布くことを國家的使命とする日本にのみ、凡ての宗教が吸収されつゝ、全一生命に活きんとするのである。日本文化の根源的な特異力は、かゝる意味に於て「神から來た力」であると謂へる。

更に此の「神から來てゐる力」は、神の眞理を認めることが出来る。眞理なるが故に、それは絶対無礙であつて、親しみ近づき來るものゝ總てを受容して、毫末も害されざる金剛不壞性を有し、而して他を同化し、渾一生命の中に作用せしめる力を發揮するのである。我慾的個人主義の理論に依つて歪曲せられたる西洋文化の中には、此の眞理は絶対に認め得ないのである。故に、歐洲に於ては屢々平和が不當に脅かされ、名分を具へぬ侵略戰の爲に鮮血が無慘に流され、尙、時としては、其の不當なる平和への侵寇が東亞細亞まで伸ばされようとするのである。

現に日本は今、斯かる兇暴な侵寇を排除せんが爲に、神の國として、神の眞理を奉ずることに於て、世界唯一の國として立つてゐる。而して其處に我々は、日本の文化個性の積極面を顯示する八紘一宇性

の發揮を見るのである。

嘗て内村鑑三氏が著した「地人論」に依れば、

「南半球の各大陸は北半球の大陸が開發された後に、その文明の力を南半球で發揚せんが爲に神様が殘しておくのである。人類は北半球に於て文化創造の爲に鍛鍊せられ、その鍛鍊した力で南半球に及ぶ。歐洲はアフリカを同化してその文明をこゝに發揮し、北米は南米を同化してその文明をこゝに發揮し、南洋・濠洲は日本並びに支那の文明を發揮して、それから此處に及ぶ可きである。世界の文明が西漸の極に達する時はやがて南漸する時である。今やその時が近づいた。かやうにして地球は神がこの世界を創造した文化普及の目的が達せられるが、これを完成するのが我々の義務であるとし、東洋文明は東漸して日本に來り、西洋文明は西漸して日本に來り、結局は東西文明の様々の區別も最後に統一されるが、その統一の使明は日本の天職である」

と述べて、世界文明の統一の使命は日本の天職であると喝破してゐるが、全世界の凡ゆる文化・文物、即ち支那の儒教、印度の佛教の如き内省的、靜觀的な東洋文化より、向外的、活動的な西洋文明に至る迄、何れも皆、秩序整然として日本に提供されて來た。我等は悠久三千年の久しきに亘り、これを日本文化の根源的な特異力、即ち「神から來た力」に依り、國民的生命の内容として攝取し、見事に活用し得るに至つた。今や、我等は動靜一如の新人類文化の創造に向つて邁進せんとしてゐる。而して建國

の大詔に掲げられたる「八紘一宇」即ち世界を一つの家族とすると云ふ、高邁無比の大和民族の大理想が達成せられる日も近きにあるのである。

國體の理念・實相

太古肇國の黎明の中に響く嚴かな神の御聲、即ち神勅の降下は、同時に國體の生成である。我が日本民族の國土的並に歴史的發展力は、この神勅の高らかなる宣言と共に出發を開始し、且これに依つて、自己の推進過程を表現したのである。國體の生命はこの表現を通して生成發展し來つたのである。而してこの發展的自己形成の指導觀念として、常に働いたのが「神の言葉」であつたのである。

靜かに思ひを三大神勅に致す時、第一神勅に於ては、我が國體の理念が端的に表現されてをり、第二神勅及び第三神勅に於ては、その具體的實現が志向されてゐることを知るのである。一つは國體の壯大なる外觀であり、他はその深遠なる内容である。この表裏を併せて把握することに依り、我等は始めて國體の完全なる相を見ることが出来る。

天地ノ初ノ時 高天原ニ成リマセル神ノ御名ハ天之御中主神、次ニ高御座巢日神、次ニ神產巢日神
これは古事記の冒頭をなす莊重なる起句であつて、言葉の最も日本的な律動と印象とが此處より出發

してゐる。こゝに注意すべきは、「成リ」「成ル」と云ふ言葉であつて、「成ル」は生ずるの義である。而してこの「成ル」は次に「生ム」の働きに轉するのである。即ち

於是天神諸ノ命以チテ、伊邪那岐命・伊邪那美、二柱ノ神ニ、「此ノ多陀用幣瓊國ヲ修理リ固メ成セ」ト詔チテ、天沼矛ヲ賜ヒテ言依サシ賜ヒキ。

とある神勅に依りて、伊邪那岐命、伊邪岐美命の二柱の神は、淤能基呂島に天降り坐して、御子水蛭子淡島を「生ミ」給ひ、爾來、神の御働きは一貫して「生ム」となつてゐる。この「成ル」より「生ム」への働きの積極化に於て、我々は日本の獨自的な形成を看取する。「成ル」は未だ自然の力を脱しないが、「生ム」は既に文化的な力である。日本國土の發展は、民族の盲目的な衝動にのみ基くのではなく、それが一定の目的意識に導かれてゐたことが考へられるのである。換言すれば、日本の生成は常に理性に依つて命令され、理念に依つて指導されてゐた。伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神に啓示された神勅は、かるる理念であり、それに依つて自然の生成は、神意による生産へと轉化してゐるのである。

かくて日本に於ては、神の言葉が常に發展を指導した。國土は單に自然物として存在したのでなく、神の愛兒として生産されたのである。そこに生命の分散、對立、解消はあり得ずして、統一・融合・成長があるばかりである。

神意は森羅萬象生きとして生けるものに滲透し、あらゆる存在は神の體系としてのみ存在し、相互に

連繫された。神はこの一體性の原理であり、この原理の圏内に於て「國體」が形成されたのである。かゝる事は、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱の神の御事業に依つて實證されてゐる。

而して最後に現はれたのが統治者、主權者の確立である。即ちこゝに、天照大神が生れ給ひ、日本國土の一體性原理は、この神に依つて始めて具體的に表現され、この神の下に一切が還元歸一し、統合されることになつた。この萬物一體化、この世界秩序こそは、人類最高の理想であり、永遠の眞理でなければならぬ。日本は、その肇國の太初に於て、この理想を實現し、この哲學的眞理を具現したのである。而してこの不滅の榮譽が、天地幽昏、人獸未分の原始草昧の世に、既に此の亞細亞の一孤島の上に輝き出で、悠久二千六百餘年の時の流れを貫いて、日の神の子たる我々の世に迄、映え續けて來たことを思ふ時、我々はたゞ感涙に咽ぶのみである。

さて、この日神御降誕に至る迄の過程に於て、この一體性の原理そのものは、國土の中に成長し、確立されて來たのであるが、これは突如として現はれたものでなく、又、當初より死物の如くに存在したものでない。日本神代の歴史は如何なる場合にも、この生命的原理を包藏して展開し、一つの萌芽が遂ひに開化するに至る如く、日神御降誕と共にこれを全國土の上に顯現せしめたに他ならぬのである。

天之御中主神はその名の示す如く宇宙の中心にありて、全世界を主宰する神であらせられるが、この中心より無限に擴大伸長する力は、高御產巢日神に依つて代表され、同時に一切をこの中心に牽引し統

合する力は、神産巢目神に依つて示されて居る。この二神のはたらき、即ち遠心的な伸長力と、求心的な統合力とは、生命組織の二原則であつて、凡ゆる有機體に内在する力であるが、この生成化育の働きこそは「ムスビ」であり、日本國體の形成力としての、神代以來一貫して作用する發展の原理である。

「神ながらの道」もまたこの謂に他ならぬのである。それは神に依る人の支配ではなく、また人爲による自然抑壓でもない。神人未だ分れざる時、萬有を慈育する神それ自身の法則の發動であり、それが毫末も損はれることなしに、神の御手に携はれつゝ人の世に傳承され來つた時、始めて國家經營の最高道德となつたのである。それは神代には「ムスビ」と云ふ生の事實であつたが、今や神の子等にとりては「シラス」と云ふ生の使命となつた。こゝにかの尊嚴偉大なる天照大神の神勅を拜したのである。

四リテ皇孫ニ勅シテ曰ク、葦原ノ千五百秋ノ瑞穂ノ國ハ、是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、宣シク爾皇孫就イテ治セ、行矣・實祚ノ隆エマサンコト、マサニ天壤ト窮無カルベシ（日本書紀）

我々はこの天壤無窮の神勅が、如何に日本神代の生活、事實の理念表現に他ならぬかを知る可きである。それは神意の偶然的な啓示ではなく、却つてそれは總括的な結論である。事實の内面的な、暗黙性は、この神勅が語られた事に依つて、自己の外面に輝き出で、未來を光被する理念となつた。事實は常に語られ、語られる事に依つて自らを導かねばならぬものである。神の事實は斯くして語られ、語られる事に依つて神の子の理想となつた。隨にこの神勅に依つて、日本は日本の理想を有ち、同

時に運命を有つた。

上述のことは、この神勅が我國體の總括的規定であり、その理念的表現である、と云ふ事と同一である。國體そのものは、神代に於ては形成されつゝあつたが、未組織的な状態にあつたのであつて、この神勅を契機として自己を形態化し、自己の未來と發展の方向とを與へられた。たとへ現實的な形に於て擴充されるのは、この後の歴史に俟つとは謂へ、此處にその一體的な基礎の確立を見たものと云ふ事が出来る。

「是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ」

この御言葉は日本國土の主權者を肇國の當初に於て指示確立し、主權に對する紛更を永遠に排除したるものであり、苟くも他姓他系の者は斷じて皇位の覬覦を許さず、必ず 皇祖の御血統に限ることを明かにして、萬世に一系たる我が皇位の絶對性を垂示せられたるもので、茲に我が國體の根本は確乎として定められてゐる。

次に「治セ」と云ふ御言葉である。武甕槌、經津主の二神が 皇祖の神勅を出雲の統治者大國主神に傳へられた御言葉に曰く

汝ガ主ハケル葦原ノ中國ハ我が御子ノ知ラサム國ト言依ザシ給ヘリ。カレ汝ガ心奈何ニゾ。

茲に「ウシハタ」と「シラス」の二つの言葉の相違がある。この二語が我が國に古くより存在し、而

してこの二つの語が古くより厳しく區別せられて使はれてゐると云ふ事實——斯る事實が、よく天皇と臣民との統治關係に就いての考へ方、感じ方を示してゐると云ふことに注意すべきである。

「シラス」は「シロシメス」とも云ひ、共に語源は「シル」即ちよく知るの意味である。神の子にとつて國土の統治は、同時に國土の認識でなければならぬ。統治するものと統治されるものとは、共に神によつて生産形成され、神の分靈としての「ワケミタマ」に他ならず、故にそこに統治と被統治との對立がなく、却つて相互に認識することに依つて、相互に同一性を反省し、共に神意を奉體するといふことが「シラス」の眞義である。

この原理は神の統治範圍が擴大され、そこへ包容されて來る多くの異種族に對しても適用されるのである。即ち民族を同化し、統一し、之を主宰して全一的一體性にまで生成化育するには、その自性を知り、現在を知り、未來の動向を察し、一切を吾が存在と同一の根源に於て認識せねばならぬ。他を知らざるは、他を永遠に異物として助長せしむる他に、何等の意味もないことである。實に「シラス」は知ることによつて愛し、愛することに依つて治めると云ふ統治の最高形態であり、是に依つてのみ「八紘を宇と爲す」といふ日本政治の理想は實現されるのである。「シラス」なくして國體の進展持續なく、世界に對するこの普遍性、絶對性はあり得ないのである。

これに對して「ウシハク」は、大國主神の出雲政治の特徴である。本居宣長は「古事記傳」に於て

「ウシ」は「主」として、或る處を我が物として領する義であり、「ハク」は「刀をはく」、「脊をはく」等の「はく」の如く、わが身につけて持つてゐるの義であらうと云つてゐる。即ち主權者として土地を領有し、支配し權力によりて統治することを意味してゐる。かゝる「ウシハク」は、又他の「ウシハク」に依つて否定されなければならない。他の如何なる國家も「ウシハク」を基礎として樹つことは明かであつて、そこに國體の存続があり得なかつたことは當然である。

「ウシハク」にあらずして「シラス」こそは、天皇政治の本質である。天皇は國土の如何なるものをも私有し、獨專し給ふことはない。何故ならば、それはもとゞ 天皇と一體であるからである。天皇は天之御中主神・天照大神以來、宇宙の萬物を生成化育する靈力を、政治の力として繼承し給ひ、天津日嗣の言葉の如く、國土を自らと同一視し給ふのである。「シラス」は與へて要求することなき至公至平の優渥仁慈なる天皇政治の本質であり、産靈の精神の歴史的發展に他ならぬものである。

從來我が國人は、皇室のことを「オホヤケ」と呼んだ。「オホヤケ」は「大宅」であり、「公」である。皇室が「大宅」であると云ふ事は、やがて我々國民が皇室に對して等しく「小宅」であることを暗示するものである。かゝる精神を根柢として皇室と臣民との關係を考察する時、一つが他を私有すると云ふ關係はあり得ない。蓋し皇室と臣民とは對立的な二つのものでなく、もとより同じ「宅」であるからである。而して君臨すると云ふことは、結局同じ「宅」の最尊貴者が、己が「家族」の利益のために、事

を行ひ給ふに他ならぬのである。故に、我々日本國民は、常住坐臥に、かゝる有難き皇室對臣民の關係を念頭に置き、皇室の御榮榮と國家の隆盛とに日夜獻身的努力を捧げてゐるのである。

次に皇位の天壤無窮なること、茲に日本の永遠性が約束されてゐる。實祚の無窮は實に「ムスビ」の史的繼續に他ならず、宇宙創造の天神以來、世界を修理固成せられた伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神を通じて、淵源流續する處の國土生成の原理が、人代史の上に傳承展開したるものに他ならないのである。

この神勅の源泉は、既にかの沼矛の神勅、御頸玉の神勅に響く御聲の律動をうけてをり、神代の史的根據に依つて、動かす可らざる確實性を與へられてゐる。實祚の無窮はもはや一つの空想ではなく、それは既に嚴乎たる事實により生れた確信であり、經驗に基く斷定であつたのである。故に、これを以て豫言と云ふは當らず、それは實に神に依つて先取された結論である。

天照大神の御眞意は、實祚の無窮を以て子孫の政治的使命とし、國家的理想とするにあらせられたのであらうと拜察する。歴史が活潑なる發展を開始するのは、これがその動向に一つの課題と、一つの目的意識を與えられた時のみである。實祚の無窮は、むしろ天津日嗣の永遠の御使命であり、あらゆる「つとめ」を超越せられた、至尊に於かれての唯一の大孝であらせられる。

國體の理念は、既に鮮明せられた。今や國體を構成する眞理が如何にして實現され、その本來の完全

なる態様に於て、國家全般の中に顯現されるか。

天照大神手ニ寶鏡ヲ持テ給ヒテ、天忍穗耳尊ニ授ケテ祝ギテ曰ク、

吾兒此ノ寶鏡ヲ視マサムコト、マサニ吾ヲ視ルガゴトクスベシ、與ニ床ヲ同ジクシ、殿ヲ共ニシ、以テ齋鏡トナス可シ。

又勅シテ曰ク

吾ガ高天原ニ御ス齋庭ノ稻穗ヲ以テ亦吾ガ兒ニ御セマツル（日本書紀）

此ノ鏡ハ專ラ我ガ御魂トシテ、吾ガ御前ヲ拜クガ如齋キ奉レ。（古事記）

これが第二神勅であつて、此の神勅こそ、第一の神勅たる天壤無窮の神勅と論理的に聯關し、それと表裏一體をなすものである。

人々は鏡に向つた時、鏡に映つた自らの顔を見ると同時に、吾が親を想ひ、又祖先を想ひ浮べるであらう。寶鏡の神勅は、この精神を明示されたものであり、歴代の天皇はこの鏡に向つて御親らの龍顏を映し給ひ、御自らを自照し給ふ時、龍顏は皇祖化せられ、御心も亦、皇祖の御心に同化せられ、皇祖と一體化し給ふ可き旨を教示せられたものと拜察する。陛下が毎日、この御鏡に對して御拜し遊ばされるのは、玉體の内省を通じて、皇祖の御顔を偲び給ひ、更に又皇祖の肇國の大精神を把握し給

ふ爲であらせられると拜察する。故にこの寶鏡の御拜は、天津日嗣の天皇の最も神聖なる御天職として、「むすび」の精神を體得し、「しらす」の大業を完成し給はんが爲に、その御誓想を皇祖より受け給ふと云ふ、眞に重大なる意義を有するものである。

かくして、天皇が皇祖天照大神そのまゝの大御心にならせられ、その大御心を臣民に注がせ給ふことに依りて、我々臣民は、その大御稜威に光被し、恩顧に浴するのである。これ、即ち御鏡御拜の神勅の御精神であると拜察する。

惟ふに、御鏡は誰も知る如く、三種の神器の一たる八咫の鏡であつて、長くも神宮に齎き祀らせられる、皇祖天照大神の「ミタマシロ」であり、第十代崇神天皇の御代まで、宮中に齎き祀らせ給ふたものであるが、此の間、同床共殿でゐらせられたと云ふ事は、實に容易ならぬことである。終日天照大神と御同座あらせられる天皇の御精神、御態度、これを拜察するだに、實に恐懼す可き事と拜察せらるゝのである。而も斯ることは、一つの重大なる行事をぬきにしては考へられない。即ち天皇が常に神と共に御語らひ給ひ、神と共に御寢食遊ばされて、神と御一體の御境地、否神ながらの境地にあらせられて、政治を御總攬遊ばされたことである。

故に、我が神國日本の政治は、斷じて權力の發動ではなかつた。權力はむしろ政治の無力である。我が國の政治は、天皇が祭祀を遊ばされる御精神の發露したるものである。即ち祭祀は我が民族の自性

であり、生命であり、生活であるのである。この祭祀に依つて國家百般の生活が發露するのである。

而して、この「同床共殿」は、愛の精神であり、「以爲齋鏡」は、敬の精神を表されたものであると拜察する。この愛敬は上下の關係に區別さる可きものにあらず、實に上下を一貫し、上下を一體たらしめる關係である。更にこの神勅には、祖先崇拜の大精神が表示されてゐると拜察する。祖先の大生命を無窮に發展せしめ、過去・現在・未來を一貫したる「中今」の思想を中核とし、過去を十分に認め、未來をも十分に認めた上で、現在を中心として努力し、建設せんとするのが、即ち祖先崇拜の本義であつて、こゝにもこの神勅の偉大性が拜せられるのである。

神鏡奉齋、即ち齋鏡の神勅と共に齋庭之稻穂の神勅が下された。齋庭は忌み清められた庭、即ち最も清淨なる場所の意味である。かく神聖なる場所にある「いなほ」こそは、人間の生活力の源を擔持し人類の生存上一日も缺く可らざるものを表示するものに他ならぬ。この稻穂は保食神ウツクモツが始めて五穀を生じ、天熊大人が之を天照大神に奉つた時、大神は殊の外喜び給ふて、

是ノ物ハ則チ顯ウツク貝シロ蒼アヲ生シタノ食ヒテ活クベキモノナリ

と宣ひ、粟・稗・麥・豆を以て陸田種子となし、稻を以て水田種子となして、天上の御田に植えしめられて以來、今日に至るまで我々の生活上不可欠のものとなつたものである。

天照大神が天孫を降臨せしめ給ふに當り、三種の神器と共に之を下し給ひたるは、深き大神心の存する

ことゝ拜祭する。即ち三種の神器と稻穂との關係は、恰も、精神と肉體との關係に等しく、そこには靈肉不二、心身一體なることが暗示せられてゐる。是は、眞に重大なることであつて、これに依つて我が祖神は、理念の單なる抽象を齎められたものと拜祭する。彼の釋尊にしろ、クリストにせよ、何れも慈悲及び愛を説いてゐるが、それを實現の力に依つて裏付けることをせず、理論の崇高さに實踐の逞しさが伴はなかつたが爲に、彼等の祖國は、たゞ頽廢と滅亡との一路を辿つたに過ぎなかつたのではなからうか。

しかるに、我が 皇祖が人類に一日も缺く事の出来ない、生命の資料たる稻穂を皇孫に授け給ひしは實に有難き御垂示と感銘せざるを得ない。即ち 皇祖の御垂示は、精神と物質との兩面即ち物心一如の世界を知らしめ給ふたもので、産靈の活動は單なる精神のみでなく、常に實質實體を伴ふ可きものであることが頷かれる。我が日本思想の本質は、決して單なる觀念論及び唯心論ではなく、常に實質實體に即するものである、と云ふ事が茲に深く理解されねばならぬ。

天津穗嗣は、天津日嗣を豫想せずして考へられず、天津日嗣は、また天津穗嗣を必然の結果として伴ふてゐる。兩者は國體と云ふ聖なる事實の表裏に外ならず、共に合して始めて神意の傳承が行はるゝのである。

高皇產靈尊因りて勅して曰く

吾ハ則チ天津神籙及ビ天津磐境ヲ起シ樹テテ、マサニ吾孫ノ爲ニ齋ヒ奉ラム、汝天兒皇命・太玉命・

宜シク天津神籬ヲ持チテ、葦原中國ニ降リテ、亦吾孫ノ爲メニ齋ヒ奉レ。(日本書紀)

第二神勅は 天照大神が皇孫に直接授け給ふたものであるが、第三神勅たるこの神籬磐境の神勅は然らずして、高皇產靈神が後の中臣氏の祖先たる、天兒屋命及び忌部氏の祖先たる天太玉命の二神に對して、

惟ハクハ爾ニ神亦同ジク 殿^{ミツミ}ノ中ニ侍ヒテ、善ク防ギ護ルコトヲ爲セ。

と命じ給ひ、皇孫の御安泰に深き御配慮をよせ給ふて授けられたもので、「自分は高天原に於て皇孫の御爲に神籬の御祭をするぞ。汝等二神も亦この天津神籬を捧持して、葦原の中國に降り、皇孫の御爲にこの神籬の祭をなせ。」と云ふのがその意味であると拜祭する。故に、第二神勅が 天皇御親らの御祭であらせられるに對し、この神勅は國民より、皇望の御爲にする御祭である。

天津神籬の天津は美稱であり、「ヒモロギ」は「ヒコモルキ」と云ふ意味で、とは靈、つまり神靈のこもる木と云ふ心である。

天津磐境の磐境は祭場・齋場・祭壇の意である。又「イハ」には祝ふ意味及び堅固な意味があり「サカ」は榮ゆる意味及び境界の意味があつて、齋庭とはつまり堅固なる境域であると共に、彌榮であり、存在の確實性と發展性とを表はす兩義の語である。

要するに「イハサカ」は齋場、「ヒモロギ」は神靈の鎮ります木(神)で、神籬磐境とは、名稱は二

つなれども、共に神聖不可侵なる一事實の表現である。故に磐境といふ場所がなければ神籬は考へられず、神籬なき所に磐境がない。祝詞に

「此ノ處ヲ嚴^シノ磐境と神籬サレ立テ招^キ奉^リ齋^キ奉^ル」

とある如く、二つにして一、即ち不二一體の聯關を保つものである。

抑も、この神勅は、我が日本民族の宇宙觀と世界觀との最初の閃きであり、我が民族の理想信仰の端的な表現である。第二神勅を道德的と云ふならば、これは宗教的である。第二神勅の神事はあく迄日本の特殊性を保つものであるが、第三神勅は全世界の上に擴大され得る一つの普遍的な眞理として、日本民族の哲學的意識を表白するものである。

神籬は我を顯はし、神を顯はし、磐境は資料を顯はし、場所を顯はしてゐるが、この我境一體こそは日本の一體性原理の象徴に他ならぬ。場所を認めなければ、我を知ることが出来ない。我と場所とは一體であつて、別個ではない。

この神勅が宇宙の最高眞理たる我境一體を垂示せられたことは、即ち 天皇と臣民との一體性を、しかと明示したることを教へてゐるのである。即ち 天皇は神籬であり、臣民は磐境である。

祭祀と日本民族の生活

古代の祭祀

一般に祭祀の起原として説かれたるものは、かの天岩屋戸隠の際に於ける八百萬の神々の奉仕であるが、この間に神を祭る者の心境が、あからさまに示されてゐる。

是ヲ以テ八百萬ノ神天安之河原ニ神集ヒ集ヒテ、高御産巢日神ノ御子思金神ニ思ハシメテ、常世ノ長鳴鳥ヲ集ヘテ鳴カシメテ、天安河ノ河上ノ天堅石ヲ取り、天金山ノ鐵ヲ取りテ、鍛人天津麻羅ヲ求ギテ、伊斯許理度賣命ニ科セテ鏡ヲ作ラシメ、玉祖命ニ科セテ八尺勾魂ノ五百津ノ御須麻流ノ珠ヲ作ラシメテ、天兒屋命、布刀玉命ヲ召ビテ、天香山ノ眞男鹿ノ肩ヲ内拔キニ拔キテ、天香山ノ天波波迦ヲ取りテ、占合ヘ麻迦那波シメテ、天香山ノ五百津眞賢木ヲ根許士ニ許士テ、上枝ニ八尺勾魂ノ五百津ノ御須麻流ノ玉ヲ取り著ケ、中枝ニ八尺鏡ヲ取り繫ケ、下枝ニ白丹寸手、青丹寸手ヲ取り垂デテ此ノ種種ノ物ハ布刀玉命布刀御幣ト取り持クシテ、天兒屋命布刀詔戸言禱ギ白シテ天手力男神御戸ノ掖ニ隠リ立タシテ、天宇受賣命天香山ノ天之日影ヲ手次ニ繫ケテ、天之眞折ヲ鬘ト爲テ

天香山ノ小竹葉ヲ手草ニ結ヒテ、天之岩屋戸ニ汗氣伏セテ踏ミ登扞呂許志、神懸爲テ胸乳ヲ掛キ出デ、裳緒ヲ忍シ垂レキ。兩高原動リテ八百萬ノ神共ニ咲ヒキ。

於是天照大御神怪シト以爲ホシテ、天石屋戸ヲ細メニ開キテ内ヨリ告リクマヘルハ、「吾ガ隠リ坐スニ因リテ、天原自ラ闇ク、亦葦原中國モ皆闇ケムト以爲フヲ、何由以天宇受賣ハ樂爲、亦八百萬神諸咲フゾ」トノリクマヒキ。爾チ天宇受賣「汝ガ命ニ益サリテ貴キ神坐スガ故ニ歡喜咲ギ樂ブ」ト白シクマヒキ。如此言ス間ニ、天兒屋命、布刀玉命其ノ鏡ヲ指シ出デテ、天照大御神ニ示セ奉ル時ニ、天照大御神遙寄シト思ホシテ、稍戸ヨリ出デテ臨ミ坐ス時ニ、其ノ隠リ立テル天手力男神、其ノ御手ヲ取りテ引出シマツリキ。即チ布刀玉命尻久米繩ヲ其ノ御後方ニ挂キ度シテ「此ヨリ内ニナ遣リ入リマシソ」ト白言シキ。故天照大神出デ坐セル時ニ、高天原モ葦原中國モ自ラ照リ明リキ。

(古事記)

これに依ると一度、天照大神が、天岩屋戸の中に御隠れになるや、高天原も葦原中國も悉く闇く、萬の神の妖が一時に起りて、その生活の幸福は根底より破壊せられるに至つたのである。茲に於て、謂はゆる八百萬の神々の奉仕となり、その全力を擧げ萬事を盡して、大神の意を和け迎へ、その出現を冀ひ再びもとの幸福を取戻す可く努めたのであるが、その幸福は、大神の御出現によりもと通りに還つてゐる。

今この事實に依つて、高天原及び葦原中國の平和は、全く天照大神の御後威の下に存在した事、自らの生活は一つに大神の御心によるものであるとなした心持、大神の神威の中にその幸福を求める可くなしたる心持、物を捧げ歌舞を奏して大神の意を和らげ迎へることが出来るものであるとなした心持、更に大神は必ず自らの生活を加護し給ふものであるとなした心持等、手に取る如く描かれてゐる。これが天岩戸前の奉仕の意義であり、大神に對する尊崇・信賴・服従・奉仕・感謝等の心持、更に進んで神に歸一せんとする態度を見ることが出来るのである。而してこれがまた祭祀の起源となつてゐるのであつて、自ら祭祀の意義を知ることが出来る。

翻つて古代の人々が、その全心全能を神に捧げた、謂はゆる祝詞について神人の關係を見るに、その中には神に祈願する意味が存することは云ふ迄もないが、それは比較的新しい時代に屬すると思はれるものに限られてゐるのであつて、從來比較的古い時代に屬すると思はれるものは、神に感謝する意味のものが多し。これに依ると比較的古い時代の祝詞は、感謝の精神を最も重要な本質としてゐるのであつて、祝詞の本質とも思はれる祈願の心を必ずしも第一義としなかつたと云ふことが出来るのである。祈願の心は神に求める心であつて、利害の關係を豫期したるものである。後代に於ける加持祈禱に見る態度の如きは、寧ろ神人關係に商賈根性をさへ思はせる如きものがある。

自然宗教（自然教）に於ける祈禱は、その表現は極めて幼稚である。故にそれは神に向つて信者が或る事物を要請する事に外ならぬ。それは吠陀に於て信者と因陀羅の間に表はるゝ如く、之を上げるそれをよくれの關係であつて、這種の祈禱は神人の商賣關係に外ならぬ。それは拉丁語に所謂神人の利益交換である。是は自然教に於て表はれる所の祈禱であるが、是れ全く人が人間以上の神と人間的に交渉關係を結ばんとする欲求の表現に外ならないのである。

と云つてゐる。

かゝる一般民族の宗教意識の間にあつて、日本民族の祖先が、求める心の祈禱を離れ利害の外に立つて、至美至純の感謝の心境に於て神に對したことは、純美高雅なる民族の特質を語るものである。後世に於ける進歩したる宗教ならいざ知らず、原始宗教の境地にあつて、尙よくかくの如き精神を保持し得たのは、我等の祖先にのみ賦與せられた特質であると思はれる。

神武天皇が國土を平定せられて、皇祖天照大神を祭祀せられた時

四年春二月、壬戌ノ朔ノ甲申ノ日詔シテ曰ク「我ガ皇祖ノ鑑天ヨリ降り鑒リテ朕ガ躬ヲ老シ助ケ給ヘリ。今諸ノ虜ドモ巳ニ平ギ海内無事ナリ。以テ天神ヲ郊祀リテ大孝ヲ申ブ可シ」と。乃チ靈時ヲ鳥見ノ山ノ中ニ立ツ……以テ皇祖ノ天神ヲ祭リ給フ。（日本書紀）

と云ふ記事がある。この祭祀が、祖靈の加護に對する報恩奉謝の御精神に依つて行はせられたものであ

ることは、明かに拜察出来るのである。

尤も我が國古代の祭祀が、祈願の要素を含んでゐなかつたとは云ひ得ないが、他民族間の祭祀が、多く祈願を第一要素となしたるに拘らず、日本民族の祭祀が、飽くまで感謝の精神を主としたのは、やはり民族の特色とするに足るものであると思ふ。

一體祈願が、求める心より出でたるものであるに對し、感謝は、報恩反始の心より生じたるものである。これが至美至醇なる民族性を示してゐる點に於て、如何にも尊きものであるが、更に此の感謝の心が、古代人の神に對する無限の尊崇と、絶對の信頼とを意味する點に於てこの上もなく尊いのである。而して、これが深く民族性の本質性に連つて、その一大特色をなす國家的精神の基調をなしてゐる點に於て、極めて意義深いものが存在するのである。

神は古代にとつて人格的生活の根本であり、古代の生活よりして、その理想的生活價值主體であつたのである。即ち神の生活は、古代に於ける唯一純美なる生活姿態であり、その生活の目標であつた。古代人に云はしめれば、神に調和し、神に同化し、神に一致して、その神の生活をさながらに顯現したる時が、自らの生活の眞であり、善であり、美でもあつたのである。されば、神より分離することは、無に陥るの謂であり、神に融合することは、不完全より完全に達するの謂であつて、自らを完成する唯一の道であつた。かゝる意味に於て、神は古代人にとり絶對無限の權威であつた。随つて絶對無限の尊崇

を拂つた。かくの如く神を尊崇することの極致は、神に一致するといふことであり、神の生活を実現するといふことである。

神と古代人の間には、以上の如き密接不離の本質的關係が成立してゐたのであつて、神は古代生活に直接重大なる交渉を有した存在となつてゐる。こゝに神人交通の事が始まるのであるが、この神人の交渉は、一に祭祀を通じて行はれるのである。故に、祭祀は神人の關係をこの上もなく緊密化するに至るのである。既に神が古代生活の本質に連つて、極めて重要な存在であつただけに、その關係を規制する祭祀が古代生活にとつて極めて重要なものであつた事は云ふ迄もない。

されば古代生活は、一にこの祭祀を中心として發展してゐるかの觀がある。我が神國日本に於ける特相の一つである、所謂祭政一致の事實は、一つにこの心の結實成果に他ならないものであると思はれる。即ち祭政一致の事實には、古代生活の本質に參入したる深い心理的傾向と、強い生活意識と、更に民族的特質とが、儼存してゐるのを知るのである。

祭 政 一 致

神祇を祭祀することは我が國政教の精神的基礎であり、國體原理の具體的實踐であつて、この「まつ

り」が自己を組織化し、分化し、種々體系化せられる時、そこに「まつりごと」としての政治・教育・法律・經濟・文化・宗教等、凡ゆる國民生活の諸分野が現象するのである。

故にこの大本を明かにして、祭祀の本義に關する國民的思想信仰を確立することを得たならば、庶政は自ら常に正しきを得、従つて國民も亦、各自の嚮ふ所を謬らさず、愈々我が國體の精華を發揮することを得るのである。これ、即ち御歴代の天皇が常に祭祀を嚴修遊ばされ、神事を以て朝儀の第一義とせられ、億兆にその範を垂れ給ふた所以であるが、下萬民も亦、この聖旨を奉體して父祖相傳へ、苟くもこの道を履み躰らざるやう、深く心に期して今日に至つたのである。

明治元年、畏くも明治天皇は、京都より東京へ御遷り遊ばされ、その月、間もなく武藏國一言、氷川神社に行幸あらせられた。その時の氷川神社御親祭の詔勅の中に、

勅ス、神祇ヲ崇メ祭祀ヲ重ンスルハ、皇國ノ大典、政教ノ基本ナリ、然ルニ中世以降政道漸ク衰ヘ
祀典舉ラス、遂ニ綱紀ノ不振ヲ馴致セリ、朕深ク之ヲ愾ク。方今更始ノ秋、新ニ東京ヲ置キ、親臨
シテ政ヲ視ル。將ニ先ツ祀典ヲ興シ、綱紀ヲ張り、以テ祭政一教ヲ復セントス。乃チ武藏ノ國大宮
驛氷川神社ヲ以テ、當國ノ鎮守ト爲シ、親幸シテ之ヲ祭ル。自今以後、歲毎ニ奉幣使ヲ遣シ、以テ
永例ト爲ス。

と仰せられた。更に明治三年一月三日敬神愛民の大御心より、皇祖皇宗並びに天神地祇を祭つて、現在

並びに將來の大方針をお定め遊ばされたのである。その時の詔勅に、

「大祖創業、崇敬神明、愛撫蒼生、祭政一致、所由來遠矣」

と云ふ御詞がある。又その直後、渙發あらせられた大教宣布の詔勅を拜する時、如何にこの祭祀の大道が、我が國政教の上に於いて、重大なる意義を有つかを知る事が出来るのである。

祭祀即ち「まつり」とは神に敬事する動作を指し、「まつり」の「まつ」は待つと同義で、神祇を請待し、神の降臨を待つて、是に接近するの意味である。即ち「まつり」は神に敬事し、威靈を畏みて奉仕する動作を稱する言葉であつて、祭祀の眞義は、要するに神の絶対性の前に自己を純化し、そこに神徳をあらはに顯現させる事に依つて、直接に神に合一し、神と不二一體となることに他ならない。

「まつりごと」は「まつろひごと」で、下より上に従ふ意味であつて、「まつり」を具體化したるものが「まつりごと」である、今少し敷衍すれば、臣下が、陛下に御仕へ申上げる事、従ひ奉ること、それが「まつりごと」である。すべての國民の仕へ「まつること」は「まつりごと」であるが、まつりごときこしめすのは、即ち陛下であらせられる。従つて政治の根本は、天皇にある。天皇は皇祖皇宗に御仕へして、國民のまつりごとを御聞召遊ばされる。國民は天皇に奉仕することに依つて、皇祖皇宗に御仕へする理である。天皇は皇祖皇宗に御仕へすることに依つて、國民を治め、まつりごとを聞召されるのである。即ちまつりの精神が基礎となつて、御統治遊ばされる。祭祀の精神を以て

御治め遊ばされる。故に敬神と愛民、また祭と政とは一致する。従つて祭政一致は皇室の御事で、天皇御統治の大方針である。かゝる根本方針に正しく御仕へするのが「まつりごと」である。

明治天皇は

白露のおきふしごとに思ふかな

民の草葉のさかゆかむ世を

いかならぬ樂すすめて國のため

いたでおひたる人をすくはむ

ことなくて治まる世にも民のため

思ふころはやすむ時なし

おほつつの響はたえて四方の海の

よろこびのこゑいつかきこえむ

と、屢々その大御歌に仰せられし如く、常に國民の安寧幸福、全人類の平安安平を大御心にかけさせられ、深き敬慮を祭祀の嚴修にそゝがせられた。この大御心を拜したる我等國民も亦、「すめらみこと」の御本質を愈々輝かし奉る可く、敬神尊皇の理想信仰に徹して、日夜祭祀を嚴修し、苟くも怠らざらんことを期してゐるのである。即ち 天皇は、常に敬神愛民を以て下に臨ませられ、國民は敬神尊皇を以て

上に奉じ、今日に至つたのである。

かくて敬神の行事として實踐する所の祭祀の道は、天皇に於かせられても、國民に於ても、全くその本義と一にするもので、聊も相反せざるものである。而してこの愛民の政治こそは、恰も、己がわが兒をひたすが如き。天皇の神ながらの御行動に他ならず、又臣民の大政翼賛は、この敬神の大義より自ら流露せる、明き淨き直き正しき「まこと」の表現に他ならないのである。

換言すれば、天皇は祭祀に依つて、皇祖天照大神と御一體とならせられ、その御境地に即して、天下を知らし召し給ふを以て、國家安泰、世界平和、八紘一宇の諸理想が、直ちに大御心となつて、我等臣民に感銘されて來るのである。故に、我等臣民もまた「つかへまつる」本義に於て、この宏大無邊の御聖徳に感激し、愈々益々「すめらみこと」をして「すめらみこと」としてあらしめ奉る可く、大政翼賛の臣道完成を、神に祈らずにはをられないのである。

延喜式祈年祭の祝詞に

伊勢ニ坐ス天照大御神ノ大前ニ白サク、皇神ノ見舞カシ坐ス四方ノ國ハ、天ノ壁立ツ極、國ノ退キ立限、青雲ノ靄ク極、白雲ノ墜リ坐向伏ス限、青海原ハ掉杓干サズ、舟ノ離ツ至リ留ル極、大海原ニ舟滿チ都々氣テ陸ヨリ往ク道ハ荷ノ緒縛ヒ堅タテ、磐根本根履ミ佐久彌テ、馬ノ爪ノ至リ留リ限長道間無ク立チ都々氣テ、狹キ國ハ廣ク、峻シキ國ハ平ケク、遠キ國ハ八十綱打挂ケテ引キ寄スル

事ノ如ク、皇大神ニ寄サシ奉ラバ。

とあるは、眞に雄大宏遠なる世界光被の大精神を宣明せられたるものである。

惟ふに、天皇は、我が盛國の大精神の行的表現たる祭祀を通じて、その至高至明の君徳を養ひ給ひ、その神倫に依つて天下を知ろし召さるゝのである。故に、天皇は天津日嗣の原則によつて、ひとり日本國土を統治し給ふのみならず、全世界を、否、全宇宙を知ろし召さる可き御使命を有し給ふ。まさしく、こゝに天業恢弘の理想があると云ふ可きである。かゝる意味に於て、滿洲國皇帝陛下が、國都新京に建國神廟を創建あらせられ、親しく天照大神を奉祀遊ばされたることは、誠に意義深き盛事と云はねばならない。

しかも過去・現在・未來を一貫し、世界を一體とする大經綸の下に、創造・整理・大成をなす可く、常に祭祀に依つて、皇大神と御一體にならせられるゝを以て、益々天業恢弘の御政治が行はれるのである。

こゝに最も注意すべきことは、我が祭政一致が、外國に於ける神政々治の如く、一方に神を禮拜しつゝ、他方その精神を以て政治に當ると云ふ、單に形式的便宜主義とは、本質的にその意義を異にする事である。

我が神國日本に於ては、祭即政、政即祭であつて、「祭政惟一」なる御言葉が、最もよく我が祭政一

致の眞意を表明してゐると思ふ。

祭祀と臣道

古事記の天岩屋戸の章句に

故於是天照大神見畏ミテ、天石屋戸ヲ閉テ刺シ許母理坐シマシキ。爾チ高天原皆暗ク、葦原中國悉ニ闇シ。此ニ因リテ常夜往ク。於是萬ツノ神ノ聲ヒハ狹嶋邦須皆滿キ、萬ツノ妖悉ニ發リキ。

とある。一度、天照大神が天岩屋戸の中にお隠れになり、高天原も、葦原中國も、悉く闇く萬の神の妖が一時に起つて、その生活の幸福は、一瞬より破壊せられるに至つた當時の狀態が、手に取る如く窺ふ事が出来る。そこで、此の苦難を打開す可く神々に依つて、何が行はれたであらうか。(重複する故原文は記載せず「古代の祭祀」の欄参照)

伊弉諾理度賣命の鏡、玉祖命の玉、その他青和幣、白和幣等、八百萬の神の全靈全力を傾倒して生産された、種々の生活要具を奉獻して一大祭祀が行はれ、天照大神の出御を、天兒屋命の祝詞に依つて奏請したのである。

而もこの祭祀の精神は、八百萬の神が、絶對無條件に大神に還元復歸しようとするのであつて、一

苟くも 大神に對し奉り、強請の意志は毫末もなく只管、大神の御氣色を伺ひつゝ、神々の全靈全身を捧げて仕へ奉るといふ、最も嚴肅なる意味に於ての滅私奉公であり、職域奉公であつたのである。茲にその一例として説明すれば、當時に於ける手力雄神は、力を以てするならば何事もなし得ざる事はなかつたであらう。然るに 大神が御親ら微かに御扉を開け給ふ迄は、其の絶大なる力を如何ともなし得なかつたことに深い意味がある。即ち、茲に我等は 大神の絶對の尊嚴性を拜するのである。これこそまさしく臣道の範鑑でなくて何であらう。

およそ、現代の政治に參與する者に、果して常に 天皇の御氣色を拜して、天岩屋戸の場面に於ける八百萬の神々の如き嚴肅なる心を以て、大政を翼賛し奉つてゐる者が幾人を數へるであらうか。

祭祀と稱するところの政の内容は、所謂狹義の政治を指すものでなく、廣く國民生活百般の事象を含むものである。換言すれば神人合一、神人不二の境地に進むのが、祭祀の眞諦であるが、この境地を體得して、人生百般のことを實現するのが政治の意義である。故に、政治家はこの心を以て政治を行ひ、教育家はこの心を以て身を修め、人を導き、軍人はこの心を以て國を護り、外交家はこの心を以て異邦の人に接し、實業家はこの心を以て産業報國に邁進し、其の他百般の生業と職域に亘り、老幼男女各々自己の使命と、職分とに應じて神に合一し、神意を奉體し、純眞清明なる心を以て事に當るならば、茲に祭政一致の實を擧げ、君民一體の國是を大成し、始めて皇道の實現を見るものと云ふ可きである。

祭祀と經濟

本來、日本人の經濟觀は、價值の問題でなく、何時でも「勿體ない」といふ頗る簡單なる言葉の中に要約されてゐる。この「勿體ない」と云ふ簡單なる言葉は、同時に生活全體を貫いた日本精神の要素でもあつたのである。然るに、近世に於ける國際主義經濟と、大企業合同の發達促進に依る社會機構とが次第に生産者、即ち勤勞者と消費者階級との分離を來し、「勿體ない」と云ふ日本固有の經濟觀念が、急速度をもつて薄らいで行くかに思はれるのである。作田一氏は「我が國體と經濟」の中に

我が國に於ては經濟と祭祀とは如何に相結んで尊重せられて來たか。天照大神の齋庭の稻穗の神勅は、國の生活に於ける祭祀と經濟とを結んで我が國の經濟を導く根本主命として仰がれる。土から得られた收穫物は神の恵みによつて出來たものである。従つて收穫の初穂は先づ神前に供へて報德の誠意を表し、その供物を頂いて生活の資料とする。この一事は神と土との間に立つ人の仕事であり、人が神に導かれ土に養はれて生活し、神と人と土とが互つにして一つであることを明らかにするのである。こゝに我が國の大道が太古から定つてゐる。經濟生活は決して人々の衣食の道といふだけではない。また經濟を功利的に解し、甚しきは金儲の仕事又は節約蓄財の事等と考ふるのは

以ての外の邪道である。祭祀と經濟とが極めて密に結び付いてゐる著例は農村の行事に見られる。村人は鎮守の神を中心として生活し、神を祭り土に養はれる古ながらの國風を今に維持してゐる。古代の産業は何れの國でも主として農業であつた。後に工業が盛になつて農業が衰へた國もあるが、我が國では資本的商工業の盛になるにつれて農村經濟は甚しく疲弊を重ねてゐるも、農産物の收穫は依然として減じないと言ふことは、我が農業の悲しむべく而も頼もしき特徴と云はなければならぬ。この頼もしい農民を悲境より救ふ道は、根本的には齋庭の稻穗の神勅にまで遡ることではなければならぬ。工業に至つては西洋の技術及び資本企業を移入して新局面を開いたものであるから、一應は如何に古道をこれに行ふかに迷ふであらう。況んや古代に存しなかつた近代の商業に至つては、これを祭祀に結び付けることは殆ど考へ得られないやうである。しかし我々が近代の生活を古代の道に由らしめると云ふことは、決して時間的に現れた古今の出來事に就いて考へてゐるのではない。古道と云ふは古代に開かれた基本の道であり、それが時代を貫き、時代を追ふて益々開顯して行く所に、農業のみでなく、後代の工業をも商業をも包容して國の經濟を榮えしめる。その古道とは何か。それは「むすび」の道である。「むすび」の道は我が國の生活を包んで古今に通ずる道であり、更に中外に亘つて普く及ぶべき道であるが、特に經濟生活にとつては至高至大の道となつてゐる。我等は「むすび」の大命を受けて働く。經濟の樞軸たる生産は人が土に向つて「むすび」の

働きをなす仕事である。従つて生産の收果は眞先にこれを祭祀の供物となして「むすび」の大神に應へまつることを報告し、報徳の誠をいたすのである。この精神が農業にも工業にも商業にも一切の經濟事業に通じて謬なき指導力となる。應報といふことは他の恩恵に對して報酬する意味でもなく、因果應報の意味でもない。「むすび」の發動する所に示命あり實行あり報告あつて、高大なる神徳に向つて言上する報徳の誠意が、次の階段に於ける消費を慎重ならしめ有效ならしめる。祭政一致が唱へられ、更に祭政一致が唱へられるが、殊に見逃してならないことは祭祀と經濟の一致である。神を祭る心と經濟、殊に生産に従ふ心とは、常に同一でなければならぬ。これこそ我が國の尊い道であり、我が國體の一大特色である。

と述べてをられるが、實に日本固有の經濟觀を喝破したものである。

我々の生きる力は、神によつて與へられてゐるものである。生きる力は、建設の力であり、國生みの力であり、神の力である。生きるのではなく、生きさせられるのである。生きるための手段として稼ぐのではなく、生かされる喜びに翼賛するのである。我が驍國の大精神は修理固成、即ち國生みであり、國づくりである。その國生みの一翼を擔つての業座み、即ち産業し、奉仕し、勤勞し、あらゆる任・分の職務にいそしむのである。

日本人としての偉大さは、金力や、權力や、地位や、名望、學問、技能等に依つて決定するものな

い。如何に翼賛するかに、日本人の偉大さがある。換言すれば、財あるものは財で、學問あるものは學問で、力あるものは力で、生命・身體・才覺・技能の分に應じ、任に應じ、その分の限り、任の限りを發揮して天業に奉仕し、翼賛するところに、日本人としての偉大さがあるのである。

隨つて憲法第二十七條に規定せられたる所有權の如きも、英・米法的な解釋に依つて、勝手に私すべき所有權、財産權と解してはならない。即ち利己享樂のためにある私有財産の觀念であつてはならないと思ふ。皇大基^{スミラサキモト}を築かせられる、すめみ^{スミミ}たからであり、我々が國生み、國づくりの御天業に翼賛するために分け戴いた資財、即ち翼賛分有財なのである。

たとへ一片の紙と雖も、産靈^{ハスビ}の作用に依つて我等の手に與へられたるものとして、有難く勿體なく節約す可きであつて、價值觀に依つて物の高下、等差を附す可きでないことは勿論、一物と雖も私す可きではない。而して、この資財を活用して初めて翼賛事業は、昂揚されなければならない。あらゆる經濟活動は、恒にこの理念のもとに發足せらる可きである。茲に於て、我等は、産業は絶対に生活の手段でなくして翼賛のための手段であり、勤勞は利潤、或ひは報酬の獲得を目的とするものではなくして、奉仕（まつろひ）であると云ふ觀念に徹しなければならぬ。

要するに、我等は「むすび」の天命を承けて働くのである。而して經濟の樞軸たる生産は、人が土に向つて「むすび」の働きをなす仕事である。従つて生産の收果は、眞先にこれを祭祀の供物として「む

すび」の天命に應へまつることを報告し、報徳の誠を致す可きである。而して神を祭る心と經濟、殊に生産に従ふ心とは、常に同一でなければならぬ。

日本生活の中心思想

崇祖觀念

古代に於ては雜多の神が存したのであるが、古代人が自らの生活の目標と仰ぎ絶対の尊崇を拂つたのは（理想的な生活價值主體として認容した神）伊邪那岐神、伊邪那美神、天照大神であり、更にその直系御子孫の神々である。かゝる事實より見れば、古代に於ける神とは、古代の人々にとつては己を生んだ父母であり、或は祖父母であり、或はまたその祖先であつた。斯く考へる時、古代に於ける神は、古代の人々にとつて紛ふことなき血の續いた祖先であつたのである。

故に、古代の人々が神に拂つた絶対無限の尊崇は、とりも直さず、自らの祖先に拂つた尊崇であつたと言ふことが出来る。かく神に對して絶対の權威を認容し、これに拂つた無限の尊崇は、換言すれば、祖先尊崇の心志であつた。かゝる意味に於て、古代生活に於ける理念的價值主體は、神であると同時に祖先であつたと云ふ可きである。されば神といひ、祖先と云ふのは、一つのものに對する客觀的な二つの見方であつて、外面形式の姿態に過ぎないのである。これを主觀的な内面生活より觀ると、一つは神

を尊崇する思想であり、今一つは祖先を尊崇する思想であると云ふ事が出来る。而してこの敬神思想と崇祖思想とが、本質的に合致して些かの矛盾をも来さざるところに、日本生活の特質があり、是が實生活の上に具現せられてゐるところに、日本生活の特相があるのである。かくして、崇祖的思想は古代生活の中心思想であり、日本精神の第一義であつたと云ふ事が出来る。

神の威力を肯定して神を認識し、その神を中心とする生き方は、必ずしも日本民族の間にのみ存するものではない。只この神が日本民族の祖先と結合して、祖先神と云ふ形態と内容とを具備し、その敬神思想が、崇祖思想と、本質的に結合する時に於てのみ、始めて特殊の日本生活の成立が見られるのである。

また神に依つて天地萬物が創造せられると云ふ考へ方は、必ずしも日本民族特有のものではなく、他の民族の間に於ても考へられてゐるところである。只これが、伊邪那岐・伊邪那美命と云ふ祖先神に依つて成されたものとして、民族の祖先と結合するところに、紛ふ可くもなき日本の形態と内容とを具備し、そこに始めて民族的となり、日本の特色を持つて來るのである。

更に我が神國日本の建國が一般の國家に於て見るが如き、統治者と被統治者との權力關係に依つて成立したるものでなく、一に祖先を中心とし、その威徳の下に血族的結合を根柢として、生成されたものであると云ふところに、極めて民族的であり、日本的なるものが生じて、特殊の國體が成立するのであ

る。而してこの特殊の國體が、世界に比類なき形態と實質とを具備してゐるとすれば、民族的であり日本的であると云ふことに、この上もなき特徴があり、同時に祖先を中心として生きる日本生活に、絶對の意義と至上の價值とが存することが考へられるのである。

かく觀じ來る時、日本民族が祖先を中心として生きると云ふこと、及び日本生活が祖先を尊崇する心志を基調としてゐると云ふことは、我等日本人にとつて最上の希望であり、且又日本民族にとつて絶對至上の生活姿態であると云つても差支へなき事と思ふ。

然らば、崇祖的思想の本質は如何なるものであらうか。自らにとつて血の續いた祖先に對して、生じたものであることはいふまでもない事であるが、更に祖先の偉力を體得すると共に、その偉力と自らの生活との間に、密接不離なる關係の存するところに生じたのである。古代人の考へに依ると、一切の萬物は悉く祖先の所産であつた。而してこの人々を生み、その居住する國土を供し、衣食住に要する一切の雜多を給したことは、古代人にとつて絶大無上の偉力であつた。

實際古代人の信仰に依ると、天地萬物が現に在るが如く存するもの、人々がこの世に生を享けて安樂に生活し得るのも、また御代が平安に治まるのも、一に祖先の意志に依るものとなしてゐる。即ち人間の一切の幸福は専ら祖先の賜であつて、祖先の神靈は永遠に人間を庇護するものであると考へられた。かゝる意味よりして祖先を尊崇し、祖先を祀つたのである。

かくして古代人から云ふと、自らの生活は、一つに祖先の意志に依るものとなしたることよりして、よく人々の生活を支配する祖先の生活は、絶對であり、無上のものであつた。故に於て、崇祖的思想は報本反始の心志を基調として、信仰的意義をさへ加へてゐるのである。

前述の如く祖先の生活は、古代人の唯一純乎たる生活目標であり、古代生活の理想的價值主體であつた。古代人はこの生活價值主體に満足して全自我を託依し、純一の生活に生きん事に努めたのである。随つて祖先の生活に調和し、一致することが理想であつた。かゝる意味よりして、古代人は祖先を尊崇することに依つて、祖先の生活に近寄り調和し、更に同化す可く努めた。この祖先尊崇の極致は、祖先に一致すると云ふことであり、祖先の生活を實行し、實現すると云ふ事である。而してこれに依つてのみ、自らの生命は確立し、自らの存在は完成せられるものであると考へられて來た。

更にこれを切言すると、古代生活の理想である宇宙を具現すること、並に古代人の理想である宇宙の具現者たることは、祖先の生活を實現する事に依つてのみ、可能であると考へられた。即ち祖先の生活を再現することが、自らの生を實現する唯一の道であつた。随つて祖先の生活の實現に對する努力は祖先を尊崇すると云ふ事であるにも拘らず、尙自らの本質を成就し高めんとする努力に他ならなかつたのである。かくて祖先と融合を求めることが、自らを完成するの謂であり、更に祖先と融合を求める時が、自らの幸福な生活を求める時である。かゝる意味よりして、祖先を尊崇し、以て祖先に調和し、祖先に同化

し、祖先の生活をさながらに實現したる時が、人生の眞であり、善であり、美でもあつた。されば、祖先尊崇は古代人の生命であり、理想であり、また本領でもあつて、生に對する一切の努力の根源であつた。茲に於て、古代人の内面的精神生活は、祖先と密接に結合してゐるのである。

かくして祖先尊崇の心志は、飽くまで民族生活の内質に連り、極めて根深く力強い存在となつてゐる一體、我が國の古代は謂はゆる氏族制度の世の中であつて、國家の組織が氏族を基調とし、中心として成立してゐるのである。而して國家構成要素の順序より云ふと、家族・氏族・民族の三段階が存立してゐる。随つて祖先崇拜も一家の祖先、氏族の祖先、民族の祖先の三つに對する場合が考へられる。

家の祖先崇拜は云ふ迄もなく、その家の始祖を中心として、その正系を繼いだ代々の祖先をも併せ尊崇するものである。家に屬する人々は、その家の祖先を以て自らの魂の故郷として、切つても切れぬ血肉のつながりを自覺し、祖先の靈を祭祀することに依つて、相互の一體意識を確立してゐる。これに依り家族的結合をして、親子兄弟の親愛關係の上に於て、單なる空間的な現世的存在に止まらしめることなく、祖先と子孫との關係の上に、時間的な永遠的な存在たらしめてゐるのである。

更にこの祖先を尊崇する心志に導かれて、一家に於ける家長は、その祖先の威靈を一身に受け繼いでこの權威の下に一家の中心となつて、家族の結合が強固に保持せられてゐるのであるが、この家長を中心として祖先を祭祀する時、家人の心は、極めて嚴肅なる氣持の中に融合調和し、家族の結合は極度に

その力を發揮するに至るのである。

茲に至つて、祖先崇拜は古代生活に對し絶對の意義を生じ、汲めども盡きることなき力の源泉となつて、その本質に參應する。されば、祖先崇拜の心志は、古代人の心の深淵より迸り出づる絶大なる力である。而して氏族性としての祖先崇拜も、民族性としての祖先崇拜も、一にこの力の發展し擴大せられるものに他ならないのである。

かくて國民が民族的祖先を崇拜するところに、皇祖に對し奉る崇拜があり、その皇祖に對し奉る崇拜は、やがて皇祖の正系を繼承せられる天皇に對し奉る崇拜となり、その天皇を中心として仰ぎ奉るところに、全一體意識が生れて強固なる團結力となり、君民一體の國家意識を確持し、遂に特殊の國體を作り上げたのである。而して崇祖的思想こそ、古代に於ける國家的精神の源泉となつてゐる。要するに、我が國は、小は家族の結合より大は民族の團結に至る迄、祖先崇拜の心志を以て一貫し、その強烈なる結合力の下に、國家的生活を確立してゐるのである。故に國民生活に對して、祖先尊崇の事實が、如何に重要な意義を有するものであるかを、察知することが出来るのである。

然らば日本民族の崇祖觀念は、ただ遠き祖先を畏れ尊び崇め敬ふと云ふ考へ方のみであらうか。日本人が昔よりその子孫を愛重し、その子孫を愛愛するが如く、子孫の發展を祈り、子孫の愛護を楽しむところに、日本人の先祖を尊び、祖先に仕へる道が開け行くのである。

子孫の愛護が祖先尊崇に對する内容であり、不可缺なる事實であることは、長くも 皇祖天照大神が豐葦原の千五百秋の瑞穗國に降臨し給ふ 皇孫邇邇藝命に下し給ひたる天壤無窮の神勅に依つても、推知し奉る事が出来る。

否、茲にこそ、萬千秋マンシウチウの長五百秋ナガイヒトアキに榮行く可き皇國日本に生れ、年々殖える天の益人として、又生々繁榮する蒼生ソウセイとして、天壤無窮の天津日嗣の大御業を輔翼し奉る臣民、我等の務めがあるのである。これが我等日本國民の務めであり、又祖先の心であり、子孫の道であるのである。

祖先の努力を廣く考へ、祖先の遺業を深く慮り、子孫の發展と康福との爲に努力するは、日本國民としての祖先の道であり、子孫の道である。かゝる二つの道を一つに結び、この一つの道を上に生かし、下に廣めることが、皇國日本に於ける祖先崇拜であり、崇祖の精神である。

現世の生活は國家・社會・家庭・個人等、何れの場合にあつても、自然の人情を磨き育て上げ、而してその生活の源泉とす可きである。日本民族の崇祖觀念は、かゝる至情をまごころとして、これを國家に致し、社會に向け、家庭に注ぎ、己れ自らに培つて、その生々止まざる生活の中に、人間として將た國民としての深き意識より、祖先と己と子孫とを結び合せて、茲に祖先の敬慕と子孫の愛護とを内容としたる、獨特の祖先崇拜を自然的に發達せしめたのである。

要するに祖先に對する敬慕の念と、子孫に對する愛護の情とが渾然として、我が崇祖觀念の内容をな

してゐる。この敬慕と愛護とを一身に充たし、過去を承け、未來に傳へる心を磨き力を竭すことに依つて、祖先崇拜の實が擧るのである。

かくの如く祖先と子孫とを繋ぎ合せ、結び付けるところの崇祖觀念は、畢竟、日本民族の根本的な國民性の一特色たる永遠性が、その基調となり發達したのである。日本國民には、祖先以來の傳統的情操として發達したる民族性が、極めて豊かであり、統一性・永遠性・純一性とも云ふ可き三つの根本的個性が著しく、而してその永遠性が現實生活に鍊成されて、祖先と子孫とが固く深く結合してゐるのである。かゝる崇祖觀念に於ける永遠性は、古へのみことのりに實によく顯れてゐる。明治天皇の御製に

おごそかに保たざらめや神代より

承けつぎ來たる備安の國

と仰せられてゐるが、この大御心を拜察して、誠に感激に堪へざるものがある。幕末の水戸學者會澤正志齋はかゝる日本民族の心持を「父子祖孫永世一氣」と名づけてゐる。

我等日本民族の祖先崇拜に於ける最も顯著なる特色は、國家的であると云ふ事である。即ち、上皇室の敬神愛民の御統治も、下、國民の敬神尊皇の奉仕も、齊しくその根本に敬神崇祖の觀念が深い力となつてゐる。この敬神崇祖の信念を本とし給ふ敬神愛民の大御心と、敬神崇祖の信念を神髓とする敬神尊皇の誠心とが、上下一體となり、敬神愛國の理想を形成してゐるのである。故に、皇國日本に於ける

崇祖觀念は、全く國家的であり民族である。

多くの民族の間には、夫々祖先崇拜の信仰が、或ひは宗教的に、或ひは民族的に、或ひは家庭的に發達し、若しくは存續してゐるが、その生活意識より遠ざかり、その道德意識の中に影を失ひたるものも尠くない。然るに我が皇國にありては、凡ゆる生活の面に崇祖觀念の面影が匂ひ、殊に道德意識及び宗教的情操として、極めて濃やかに動き、特に國家觀念の中には、力強く民族精神として働いてゐる。

敬神觀念

斯くの如く祖先を敬慕し、その遺徳を感謝し、その遺業を展開せんとする心持を力強く一言すれば、敬神の一語に盡きる。換言すれば、日本民族の敬神觀念は、かゝる崇祖的精神、即ち祖先崇拜を中心とし、基調としてゐる。従つてこれを敬神崇祖と云ふのである。敬神崇祖は日本民族の信念であり、國民道德の底力として流れてゐるところの生活意識である。日本生活の基調となり、有ゆる道德の樞軸となつてゐるものは、祖先への奉仕と云ふことであり、祖先敬慕の心がまへである。

神代以來、日本國家の發展と共に、日本民族の生活と思想とが、祖先への奉仕の心の表現として、又その力の淵源として、祖先を齎き奉り神祇を崇め奉り、神社なるものを創立し、祭祀を奉仕して、茲に

日本民族の敬神觀念が發達したのである。従つて日本民族の敬神觀念は、皇室と國家と國民とを離れることなく、皇室の御統治と、國家の發展と、國民の生活とに即して發達してゐるのである。

仁明天皇が

「神を敬ふこと在于すが如く民を視ること子の如し」

と宣ひ、明治天皇が

「太祖の業を創め給ふや、神明を崇敬し、蒼生を愛撫し給ふ。祭政一致、由來する所速し」

と仰せられし如く、我が皇室の御統治は、實に敬神愛民の大御心に基づかせられ、篤き深き敬神の御信念を以て、ひたすら國民を愛撫慈育せられて、千古に論らざるものである。

斯くの如く長れ多く、辱けなき御統治を奉戴して、國民は祖先以來、敬神尊皇の奉仕を捧げてゐる。

かゝる歴代天皇の敬神愛民の御統治が渝ることなく、又國民の敬神尊皇の奉仕が、祖先以來行はれてゐるが故に、そこに敬神崇祖の信念が確立してゐるのである。

これ、我が皇國日本に於ける敬神崇祖の根本義にして、これを基として各氏族・各家庭・各土地の敬神崇祖が發達し、又その發達を力として、日本に於ける君民一體の敬神崇祖の信念が展開しつゝあるのである。

敬神崇祖を根源としたる皇室の敬神愛民の御統治と、敬神崇祖を基調としたる國民の敬神尊皇の奉

仕とが、上下一致、よく偉大なる國家建設・家族的國家樹立に向つて進みつゝあるのである。茲に、日本民族の理想たる卓越せる優秀なる國家の完成に邁進する信仰的な力、即ち敬神愛國の理想が成立してゐるのである。

かゝる敬神愛國の理想が、採長補短の生活意識よりして、外來文化に對して敬神崇儒の思想となり、敬神崇佛の信仰となつて展開し、又内に在つては敬神尙武の思想を固め、敬神愛郷の生活を深くしたのである。

日本民族の敬神觀念は、斯くの如く凡ゆる生活、種々なる文化に働きかけて、これに魂を打ち込み、活を入れたのである。従つて、昔よりよく敬神好學の風が行はれ、明治の初年には敬神明倫の教が樹てられ、近年は頻りに敬神勤勞等の聲を聞くに至つた。

敬神崇祖の實踐

非常時局に直面せる現代日本に於ては、各種のポスターに敬神崇祖の四字が、明確に標語として浮き出てゐる。日本精神が高調し、建國精神が自覺された國民精神總動員の姿をして、力強き興趣を感じずにはをられない。

明治の末期、國民の道德的、國家的自覺が可なり昂まり來つた頃、日本人の間に、祖先崇拜の觀念が覺醒されて來た現象に對して、歐米思想にかよれたる人々の間に、かゝる祖先崇拜の價值を疑ひ、或ひは之を否認して神社の参拜を拒む者さへあつた。しかも我が國の學者、教育家、思想家、宗教家、政治家の多くは、殆どかゝる事實に無關心であつた。

かくて大正初期にかけて、國民道德の自覺が漸次擡頭し、神社崇拜の信念も徐々に深まり、茲に敬神崇祖の民族意識が國民思想動搖の中にも、年々國民思想の底力として自覺されて來た。然るに第一次歐洲大戰後の日本の思想界には、かゝる思想的自覺を以て一種の反動思想か、若しくは單なる古い民族信仰として輕視する傾向が顯著となつた。隨つて所謂知識階級、學生層及び多くの青年の胸中には、生活力としての敬神崇祖の觀念を見出す事が出來なかつた。

然るに大正末期に至り、一部愛國者の間に、建國の精神に還れと云ふ聲が起り、次いで若き愛國者に依り建國祭が催されるに至つた。時恰も、滿洲事變が勃發し、國際聯盟と衝突するに及んで、日本國民の脚下に日本精神の自覺が盛り上り、頭上に八紘一字の理想が復活して、茲に遠く肇國の偉業を偲び、近く神社参拜を行ひ、或ひは歴代の御陵を巡拜し、今更ながら御歴代 天皇の御敬神に感激し奉り、國民の間に、自然と「神ながらの道」が理解されて來るに至つた。

斯くの如き社會情勢下に大東亞戰爭は展開され、皇室の大御稜威の下に、外には皇軍の威武東亞を

壓し、亞細亞大陸に、太平洋に、印度洋に旭旗を翻し、内には皇道佛教を唱へ、神ながら基督教を起すものも見られるに至つた如く、朝野を擧げて「大和魂の本能」に眼覺めねばならぬ時が來た。而して、茲に皇道精神に立ち、八紘一字の大理想を目指して進む可く、堅忍持久、長期建設の意氣を以て、心身一如の鍛鍊を必要とする時代となつたのである。

かゝる國情のうちに、凡ゆる會合、舉式等に於て、國民の赤誠は伊勢の皇大神宮、橿原神宮及び宮城を遙拜して、建國の昔を偲び奉り、國運の興隆を祈り、又國民は建國祭、或ひは記念日、或ひは祝賀會等には、靖國の社頭、二重橋前等に參集し、街頭を行進して盡忠報國の正氣を發揚してゐる。これ等の現象は、敬神崇祖の民族心理をその核心としてゐるのである。

併し乍ら、これ等の多くは、緊張したる事變を動機とする民族心理の爆發である。内外情勢の激變に依る周圍よりの力、若しくは群衆的迫力に依つて刺戟されたる一時的興奮ではなからうか。否、絶對にかくあつてはならないのであるが、とかく戰時氣分に有り勝ちな、一時的興奮となり終へはせぬかと云ふことが、懸念せられる現象である。たとへそれが眞剣な姿態であり、自然の發露であるのみならず、そこに深い自覺が伴ひ、強固なる信念が横はつてゐるとしても、とかく外來思想にかぶれ、歐米の國情に隨順し勝ちな過誤を繰返して來た我が日本國民は、この機會に於てこそ、かゝる日本精神の力を十分に鍊成し、民族性の特質を徹底的に體得するの必要があるであらう。而して大和心の眞心に立違つて、

我が國體の眞の姿を顯現し、肇國の大理想を實現するところの不披の信念を鍊磨し、それに適應したる生活を築いてゆく心掛けが、痛切に要望されるのである。

然らば我等は神國日本の國民として、我々個々の生活を如何に持す可きか、また如何にあらねばならぬか。我等は年々迎へる祝祭日は勿論のこと、平常と雖も、その日常生活に即し、その活動を通じて、自然に敬神崇祖の至情を表現する如く、實踐し鍊磨する心掛けを忘れてはならない。敬神崇祖の心は祖先以來の傳統的情操であり、敬神崇祖の風習は昔よりの「手ぶり」である。今後、益々この「昔の手ぶり」を忘るゝ事なく、永劫未來にかけて愈々榮ある「昔の手ぶり」を、我等の子孫が、現代の我等國民に傳へ、あやからしむ可く、今日この千載一遇の機會に於て檢討し、鍛鍊し、實現する必要があるであらう。

元來、我が神國日本に於ては、毎年の元旦、四方拜に開けそむる新年拜賀式には、國民は今も昔も變ることなく、「元日や神代のことも思はるゝ」心に還るのである。即ち皇國日本の根本生命たる皇位の本源に座す、皇祖の大御稜威を忘れることなき元始祭が執り行はせられるのである。

三月の春分及び九月の秋分は、宮中の皇靈殿に於て、春秋の皇靈祭が行はれて、御歴代の天皇を始め奉り、多くの皇族方の御靈を祭らせられる。その上、春季皇靈祭の日は、宮中の神殿に於て、多くの天神地祇を祭る春季神殿祭が行はれ、秋季皇靈祭の日にも亦、秋季神殿祭が行はれる。その日、春秋共

に神宮を始め官國幣社以下神社に於ては、夫々皇靈殿の大前に對する遙拜式が行はれるのである。

一般國民の間にあつては、所謂お彼岸の中日として、昔より神詣で、お墓参りが行はれてをり、全く敬神崇祖の日である。而して日本民族の情操が敬神崇佛として、將た敬神崇祖として、よく祖先以來の道德的・宗教的な習俗を訓育し發達させてゐるのである。この心こそ、謂はゆる「高麗支那も大和心になり」ぬ可き皇道精神の眞髓であると思ふ。我等はこの皇道精神を以て興亞の大業を達成し、廣く大陸に我が皇室の大御稜威を仰ぎ奉る可く、かゝる人情の自然に根ざし、奉公の眞心を以て磨いて來た敬神崇祖の正しき姿に還り、逞ましき力を育んで行かねばならぬ。

四月三日は神代の理念を國家的現實の地盤の上に擴充し、之を「天業恢弘」と云ふ高邁なる御使命の下に、實踐し給へる第一代の天皇であらせられる神武天皇の御盛徳、鴻業を偲び奉り讃へ奉つて神武天皇祭を執り行はせられ、その御陵には勅使を差し遣はせられて、莊嚴なる御祭典が擧げられるのである。この日、全國の神社に於ても遙拜式が行はれる。これまた、敬神崇祖の大御心に本づかせられるのであつて、國民の精神も亦、畝傍山東北御陵を遙拜して、敬神崇祖の念は益々深きを加へるであらう。

神武天皇は御即位後四年、鳥見の山中に靈廟を設けて、皇祖天照大神を祀り、以て大孝を申べせられた。故に、國民はこの神武天皇祭の日に當りては、殊に深く敬神崇祖の念を固め、かゝる國風に反

實しなければならぬ。

我が皇室におかせられては、十月十七日に、その年の新穀を先づ 皇祖天照大神に供へ奉る可く、神宮に於て神嘗祭を執り行はせられ、十一月廿三日には、その年の新穀を 陛下の閑食し給ふに當つて、天照大神を始め奉り天神地祇に、御手づから御饗御酒をお供へ遊ばされるところの新嘗祭を、宮中の新嘉殿に於て執り行はせられる。共に敬神崇祖の大御心に出でさせ給ふのである。

我等はかゝる國家の祝日祭日に會ふ毎に、又神社に詣で、國旗を仰ぐたび毎に、祖先以來の傳統的な心に還り、何事も先づ初穂を神に供へ、墓を清めるが如き心遣りを以て、ひたすら、神國日本の眞の姿を仰ぎ、日本精神の正しき姿を顯はす可く修養し、活動す可きである。そこに日本民族の敬神崇祖の實踐があり、國體觀念の根本が培養されるのであつて、これこそ我等の貴い勤勞の力である。

日常生活の内省

然るに、我等國民の大方の日常生活は如何と云ふに、甚だ寒心に堪へぬものがある。即ち國家の祝日祭日には、近時、門毎に國旗を掲げて慶祝の意は表してゐるものの、眞に祖先以來の傳統的な心に還りひたすら神國日本の眞の姿を仰ぎ、益々敬神崇祖の念を固めて、この國風を反省してゐるものが果して

幾人あるであらうか。祝祭日は單なる休日、娛樂日と化して、歡樂街、遊覽地へと雪崩をうつて押しかけ、殺人的困難を呈してゐる。國家の祝祭日に於て然り、日常生活にあつては推して知る可きである。

今、我等各個人の家庭生活を考察するに、佛敎徒の家庭に在つては、佛壇を設けて佛を祭り朝夕禮拜してゐる。或ひは基督教徒の家庭に在つては、神棚を設けて基督の神を祭り拜禮して感謝の誠を捧げてゐるのである。又春秋の彼岸は勿論の事、日常暇ある毎に祖先の墓参を怠らず、遠く異郷の空にあるものと雖も、一度郷土の土を踏めば、必ず墓参をなすを常としてゐる。又、年々鎮守の森を中心として氏神、即ち氏族の祖先の祭りが行はれてゐるのである。かゝる事は祖先崇拜の誠を致すものであつて、我が國の美風として太いに努む可きであらう。

平田篤胤が、その名著「玉だすき」の中にも縷々として説いてゐる如く、我が神國日本に於ては、兩親より先、幾代も幾代も遠き祖先まで、これを遠つ「オヤ」と稱し、己より後、幾代も末久しく續く子孫を生みの「コ」と呼んでゐる。斯の如くオヤコ（親子）の關係は、永遠に過去にさかのぼり、永久に未來に到る極めて密接なものである。而してかゝる親子の關係を以て一家が成立してゐるのみならず、郷土も亦、氏神氏子と云ふ全く家族的な社會を形成してをり、國家も亦「義は君臣にして情は則ち父子を兼ぬ」と云ふが如く、家族的に發達してゐる。故に我等國民は、皇國日本の家族國家たることを自覺し、爲政者も亦、國民にかゝる觀念を普及徹底さす可く努めてゐるのである。

然るに、我等國民の大方は、前述の如く小なる家族に於ける祖先の墓參を朝夕怠らずして、祖先に對する敬慕の誠を捧げてゐるが、皇國日本と云ふ大なる家族の家長に當らせられる上、皇室に對し奉りては如何、と内省するに甚だ遺憾の點がある。即ち日向三朝以來悠久幾千載、列聖玉體の永遠に鎮まり給ふ所、歴代の御陵に恭敬感謝の誠を捧げんと慾して、閑ある毎に國民の總てが巡拜して皇恩の遠く深きに感謝せねばならぬ。

又我等は種々の會合、儀式或は集團の場所等に於ては、宮城に對し奉り遙拜を行つてゐるが、各家庭に在りても朝夕宮城に對し奉り國民の總てが、遙拜して報恩感謝の日常生活を送らねばならぬ。

神國日本には、最高最上の絶對神であらせられる、皇祖天照大神を齋き奉る伊勢の皇大神宮を中心として、多くの神社が存在してゐるのである。それは、正に一君萬民と云ふ我が國體の特色の如く、全く一つの絶對的な中心を本として、他の總てがよく組織的に、而も自然に纏つてゐる。即ち八百萬の神は各々その職分を通して、天照大神に歸一還元し奉るものである。

今日、我等が特に聲高く提唱する職域奉公も、實はこの神々の歸一精神を、現代に再現せしめんとするものであり、我等が神社に参拜すると云ふことは、その氏神を通して、天照大神に歸一し奉らんとするものである。

我等國民は、朝夕かゝる精神を持つて神社に参拜してゐるが、至高至尊の絶對神であらせられる皇

祖天照大神を齋き奉る伊勢の皇大神宮に、國民の總てが參拜してゐるであらうか。勿論、地理的關係等が多分に影響してゐる事と思はれるが、僅に國務大臣を始めとし、高位高官連の親任奉告、或は各種團體特志家等に依つてなされる年始其他の參拜に過ぎない狀態ではなからうか。

前述の如き佛を祭り、基督の神を祭る個人的宗教も、それが國家の協同理想と聯關して國民的自己修養、自己鍊成を説くものは、常によりき結果を招致するものなるを以て、その是非を云々するものではないが、一たび軌道を外れて低俗化すれば、個人主義化する所に危險があるのである。神國日本國民の日常生活は、國家の神を中心とする國家的宗教生活でなければならぬ。國家的宗教生活に或る弛緩が生じた時は、必ず何等かの形で個人の福利を説く宗教が興つて來るが、かゝる個人的宗教に依つて國民の總ての幸福はあり得ない。ただ國家的宗教の衰へぬ限り國家は興隆し、國民は總て幸福であり得るのである。

今は理論に代ふるに信念の復活、思考に代ふるに實踐の奮進を以て始められなければならない。

故に我等は、基督の神に代ふるに國家の神を以つてし、佛に代ふるに祖先を以てし、而してエホバ及び如來に對する感恩感謝の日常生活は、皇室を始め奉り、國家の神及び祖先に對する感恩感謝の日常生活に置き代へられねばならない。

而して遠く伊勢の地を訪ねること少なき我々は、神國日本國民である限り一戸残らず神棚を設け、

天照大神を齋き奉り、朝夕、全家族打揃つて拜禮し、次で宮城に對し奉り遙拜し、而して靖國神社及び祖先に對する拜禮を怠つてはならぬ。特に子供は幼少の頃より、かゝる環境の中に育て、敬神崇祖の信念を確立せしむ可きである。

嘗て、著者は京都旅行の際、高山彦九郎が尊皇の大義を説いて京都に至り、御門の前に跪座遙拜してゐる姿を、その儘三條橋上に見たる時、暫し感涙に咽びそこを立ち去ることが出来なかつた。神國日本に於て、幾多の銅像ありと雖も、あの皇國民としての眞に迫つた姿を、その儘表徴したものが、他にあらうか。封建制度下にあつては、大名に對してすら、領民は土下座した。我等皇國民たるもの、皇大神宮並に宮城前に於ては、常に跪座遙拜の誠を致したきものである。

又、我々は我等小家族に於ける祖先の墓參を行ふ如く、國家と云ふ大なる家族の家長に當らせられる上、皇室の御墓參り、即ち歴代の御陵を、閑ある毎に努めて巡拜し、その敬遠追慕の誠を致さねばならぬ。

近時、國民學校卒業生は、伊勢の皇大神宮及び桃山御陵等に、參拜旅行をなさしめるを常としてゐる。これ、實に敬神崇祖、國民精神作興の見地より、國民教育上最も重大な行事であり、大いに獎勵す可き事であるは言を俟たぬが、近年は輸送の關係もあり、或る地方の國民學校に於ては、その行事が取止めになつた由も聞き及んでゐる。戦時下、輸送の關係とは云へ甚だ遺憾の極みに堪えぬ。

盟邦獨逸に在つては、曩の歐洲第一次大戰に於て、僅かに敵國の侵入を許した東プロシヤの一角を屈辱の地として、凡ゆる國家施設をなし、國家の費用を以て青少年をこの地に送り込み、大いに國家意識の昂揚に努めたといはれてゐる。

彼我對照するに、神國日本に在つては、悠久三千年の歴史を背景として、かゝる地を撰ぶ迄もなく大和に聖地あり、此處に向つて國家の費用を以てどし／＼青少年を送り込み、この非常時局下に於てこそ國民教育訓練上の絶好の機會として、益々鍊成す可きである。にも關らず、國民學校兒童の參拜旅行すら取止めとせざるを得ないと云ふに至つては、非常時局下、種々の關係ありとは云へ、眞に遺憾の極みである。宜しく政府は、これが對策に善處してもらいたいものである。

曾て、國家の平安と強盛とを擁護する神々としてヴィクトリア、カビトリナス、ジュピトル、マールス等を有する古代羅馬の宗教ほど、國家中心的趨向の強ひものはなかつた。而して羅馬の民衆は、これ等の國家の守護神に對して、強烈なる崇敬と熱禮とを獻げてゐた。然るに猶太人に特殊であつた神ヤヘーの舊約が全く更改せられて、神の子基督を中核とする世界的新約宗教に變貌し、この亡國民の宗教が破竹の勢で、羅馬及び羅馬に征服せられた國々の舊領土及び植民地に、舊國境を蹂躪しつゝ、非國家的な教義を宣布した。而して、國家的宗教の神を中心とする往時の鞏固なる國民的團結を弛緩せしめ、祖國の守護神を自ら見捨てた結果は、遂に脆くも亡滅への路を急がねばならなかつた。

只我々惟神の大道に育まれた日本人は、國家的宗教を其の國民的結束の中核とした古代羅馬が、曾ては歐洲に威烈を稱へる文化的優強國として繁榮したにも拘はらず、斯かる經過のもとに滅亡した事實より、動かす可からざる因果律に就ての教訓を受けることが出来るであらう。それは總ての國の正統的宗教は、原則として國家的たる可きであつて、之を要つた國民は、結束より分離して、個人本位の自利追求に趨き、遂に國家の解體に終末すると云ふ嚴乎たる一事である。

歴史を貫く民族精神

民族精神の發生

日本精神の本質は、一口に云ふなら國家精神であると云ふことが出来る。國家的精神は、我が國民生活の指導理念であり、規範であつて、それは國家を中心として生きることを第一義とするものである。而して、天皇即國家といふ事實から云へば、國家の爲に生きる事は、同時に 天皇の爲に生きることである。かゝる意味よりすれば、日本精神の本質は、 天皇を中心として生きることを第一義とするものゝ謂である。即ち 天皇中心の國家生活に生きることが、それである。

凡そ如何なる國家に於ても、その國民が國家を中心とし、その主權者を中心として生きてゐないものはないのであるが、我が國家の成立つた事情は、他の國家の成立に於いて見るが如き、その主權者と國民との間柄が、單なる統治者と被統治者との權力關係によつて繋がるものでなく、一に血統を同じくする者の親愛關係であることが知られる。而してこの國家が血族關係に依つて成立してゐるところに、一切の日本の特質が生じてゐるのである。

天皇は國民の立場より云へば、統治者と被統治者の關係にあり、主權者として絶對の權威であらせられるは勿論の事であるが、同時に祖神の正系を承け繼がれ、現世的表現たる現津御神として萬世一系の皇統を繼がせられてゐることによつて、至高至尊の存在であらせられるのである。雄略天皇は、

義は乃ち君臣なれども情は父子を兼ぬ

と仰せられてゐるが、全くかゝる意味を道破せられたものと拜察する。祭政一致も忠孝一本の事實も、一にこれより生じたるものに他ならないのである。

かくして一切の國民生活は、その祖先の生活と結合することに依つて日本的色調を帯び、その國家的精神は、祖先尊崇の要素を加へることに依つて、日本の特質を生じて來るのである。随つて日本精神の本質としての國家的精神は、崇祖的思想を含んでゐるものと見る可きである。かゝる點が、他の國家の國家生活と全く異つてゐるところである。即ち日本精神の本質は、前述の如く國家精神であるが、これを特色づけるものは、一に崇祖思想であると云ひ得る。而してこの日本の特質が、日本精神の一切の力の源泉となつて、限りなき發展をもたらし、茲に偉大なる國家生活を實現してゐるのである。

日本民族の史的神話の冒頭に、伊邪那岐・伊邪那美の二神が、所謂大八州を次々とお生みになられる名高き國生みの事實が力強く描き出されてゐる。初め伊邪那岐・伊邪那美の二神は、天神（天之御中主神・高御產巢日神・神產巢日神）より「コノ漂ヘル國ヲ修理固成セ」と云ふ御依託を受けて、天降りま

しましたのである。而して最初に「水蛭子」と云ふ島をお生みになられたが「今吾ガ生メシ子不良」といふので、高天原に還り昇つて天神の教を請はれ、國土の島々を次々と生み給ふたのである。これに依ると國生みの事實は、唯單なる二神の事のみでなく、天神の御心によれるものであつて、いはゞ日本民族の祖先に依つて成された民族的事實であつたと見て差支へなからうと思ふ。

本居宣長が

そも此の道はいかなる道ぞと尋ねるに、天地のおのづからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず。此の道はしも可畏きや高御座巢日神の御靈により神祖伊邪那岐大神・伊邪那美大神の始めたまひて、天照大御神の受けたまひ、たもちたまひ、傳へ賜ふ道なり。敬是以神の道とは申すぞかしと云つたのは、この事實を指したものである。而してこれが日本民族の本來の心であつて、とりも直さず日本精神の本質であり特質でもあるのである。

以上述べた如く、或る國の一部一部の生誕を根氣よく述べ立てたる神話は、他の民族の間には殆んど發見することが出来ないものである。この一事こそ如何に日本民族の胸に國家觀念の旺盛に燃え上つてゐたかを、表明してゐるものと云はざるを得ない。

國土を生み給ふた二神は、次で多くの神々をお生みになられた。かくして多くの神々を生み給ひ最後に天照大神・月讀命・建速須佐之男命の三柱の神をお生みになられた。而して「吾ハ子生ミ生ミテ生ミ

終ニ三柱ノ貴ノ子得タリ」と御喜び遊ばされ、天照大神に

汝ガ命ハ高天原ヲ知ラセ

と御依託になつたのである。この時に當つて葦原中國は高天原の治下にあつた事は云ふ迄もない事であると思ふ。

茲に至つて我が神國日本は、謂はゆる國土と人民と更にそれ等を主宰する主權者とが具つて、明かに國家の體をなしてゐるのである。しかもこれが祖先と密接に結合することに依つて、皇室の祖宗にまします天照大神と、八百萬の神々と、國土とは、伊邪那岐・伊邪那美の二神の御子として同胞である。即ち我が神國日本にあつては、治めらる可き國土と治む可き者とが、父母を同じくし血を分け合つてゐるのである。この一事は、他の民族の神話には殆んど見出し難い特殊なものであつて、皇室と國家との關係の緊密切實さを、心からの誇とし喜びとした日本民族が、熱誠をこめて強調し高唱せずにはゐられなかつた大切な點である。而してこの國土の一切が祖先と結合して血族的關係の存するところに日本的特質があり、この特質が發展して日本精神の確立を見るに至つたのである。日本精神の本質は飽くまでこの民族的特質の上に存することは云ふ迄もないであらう。

國家的姿態としての高天原

以上述べた事情の下に成り立つた日本國家の本質的姿態は、これを高天原の世界に於て見ることが出来る。高天原の世界は、明かに 天照大神を中心として國家的姿態をとつた存在となつてゐる。天照大神が一度天岩屋戸にお隠れになると、

爾チ高天原皆暗ク、葦原中國悉ニ闇シ。此ニ因リテ常夜往ク。於是萬ヅノ神ノ聲ヒハ狹蠅那須皆滿キ、萬ヅノ妖悉ニ發リキ。

と云ふ状態であつた。その中心を失つた高天原の世界は亂れに亂れて、殆ど收拾することの出来ない状態にあつたことが想像される。そこで所謂天岩屋戸前の八百萬の神々の奉仕となり、全靈全力を挙げ萬事を盡して 天照大神の出現を冀つてゐたのである。而して 大神が天岩屋戸をお出ましになると、

高天原モ葦原中國モ自ラ照リ明リキ。

と述べられてある通り、高天原はもとより葦原中國も天照大神の御稜威の下に、元の平穩な世の中に復してゐる。かくの如く 天照大神を中心とし奉り、強固なる團結が成つてたのである。

茲に於て神話は一轉して瓊瓊杵之男命の高天原追放となり、出雲國降下となつて、やがて大國主命の時

代となるのであるが、高天原に於ては、

天照大御神ノ命以チテ「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國ハ我が御子正勝吾勝勝速日天忍穗耳命ノ知ラサム國」ト言因サシ賜ヒテ、天降シタマヒキ。於是天忍穗耳命天浮橋ニ多多志テ詔リタマハク、「豐葦原之千秋長五百秋之水穗國ハ伊多久佐夜藝至有リ那理」ト告リタマヒテ、更ニ還リ上ラシテ天照大御神ニ請シタマヒキ。爾高御產巢日神、天照大御神ノ命以チテ、天安原ノ河原ニ八百萬ノ神ヲ神集ヘニ集ヘテ、思金神ニ思ハシメテ詔リタマハク、「此ノ葦原中國ハ我が御子ヲ知ラサム國ト言依サシ賜ヘル國ナリ。故此ノ國ニ遺速振ル國神等ノ多在ルト以爲ホスハ、是何レノ神ヲ使ハシテカ言趣ケマシ」トノリタマヒキ。爾ニ思金神及八百萬ノ神クテ議リテ「天菩比神是遣ハシテム」ト白シキ。故天菩比神ヲ遣ハシテム」ト白シキ。故天菩比神ヲ遣ハシツレバ、乃テ大國主ノ神ニ媚ビ附キテ、三年ニ至ルマデ復^{カヘリタマフ}奏サザリキ。

是ヲ以テ高御產巢日神、天照大御神、亦諸ノ神等ニ問ヒタマハク、「葦原中國ニ遣ハセル天菩比神久シク復奏サズ。亦何レノ神ヲ使ハシテバ吉ケム」。爾ニ思金ノ神答白シケラタ、「天津國玉神ノ子天若日子ヲ遣ハシテム」トマフシキ

とある如く、天若日子に大國主命の許に降つたが、その女下照比賣^{シメヒメ}を娶り、八年になる迄復命しなかつた。

故爾ニ天照大御神、高御產巢日神、亦諸ノ神等ニ問ヒタマハク、「天若日子久シク復奏サズ。又曷レノ神ヲ遣ハシテ、天若日子ヲ淹留ル所由ヲ問ハシメム」トトヒタマヒキ。於是諸ノ神タチ及思金神答白サク、「姓名鳴女ヲ遣ハシテム」トマラス……………

かくして高天原では姓名鳴女を遣はして天若日子が久しく留まる理由を問はしめられたが、姓名鳴女は若日子の矢で射殺された。

そこで高天原に於ては、第四回目の神議が天安河の河原で凝らされ 天照大神の御諮問に應じて、建御雷神が遣はされた。建御雷神は出雲國に降り大國主命に對し、所謂國讓りの談判となるのである。

以上の事實の間に成立つ高天原の世界は、これを畏くも 天照大神の御立場より拜察するに、專制的に事が運ばれてゐるところは少しもなく、一に八百萬の神々の神議に依つて事が決せられ、又八百萬の神々の方から見るに、天照大神の御心のまに／＼奉仕して輔弼の實を十分に盡してゐた趣を感じることが出来る。これを更に深く考へると、後世に於て見る民の心を心とせられた 天皇の御心と、天皇の御心を心として仕へ奉つた民の心とが現はれ、それが一つとなつて國家の發展が畫せられてゐる趣が見えるのである。制度及び形式こそ盡はずと雖も、この時に於て既に我が神國日本の國家生活の本義は、儼存してゐたものと云ひ得るであらう。

かくて天孫遷遷奉命の御降臨に際し 天照大神は、

皇孫ニ勅シテ曰ク、葦原ノ千五百秋ノ瑞穗ノ國ハ、是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫就イテ治セ、行矣、實作ノ應エマサンコト、マサニ天壤ト窮無カルベシ
是ノ時

天照大神手ニ寶鏡ヲ捧チ給ヒテ、天忍穗耳尊ニ授ケテ祝ギテ曰ク、吾兒此ノ寶鏡ヲ視マサムコト、マサニ吾ヲ視ルガゴトクスベシ、與ニ床ヲ同ジクシ、殿ヲ共ニシ、以テ寶鏡トナスベシ。

又勅シテ曰ク

吾ガ高天原ニ御ス齋庭ノ稻穗ヲ以テ亦吾ガ兒ニ御セマツル。(日本書紀)

と御神勅を賜つた。又

高皇產靈尊因リテ勅シテ曰ク

吾ハ則チ天津神籬及ビ天津磐境ヲ起シ樹テテ、マサニ吾孫ノ爲メニ齋ヒ奉ラム、汝天兒屋命、太玉命、宜シク天津神籬ヲ持チテ、葦原中國ニ降リテ、亦吾孫ノ爲メニ齋ヒ奉レ。(日本書紀)

と。この中第一神勅、第二神勅は、

天照大神が 皇孫に直接授け給ひたる有名な神勅であつて、國民の等しく知るところで傳説を要しないが、第三神勅は然らずして、高皇產靈神が後の中臣氏の祖先たる天兒屋命及び忌部氏の祖先たる天太玉命の二神に對して、

「惟ハクニ爾イマシフタヘシノカミ二神亦同ジク中ニ侍ヒテ、善ク防ギ護ルコトヲ爲セ。」

と命じ給ひ、皇孫の御安泰に深き御配慮をよせ給ふて授けられたもので、「自分は高天原に於て皇孫の御爲に神籬の御祭をするぞ。汝等二神も亦この天津神籬を捧持して、葦原中國に降り、皇孫の御爲に此の神籬の祭をなせ。」との意味であると拜察する。

この三大神勅の大御心を奉じてそれをそのまゝ實現するのが日本精神の本義である。御神勅の御精神は日本精神の眞髓を遺憾なく表現せられたるものであつて、日本精神の本義はこれに依つて初めて言語的表現を得たのである。而してこれが本居宣長の

「高御產巢日神の御靈により神祖伊邪那岐大神、伊邪那美大神の始めまひ、天照大神の受けたまひ
たまちたまひ、傳へ賜ふ道」

と述べた所謂神の道であり、日本民族本來の心である。日本精神はこの御神勅によつて絶好の表現を得民族生活の大理想として永世變りなき大方針となつてゐるのである。

天孫運運藝命は、天照大神の大御心のまに／＼御神勅を奉戴して、その民族的大理想を實現す可く日向國に御降臨になつた。嘗つて天岩屋戸の前に奉仕した伊斯許理度賣命、玉祖命、布刀玉命、天兒屋命、天宇受賣命、思金命、天手力男命等を始め八百萬の神々は、天孫に扈從して日向の地にお降りになつたのである。これに依ると日向の朝廷を中心とする國家生活の姿態は、高天原に於ける國家姿態そのまゝ

であつた。

天孫邇邇藝命の御子天津日高日子穗穗手見命、その御子天津日子波限鵜草葺不合命、その御子の神倭伊波禮毘古命と申上げるのが、後の人皇第一代神武天皇、即ち神代の理念を國家的現實の地盤の上に擴充し、之を「天業恢弘」と云ふ高遠なる御使命の下に實踐し給ふた最初の天皇であらせられる。天皇は皇祖天照大神より承け繼がせ給うた高遠なる理想と雄大なる抱負とを實現す可く、日向の地を出で立ち大和の地に向はせられて、茲に日本建國の事が名實共に具はるのである。

神武天皇の橿原遷都の御詔勅の中に

上ハ則チ乾靈ノ國ヲ授ケ給ヘル德ニ答ヘ、下ハ則チ皇孫ノ正シキ道ヲ養ヒ給ヒシ心ヲ弘メム。然シテ後ニ六合ヲ兼ネテ、以テ都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ宇ト爲ムコト、亦タ可カラズヤ。

と仰せられてあるが、國家を以て家族的信頼と親愛の情とに依つて、平和な世界たらしめんことを望ませられた御建國の御理想と御抱負とを遺憾なく表明せられたものである。しかも是は、皇祖天照大神並に皇孫の大御心であらせられた事は、その御詔勅に依つても明かなところであり、同時に民族的大理想であり大抱負であつたことも、また明かなところである。

この八紘一字の御詔勅は、曩に拜したる天照大神の天壤無窮の御神勅と共に、我が大和民族の大理想と大抱負とを表明したものであつて、此の上もなく意義深く、且又一は皇祖天照大神の大御心であ

り、一は人皇第一代 神武天皇の大御心であると云ふ意味に於て、この上もなく尊いのである。而してこれ等の大理想が、國民生活の上に着々と實現せられてゐるところに、日本精神の世界に冠絶する優秀さがあり、不可侵の力の強さが存するのである。即ち 天照大神の御神勅によつて示されたる「吾が子孫の王たるべき地なり。」とあるは、萬世一系の皇統に依つて實現せられ、「寶祚の隆えまさむこと當に天壤と窮りなかるべし。」とあるは、今や全世界に雄飛して生々發展の窮りなき現實、神國日本といふ理想國家に依つて、御言葉通り實現せられてゐるのである。更に 神武天皇の八紘一字の大精神は、歴代 天皇の愛民主義の御善政となり、一般國民の忠君愛國の赤誠となつて遺憾なき實現をみわるのである。

日本精神の時代的意義

古來我が國に於て日本精神が強烈に擡頭し、皇道の本領が最も詳かに書き出されたのは、民族生活が行き詰り、或る意味に於て非日本的分子が横行した時に於てである。素より皇道乃至日本精神は、我が國の歴史を貫く民族精神であつて、その脈々たる傳統は、當時たると非常時たるとを問はず、常に躍動してゐるのであるが、それが最も明かなる姿を顯現するのは、重大なる政治的決定が行はれた時であり

非常時に於いてある。

今や我が神國日本に於ては、明治以來の歐米追従の時代が去り、日本精神が國民生活を全面的に支配するに至つた。我々は歴史を反省することに依つて日本精神を再認識し、而して我が國家に固有なる皇道の現代的意義を把握すべきである。

大化の改新

我が國の歴史に於て、皇道が最も明らかな姿に於て闡明せられたのは、第一に大化の改新であつた。それは十七條憲法に現はるゝ聖德太子の御理想が中大兄皇子に依つて繼承せられ、孝德天皇の御代に實現されたものである。故に大化の改新について觀るに當つては、先づその思想的先驅たる十七條憲法に付いて觀なければならぬ。

この憲法は太子が推古天皇の皇太子として攝政せられてゐた當時に撰定せられたものであるが、太子の時代には、建國當時の社會組織であつた氏族制度が腐敗して盛に氏族の兼併が行はれ、政治組織であつた封建的分權制度が、固定沈滞して盛に權力の爭奪が起つてゐた。即ち強大なる氏族は、次第に弱小なる氏族の土地人民を併せ、遂に少數の氏族が國內對立して互に權力を奪ひ、稍もすれば巨大なる

富力と勢力とを持つて、建國の基礎たる皇室中心主義を破壊せんとする傾向を示めすに至つた。

かくの如き國家の危機に直面し、これが打開の大使命を擔つて出現されたのが、一世の先覺者望徳太子であらせられた。太子は、推古天皇の十二年四月、憲法十七條を制定して百官に示された。それは太子の國家論であり政治改革論であり、新日本の國是でもある。

憲法第一條に

和ヲ以テ貴シト爲シ、忤^{ツカフ}フコト無キヲ宗トナセ。人皆黨有リ、亦違レル者少シ。是ヲ以テ、或ハ君父ニ順ハズシテ、乍^ツ夕隣里ニ違フ。然レドモ上和シ下睦ビテ、事ヲ論フニ諧ヘバ、則チ事理自ラニ通ズ。何事力成ラザラム。

と明示されてゐる。和とは、あらゆる自然的集團分野に於て、正當なる單一に歸一する一心一體が存することである。それに基づけば領土國家に於ては、君主に絶對隨順し奉る總臣民の一心一體であり、血縁的な家に於いては、父に歸一する全員の一心一體が存する。即ち指導制原理、歸一の原理であり、忠孝一本である。和に於いては、あらゆる結黨、即ちあらゆる人爲的結合は、對立するもの（例へば政黨）であれ、對一支配するもの（例へば閥族的又は幕府的存在）であれ、否定せられてゐる。かくの如く、和は太子の憲法の根柢に置かれたる思想であつて、それを實現する方法は、平和撓亂の因をなす族黨觀念を一掃して、ひたすら天皇に歸一し奉り、上下一致事に當ることである。

第三條に

詔ヲ承リテハ必ズ謹メ。君ヲバ則チ天トシ、臣ヲバ則チ地トス。天覆ヒ地載セテ、四時順リ行キ、萬氣通フヲ得。天ヲ覆ハント欲スルトキハ則チ壤ル、ヲ致サムノミ。是ヲ以テ君言フトキハ臣承リ上行フトキハ下靡ク。故レ詔ヲ承リテハ必ズ慎メ。謹マズンバ自デニ敗レナム。

と「承詔必謹」の大義が示されてゐる。この大義は萬世一系の 天皇御一人に對し奉る臣民の絶對隨順といふ意味の一心一體として示されてゐる。

更に第十二條に於ては

國司、國造、百姓ヨリ斂メトルコト勿レ。國ニ二君ナク、民ニ再主ナシ。率土ノ兆民、王ヲ以テ主トナス。任ズルトコロノ官司、皆是レ王民ナリ。何ゾ敢テ公ト與ニ、百姓ヨリ賦斂オウケンラム。

とて、封建制度を否定して、皇室中心主義を強調されてゐる。殊に

「國ニ二君ナク、民ニ兩主ナシ。」

の如きは、天照大神の御神勅

葦原ノ千五百秋ノ瑞穗ノ國ハ、是レ吾ガ子孫ノ王タルベキ地ナリ、宜シク爾皇孫就イテ治セ、行矣
寶祚ノ隆エマサンコト、マサニ天壤ト窮無カルベシ（日本書紀）

と呼應して、我が國體の根幹をなす堂々たる大宣言である。

かくして太子は中央集權の樹立に依つて封建的氏族制度の惡弊を打破し、各地に割據する豪族の勢力を天皇の唯一權力の下に統一せんとされたのである。しかし乍ら、太子の時代には未だ社會事情がそれを許さず、この理想は次の時代に至つて大化の改新となつて現はれたのである。

天ヲ覆ヒ、地ハ載ス。帝道・唯ダ一ツナリ。而ルヲ末代・澆薄ギテ、君臣・序ヲ失フ。皇天、手ヲ我ニ假リテ、暴逆ヲ誅ヒ殄シ、今、共ニ心血ヲ瀝ゲリ。而レバ自今以後、君ハ二ノ政無ク、臣ハ貳朝無ケム。若シ此ノ盟ニ貳カバ、天災シ地妖シ鬼誅シ、人伐ス。倭キコト日月ノ如クナラム。

と日本書紀にあるが、是は中大兄皇子が羣卿を代表して盟文を讀上げられたものである。

「天ヲ覆ヒ、地ハ載ス。帝道唯ダ一ツナリ。」

は憲法第三條の

「君ヲバ則チ天トシ、臣ヲバ則チ地トス。天覆ヒ地載セテ、四時順リ行キ、萬氣通フヲ得。」

と相通じ、

「君ハ二ノ政無ク、臣ハ貳朝無ケム。」

は憲法第十二條の

「國ニ二君ナク、民ニ兩主ナシ。率土ノ兆民、王ヲ以テ主トナス。任ズルトコロ官司、皆是レ王

臣ナリ。」

と相通じ

「若シ此ノ盟ニ貳カバ、天災シ地妖シ鬼誅シ、人伐ス。皎キコト日月ノ如クナラム」
は憲法第三條の

「地、天ヲ覆ヘント欲スルトキハ則チ壞ル、ヲ致サヌノミ。」

と相通するのである。これを以て見るも、大化の改新の指導精神が聖德太子の憲法十七條の御精神であり、大化の改新の斷行が聖德太子の大理想の實現であつたが窺はれるのである。

かくて官制、田制、税制を定め、公地公民制の下に政治組織、社會制度の上に非常なる革新が齎られ、氏族制度の下に閥族の壟斷せし政權は中央に集められ、天皇親政と云ふ皇國本然の體制が現はれ、普天の下率土の濱、みな皇土皇民の理想は實現せられたのである。

建武の中興

中大兄皇子を輔佐し奉つて大化の改新を遂行せる藤原鎌足の子孫が、政治的に擡頭して播磨新羅時代を來し、遂には彼等一門が全く政治の中心となり、政府の榮官は悉く藤原氏一門の獨占するところになつた。而して大化の改新の土地國有制も、開墾の獎勵、功臣への恩賞、社寺への寄進等に依つて私有田

が年々増加し、貴族及び勢力ある寺院が競つて土地の占有に努め、謂はゆる莊園時代を現出するに至つた。

宇多天皇は早くもこれが矯正策を講じ給ひ、その御精神を繼承し給へる、醍醐天皇は、一紀一班の制に據りて班田の復活を命じ給ふと共に、莊園整理の勅を下し給ふた。これ實に莊園整理の先驅をなすものであり、後三條天皇の莊園の御整理に見られる如く、その後朝廷の御方針は、略々これに基づかれたと云ふことが拜察出来るのである。

藤原道長の薨去後、後三條天皇の御代となるに及んで、藤原氏累代の立后、外戚政策は一頓挫を來たし、政治の實權は漸く藤原氏を去つた。後三條天皇は東宮にまします事二十餘年、夙に藤原氏の專權を慨せられ、地方制度紊亂の弊源が莊園激増にあることを看破し給ひ、まづ改革の鋒を之に向けさせ給ふた。即ち勅して寛德二年以後、新立の莊園及びその年以往にても立券の分明ならざるものは、すべて停止す可しと仰せ下され、記録莊園券契所を開いて諸國より莊園の券契を召し上げられ、その眞偽を鑑査して失々之を處分せられた。又國司の重任を禁じ賣官の弊をも改められた。

かゝる意志的斷行力を以て種々革新を進められたが、僅か五年にして退位し給ひ、間もなく病を得て崩御遊ばされた。茲に於て延喜、天曆の精神は益々崩壊し、保元、平治の亂を経て、鎌倉幕府といふ變態的政治形態が生れるに至つたのである。

これを御憂慮遊ばされて、天皇御親政の昔にかへさんとされる。後三條天皇の御精神を繼承し給ふたのが、後鳥羽上皇であらせられる。上皇が順德天皇と共に御計畫遊ばされた王政復古の大理想は、承久の亂に依つて空しく敗れた。

次にこれを繼承し給ふたのが、後宇多天皇であらせられる。神皇正統記にも明かな如く、天皇は深く、宇多天皇の御代を御理想とせられ、凡てのことを寛平の舊儀に任せられた。この後宇多天皇を御父として其の御精神を繼承し給ひ、王政復古運動を起されたのが、後醍醐天皇であらせられる。

建武の中興の大業は、鎌倉幕府の討滅より始まり、王政復古を其の目的としたものであるが、其の理想は大化の改新の運動を發展せしめた延喜、天曆の治に還ることであつた。

太平記の著者は、後醍醐天皇の御治世を讃へて、

「御在位の間、内には三綱五常の儀を正しくして周公孔子の道に従ひ、外には萬機百司の政怠り給はず、延喜・天曆の跡を追はれしかば、四海風を望んで悦び、萬民徳に歸して樂しむ」

と書いてゐる。其の稱號の如きも日光輪王等に傳はる國寶銅鏡には「後醍醐院を以て自ら號し給ふ」とある。これ等を綜合して考へても、如何に天皇の御治績が上り、天皇の御理想も亦延喜・天曆の復興にあらせられたかが拜察せられるのである。

天皇はこの御理想に依つて北畠・楠木・新田氏等、忠臣の義烈と相俟つて中興の大業を成就されたの

であるが、不幸にも其れは奸臣の爲に覆へされ、

「玉骨は縦南山の苔に埋まるとも魂魄は常に北闕の天を望まんと思ふ、若し命に背き義を輕んぜば君も繼體の君にあらず、臣も忠烈の臣にあらず」(太平記)

との悲壯なる御勅を遺して崩御遊ばされた。

この御精神を繼承して立たれたのが、後村上天皇を始め率り、天皇を繞る諸忠臣であつた。しかし時に利あらずして中興の大業は再び挽回す可くもなかつたが、この中興運動が民心に與へた國家的精神は、永く其の底流となつて脈管を傳ひ、明治維新となつて成就したのである。實にこの運動は大化の改新と明治維新とを繋ぐ中軸であつた。

吉野朝時代は我が國史上最も大義名分の衰れた時代であり、國民の大部分は國體の本義を解せず、順逆の理を辨へざるを以て、吉野の朝廷の御威光は衰へ、足利氏の專横は暮るのみであつた。これを慨歎して兵馬佐徳の間に老筆を詞し「神皇正統記」を著したのが、北畠親房卿である。親房卿が、此の書を著したのは二つの理由がある。一つは當時の國民が大義名分に暗く、順逆の理を誤つてゐたために、吉野朝廷の勢が日に衰へ行くを慨して、國民に我が國體の本義を知らしめる事にあつた。今一つの理由は後醍醐天皇の御後をうけて、新に即位せられた、後村上天皇に、帝王學として政治學の御參考に供し奉る爲であつた。

斯くの如き必要に依つて述べられた親房卿の論旨が、我が國體論に於ける金科玉條として、後世發達したる國體論の基礎となつたのである。

明治維新

武士階級の指導精神は大義名分であり、この大義名分とは他ならず、天皇政治の確立に於て最高の意義を有つものであるが故に、武家政治は常に苦しいジレンマの上に推移したことは否定出来ない。鎌倉幕府以來、次第に明確になつた武士道のイデオロギイは武士自身に何を教へたか。その結果、かの元寇の國難に際しての、武士の滅私的奉公の熱誠となり、吉野朝時代に於ける楠木・新田・菊池等、萬古神人を泣かしめる熱烈な忠魂ともなつたのではないであらうか。しかし乍ら、時代は心ならずも、御委任政治の變態期を延長して、更に徳川幕府三百年の命脈を加續するに至らしめた。

江戸を中心とした封建制度は武家政治の最後の繁榮であると共に、その自己否定の最後の段階に到達したる形態でもある。幕府は自己の政權の強化と、自己が據つて立つ所の武士階級の擁護とに全力を注いだ。故に農工商及び賤民の各階級は、ひとへに武士の支配權確立に役立つ爲めにのみ存在を認められてゐるかの如き悲慘なる地位にうち沈められ、またこの武士を種々の身分に區別され、下級者は上級者

に押取され壓制されて、國內に於ける階級對立は民衆生活の貧窮化と共に益々深刻を極めて行つた。畏れ多くも後水尾天皇は

しげらばしげれおのがまゝ

とても道ある世とも思はず

と御自らの御悲嘆を洩らさせ給ふた。

かくの如き状態は果して皇國にある可き姿であらうか。果せるかな、武士階級一般の徳川一門に對する忠誠と獻身とを強化せんとしたる、極めて狡猾な政策に基く幕府の教學獎勵は、その意圖に反して、却つてそこより幕府存立の基礎に對する懷疑と批判とへ、而して最後には理論によるのみならず、實力によるその否定にまで發展せずにおかなかつた。

大義名分を強調する朱子學派の山崎闇齋は、單なる朱子學者として終始せず、朱子學の根本眞髓たる大義名分の精神を把握してこれを理論的根據とし、それに依つて時代の現實を批判し、自己を内省し、もつて高遠なる氣魄を養つた。随つて彼の大義名分論より出で来るものは、幕府を否定して皇室を正しき位置に復さんとする尊王思想であり、支那崇拜の風潮を排撃する日本主義である。

かゝる闇齋の薰陶を受け、其の思想を繼承したるものが淺見綱齋である。彼は貧寒に安んじて閑達を求めず、慷慨自ら喜んで諸侯に仕ふるを屑とせず、其の志は常に天下國家にあつた。その書を講ずるも

亦萬世の爲に大平を聞くと云ふ信念に樹つてゐたその著「靖獻遺言」は當時の志士の間に愛讀せられ、聞齋派の學者竹内式部の如きは、同志を糾合して士氣を鼓舞する爲に之を講ずるを常とした。多くの同志はこれ聞いて發奮し、君徳を正安に置かんとする精神より遂に寶曆の變をさへ捲起するに至つた。

淺見綱齋の門人に若林強齋がある彼は山崎闇齋以來の傳統たる楠公崇拜の精神を受けて、其の書齋を「望楠」と號し、楠公の絶對的盡忠、即ち、

「假りにも君を怨み奉るの心發らば、天照大神の御名を唱ふべし」

との言に感激してゐる。強齋の精神は其の後望楠書院に依つて繼承せられ、梅田雲濱、大澤鼎齋に至る百餘年間尊王思想の溫床となつた。

かくして山崎闇齋を先達とする朱子學派の尊王思想は、約二百五十年の長い歴史を有する一大潮流となつた。而して初めの百年間は尊王論即ち理論構成の時代であり、後の百五十年は勤王大業實踐の時代であつた。

幕府に依つて獎勵され、儒學が隆盛となるに及んで支那崇拜の思想が起り、甚だしきは日本を夷狄視する荻生徂徠、大宰春臺の如き學者が生るに至つた。のみならず、國家意識が濃厚に流れてゐた筈の山崎闇齋の門下ですら、

「支那若し孔子を大將とし、孟子を副將として日本に攻め寄せば、諸子は如何なる態度を採るか」

との師の問ひに對し、一同噤然として一人の答ふるものもなかつたと云ふに至つては、當時に於ける支那崇拜熱——中華至上主義が如何に人心を侵蝕して居たかと窺はれる。

かくの如き状態を眼前にした識者は、自ら憂憤を感じずにはをれなかつた。かゝる傾向に對する反動として儒學のみが學問ではない、日本に於ても立派に學問の存在することを主張する學者が出で來り、支那學に對する日本學の構成を志すに至つた。

かくて國學研究の先驅をなしたるものは、下河邊長流と僧契沖であつた。彼等は早くより國文學の研究に従事し、其の名聲が高かつたので、炯眼の士水戸光圀は萬葉集の註釋を委囑した。最初、下河邊長流がそれに着手し、「萬葉管見」を残して世を去つた。而してその後を繼いだ契沖は「萬葉代匠記」を著して之を大成した。それは主として言語學的研究であつたので、古言、古語の根本義を明かにするを得た。

斯くの如く契沖に起れる國文學の新運動は、先づ荷田春滿に依つてよき繼承者を得たのである。彼は儒佛思想の浸潤に依つて、神皇の教、陵夷廢墜したりと嘆き、

ふみわけよ大和にはあらぬ唐鳥の

跡を見るのみ人の道かは

と詠じて、徂徠等の支那崇拜に反抗した。而して、日本精神の太古に還れと云ふ立場より、唯一、兩部垂加等の俗神道を排撃し、古典の儒教的又は佛教的解釋に反對して、直接古語によつて古意を探る可き

を主張した。

春滿に依つてその基礎を置かれた國學は、その弟子加茂眞淵によりて具體的建設を見るに至つたのである。眞淵は契沖に始り、春滿に依つて發展せしめられた萬葉研究を大成した。彼は常に萬葉を研究せるのみならず、萬葉歌人の如く感じ、萬葉歌人の如く歌はんと努めた。彼は

「古への心を知るには、自ら古への歌文を作りて、古への心を心とせざる可らず」となし、若し古へを己が心、言葉に習はし得る時は

「身こそ後の世にあれ、心・言葉は上つ代にかへらざらめや」と云ひ

「古への歌をもて古への心・言葉を知り、それを推して古への世の有様を知る可し」とした。即ち彼は他面に於て古書を通じて古文明を知ると云ふ春滿の精神を發展せしめ、萬葉集に依つ

て古道を明かにすることに努めた。彼は斯くの如くして、簡易自然な上代の人情風俗を見、質實剛健なる上代精神を見た。而して上代日本に對する熱心なる歎美と崇敬とを抱き初めた。此の國民的自尊は、必然儒者の中華至上主義に對する反抗となり、惹いては熱烈なる排佛排儒の思想となつて現はれた。中華至上主義太宰春臺が其の著「辨道書」に於て

「日本に道なし」

と論じたる暴言に對して反駁する爲に書かれたるものゝ内容に、

「我國の上代は言挙げせぬと云ふ言葉の示す如く、儒教的なる事々しき道德論はなきも、道德の實踐は自然の内に於て行はれてゐた。之に反して支那に道德の實踐が早く廢れ、爲に理論のみが發達したのである。かゝる道德理論が渡來して、日本の素朴な古風を破り人間を小伶俐にした」

とて儒教を否定し

「わが皇國の道は天地のまにまに丸く平かにして、人の心詞に言ひ盡し難ければ後の人知り得難しされば古の道皆絶えたるにやといふべけれど、天地の絶えぬ限りは絶ゆることなし」

とわが古道を賞揚してゐる。

かくの如く儒佛排擠の國家的自覺に出發せる古道が、王政復古、尊皇等の思想を基礎づけ、それ等の運動と相通じたのは自然の勢であつた。

斯くの如き古學的運動の機運を受け、之を集大成せるものは、實に本居宣長である。宣長は、常に國文學の文學的並に語學的研究に於いて、契沖以來の國學者の事業を補充したるのみならず、その古道説に於いて、實に、我が國の神道に新しき道を拓いたものである。彼は古典の中でも、古事記を最も尊重し、それに對する從來の儒教的解釋を清算して、古事記を文字通りに解釋し、それに依つて古代人のありのまゝの神觀、世界觀、人生觀を把握せんとした。直隕靈によると、彼は古道を説いて、

「そもこの道は如何なる道ぞと尋ねるに、天地の自らなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず

この道は申すも可畏き高御産巢日神の御靈によりて、神祖伊邪那岐大神、伊邪那美大神の始めたまひて天照大神の受けたまひ、たまちたまひ、傳へ給ふ道なり。故是以神の道とは申すぞかし」と云つた。又宣長は、日本が萬國の元本大宗たる國であることを説いて、

「天地は一枚なれば、皇國も漢國も天竺も、その餘の國々も、皆同一天地の内にして、皇國の天地漢國の天地、天竺の天地と別々にあるものでない。されば其の天地の始まりは、萬國の天地の始まりである。然れば其時になり出給へる天之御中主神以下の神たちは萬國の神たち、日神は萬國を照し給ふ日神に外ならぬ。然るに若し此神たちを、たゞ日本のみの神とする時は、天地の始まりも又日本のみの天地の始まり、日神も日本のみの日神にして、異國の天地日月は、別のものとなつて来る。されど、天地日月が國によつて異なる如きことは有り得べき道理でない」と云つてゐる。

宣長の精神を繼承したるものは、平田篤胤である。彼の思想内容に就ては、宣長が古事記を尊重したるに對して、日本書紀を中心とし、古事記を別傳と考へた。又祝詞に重きを置き、風土記・新撰姓氏錄・古語拾遺等をも捨てなかつたところからすれば、彼は宣長よりも遙かに、廣い立場から神代史及び古道を明かにしたものと云ひ得るであらう。而して彼は古道と神道とを同一視し、其の傾向として宣長よりも一層情熱的宗教的であつた。彼の古道思想をその講演筆記たる「古道大意」によつて窺ふに、

「さて此の方の説く道の趣は、何に據つて申すぞと云ふに、古の事實を御記し傳へ遊ばされたる朝廷の正しき御書物を本として申すので、一體眞の道といふものは、事實の上に具はつて有るものでござる。然るをとかく世の學者などは、盡く教訓といふ事を記したる書物でなくては、道は得られぬ如く思つて居るのが多いで、そりや甚心得ちがひなことで、教と申すものは事實よりは甚下い物でござる。その故は、事實が有れば教はいらず、道の事實がなき故に、教といふことがおこる。」

「人の道に關ること、言ひもて行けば、多端のやうなれど、實はこれから割出したやうなもので、その元は皇産靈神の御靈に因つて出来る人じやに依つて、その眞の情も直に産靈神の御賦けなされた物で、それ故にこれを性と云うでござる。」

「この性の意はうまれつきと訓む字で、扱それほどに結構なる性を、天津神の御靈に因りて生れ得てゐるに依つて、それなりに偽らず狂らず行くを、人間の眞の道と云ふ。又その生れ得たる道を邪心の出来ぬやうに修し齋へて、近くたとへやうならば、御國人はおのづから武く正しく眞に生れつく。これを大和心とも御國魂ともいふでござる。然るを他の國々の小さかしき教説や、或は御國を忘れて外國を慕ふやうな、生れもつかぬ情が添ふと、それを説きさとし、いやさうではない、かうではないと、元の性に思ひ返し、思ひ直させるのを、教と云ふでござる。……………どうぞこの大和心、御國魂をば狂げす忘れず、修し齋つて、直く正しく清く善しい大和心に磨きあげたい物でござ

る。」

と、實に日本の純粹性を追求して堂々たるものがある。

契沖に始まる國文學上の復古運動は、かくの如くにして、熱誠且極端なる忠君愛國の思想を生んだ。この思想が遂に種々なる政治上の因縁と相結んで、武家政治の没落、王政復古を實現する動機となつたことは云ふ迄もない。されど、斯くの如き尊皇愛國の思想は、必ずしも國學者及び朱子學派の儒者のみの所有ではなかつた。この思想を鼓吹する上に重要な役割を果したるものは、大日本史及び日本外史の精神であつた。

水戸の藩主徳川光圀は、江戸の自邸に彰考館を設けて天下の學者を招聘し、大日本史の編纂に着手し六十四年の長年月の費して、それを完成したのである。本書編纂の動機は、その序文にある如く、光圀が十八歳の時「史記」のの白夷傳を読み、伯夷・叔齊が二君に仕へざりし義氣と高節に感激し、

「載籍有らずんば、眞夏の文得て見る可らず、史筆に由らずんば、何を以つて後の人をして觀感する所有らしめんや」

と歎じたる事にあるとされて居るが、光圀が常に

「天子はわが主君である。將軍はわが宗家である。此の名分を誤つてはならぬ。」

と語つた事より推察すれば、當時の思想界が王霸の別を知らず、大義名分を辨へぬ徒の多かりしたため、

かゝる點を強調して勤王思想を普及徹底せしめんとする意識も、相當強かつたのであらうと思はれる。大日本史の先驅をなしたるものに、栗山潜鋒の「保建大記」がある。これは皇室の御衰微と武門の跋扈を述べ、王政復古の待望と其の方策を記したのであり、この思想を受けた大日本史の指導精神は、大義名分を明かにすることであつた。特に吉野朝時代の記述の如きは、神器の所在を以て帝位の所在となし神皇正統記に於ける親房卿の思想と其の歸を一にするものである。かくの如く大日本史の述作は、國體の眞義、皇室の尊嚴を示し、公武王霸の別を闡明したもので、これが國民に自覺を促し、勤王思想を刺戟したる功績は、甚だ大なるものがあつた。

大日本史と並んで勤王思想を鼓吹したるものに、頼山陽の「日本外史」がある。これは王權が武門に歸したることを慨き、その復古を強調したもので、詩人的な情熱と明快な筆致は讀者をして自ら勤王論者たらしめずには措かなかつた。殊に吉野朝時代に於ける楠氏の記述は、精彩を放つてゐる。正成の舉兵、千早の籠城、櫻井の垂訓、湊川の戦、正行と其の母を敘述せるあたりは、慷慨悲憤涙なくしては讀むことの出来ないものがある。

それは如何に志士の胸を打ち、如何に若人の心を高鳴らせたであらうか。されば、日本外史は國家的歡喜を以て迎へられ、勤王思想を天下の人心に打込む格好の教科書となり、人々はこれに依つて新時代の進む可き方向と其の魂と實踐力とを與へられた。

儒教の中より流れて來た大義名分の思想、日本學の研究より探究された國體觀念、國史の反省より呼び醒された勤王の精神、これ等は、共に國家的精神として古事記に通ずるものである。これ等は勤王論として單なる理論に止まらずして實際運動に移り、漸時擴大強化されて行つた。即ちその初めには、竹内武部が大義を説いて三宅島に流され、山縣大貳は江戸城焼打を叫んで死刑に處せられ、高山彥九郎は憤慨して腹を切り、其後には梅田雲濱が捕へられて牢死し、橋本左内、吉田松陰、賴三樹等は何づれも死刑に處せられる等、多くの尊き志士の血が流された。

かくて幕府をして一路倒壊への途を急がしめつゝある時、フランス、イギリス、ロシヤ、アメリカ等帝國主義的列強の魔手は日本の上に伸ばされ、これに對する日本は、三百年の鎖國に依る軍備・産業・技術、即ち國防的裝備の甚しき立遅れのために如何に當時の先覺者をして焦慮苦惱せしめたことであらう。しかも日本の永遠に若く、無限に新しい自己創造の意欲は、この時も驚く可き力と、聰明な理性とを發揮した。即ち有ゆる紛糾錯雜せる國內問題及び對外問題を、徳川幕府の打倒に依る王政復古といふ日本歴史にとつて最も必然的な課題の下に總括し、處理して見事に解決したのである。凡庸な民族であれば徒らに方途に迷ひ、自己分裂と破滅とに陥る他なきこの歴史的危機に直面して、自己の進む可き正道が奈邊にあるかを洞察し、果敢に本來の目標に邁進したる不屈の勇氣と狂ひなき眼識とは、實に、肇國以來の一大理想に指導された日本民族の精神力のみが、能く成し得るところであると云はざるを得な

かくて、朝廷におかせられては、幕府に委任して居られたところの「大政返上」及「將軍職辭退」を聽許せられ、王政復古を期し、而して幕府を廢すると共に、藤原氏以來の攝政關白の制度をも廢して、天皇を中心とし、天皇及國民の間に介在する總ての中間勢力を一掃された。換言すれば、皇道の本義に則り、天皇を中心とする所の統一的國家を建設せられたのである。この點に於て、明治維新の政治的解決は、かの大化の改新に類似するものであり、共に、神武天皇御創業の御精神を基礎とするものである。それは正しく王政復古であり、國體の自覺である。

日本精神の現代的意義

かくの如く、我が國の重大なる政治的決定を通觀し來れば、天皇と國民との間に介在する中間的勢力の跋扈が甚しくなつて來た時に於ては、常に大化の改新に於ける中大兄皇子、中臣鎌足、建武中興に於ける北畠、楠木、菊地氏等の忠臣、更に明治維新に於けるが如き勤王の志士が輩出して、中間的勢力を破碎してゐる。これ實に、天皇を元靈的存在として、臣民をそれより派生せる分靈的存在とする日本民族の存在意識、即ち國體精神の發動に他ならない。

而して、かゝる場合、前述の如き日本精神變動の形態は、各々時代的特色を帯びてゐるが、しかし、かゝる時代相を超越してその底流をなす歴史的精神とは、皇祖の神勅、建國の大詔に依つて表明せらるゝ「くにのなりたち」であり「くにがら」である。

然らば、現代勃興し來れる日本精神運動は如何なる現象形態をとり、又如何なる時代的特色を帯びてゐるものであらうか。皇道政治は、現代日本の文化的特色に對して如何なる點を強調し、又如何なる點に重點を置く可きであらうか。一言にして云へば、それは皇道の一體生命的世界觀による個人主義的世界觀及び階級主義的世界觀の克服である。これこそ、現在我々が直面する轉廻期なるものが、上述の大化、建武、明治の三維新に對して有する文化史的特色であらねばならぬ。

世界一大家族の創立

一體生命的世界觀

古事記に於ける天地開闢の語りことに依ると「天地の初發の時高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御產巢日神、次に神產巢日神」の三柱の神であるが、更に神代七代の終りに伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神が、最初に大八洲を生み給ひ、次いで山川・草木等一切の國土を生み給ひ、更に八百萬の神々を生み、最後に此等凡てのものを統治し給ふ至高至尊の神として「光華明彩しくして六合の内に照徹らせ」給ふた日の神、即ち 天照大神を生み給ふた。

我が日本民族の一體觀は、既にこの國生みの中に源泉が見出される。而してそれは肇國以來、我々の内に胚胎してゐたものであつて、我々日本人に固有且つ千古に一貫して不易な信念であり、世界觀である。

この國土生成の神話の中に認められるものは、神々と大八洲の國、神々と山川草木、神々と歴代の天皇、神々と人民とが血縁的一體であると云ふ觀念、血縁的起源、血縁的統一の觀念、即ち血縁主義で

ある。神々は國土と人民とを自己の延長として、自己の分身として、自己の中より生み出すのである。生み出されたるものは、成程自己が生んだものではあるが、而も最早自己そのものではない。それは一つの他者である。然しこの他者は自己と全く無縁な絶對的な他者ではなく、飽くまで自己の分身として自己の血を引いたものとして、謂はば相對的な他者に過ぎない。生れたものは、生んだものゝ分身として二つにして一つである。生むといふことは自己が分身することであり、一つのものが只「身二ツ」になることである。兩者はまさに骨肉を分けた間柄であつて、その間には只一筋の血液が流れてゐる。生むものは自己をそのまゝ生れたものゝ中に再現する。かくて元靈はいよいよ多元的な分靈として自己を世界に顯現して行く。而して高御產巢日と神產巢日の末廣がりの作用が無限に繰り返されて行くのである。是が日本民族の無窮膨脹の嚴乎たる事實である。

天皇はこの「むすび」の本體であらせられるところの天照大神の御本質を受け繼がれ、天照大神と御一體であらせられる御存在であつて、日本、否、世界を生成化育す可き力の體現にましますのである。故に、人類生活の一切の活動は、天皇に發露して天皇に還元するものである。天皇の御本質は、直ちに國體の本義と同一である。何故ならば中心即全體、全體即中心、天皇即國家、國家即天皇であつて、此の不二一體の關係こそは、宇宙萬有生成發展の原則であり、日本生成發展の原則であるからである。

要するに 天皇の御本質は、萬世に亘つて持續する唯一の生命體であつて、國家生活に於ける價值一切の根源であり、全世界を神意に依つて統治し給ふ可き力である。換言すれば、天皇は地上に顯現し給ふ神であらせられる。

故に我等日本人は、眞心を以て 天皇に歸一還元し得るものである。

我等日本人が 天皇に歸一することが、とりも直さず「忠」となるのであるが、忠は我々人間の生命が、宇宙絶對者の中心生命より派生せるものである、といふ哲學的自覺である。孝は我々の生命が、親の生命に遡り、親の生命は、祖先の生命に遡り、更に祖先の生命は、民族の生命に遡ると云ふ、生命學的事實に基く倫理的自覺である。而して我が國に於て、天照大神は宇宙絶對神であらせられると同時に民族祖神であらせられる、が故に忠と孝とは不可分一本となる。これが所謂忠孝一本であり、日本的哲學の根本原理である。

忠と孝とを基本道德とする我が國は、世界に類例なき「家族國家」を構成してゐるのである。而して「日の神」の現世に於ける御顯現たる「天津日嗣の 天皇が 大御親として皇道を實踐し給ひ、凡ての臣民を赤子として慈しみ、而して「むすび」の原理に依り、これを青人草として愛ぐみ給ひ生成發展せしめられるのである。

藤澤親雄氏は皇道原理の中に、

日本家族國家に於ける生活基本は「をしへ」である。「をし」は「をしどり」に現はるゝ如く、「愛」の意味であり「へ」は「すべ」に現はるゝが如く「統」の意味である。従つて「をしへ」或は「教」は「家庭愛の統制」に外ならない。而して、それは、母と嬰兒との基本的存在關係に於て最も天真爛漫に發露する。而して、この最も自然なる人間生活原理がそのまゝに我が國家原理となつたのである。

我が國に於ては、此の純眞なる家庭愛に發源する教へが、そのまゝ國家原理となつてゐる。發生的に論ずれば、我が國家は皇室といふ具體的な中核家が長き歴史的經過の裡に於て、極めて無理なく發展擴大強化せられたものである。國は家の擴大せるものであり、家（皇室）は國の縮圖である。これ、我が國家が内面的なる深き生命的情操關係を包藏する「家族國家」たる所以である。

と日本の家族國家たるの所以を記述してをられるが、實に、我が神國日本に於ては、最も自然な人間生活原理がそのまゝに、我が國家原理となつてゐるのである。かくて我が國家に於ては、くにとひととは一致融合し得るのである。

今上天皇の御即位の詔勅に

「皇祖皇宗國ヲ建テ民ニ臨ムヤ國ヲ以テ家トナシ民ヲ視ルコト子ノ如シ。列聖相承ケテ仁恕ノ化下ニ洽ク兆民相率キテ敬忠ノ俗上ニ率シ上下感孚シテ君民體ヲ一ニス。是レ我カ國體ノ精華ニシテ當

ニ天地ト並ヒ存スヘキ所ナリ」

と仰せられた。これ實に、我等國民にとつて絶對的指導原理であり、こゝにこそ、我が國家原理の淵源が最も顯著に發見されるのである。

淳仁天皇が、その御詔勅に於て

「六合ニ母臨シテ兆民ヲ愛育ス」

と仰せられた如く、我が國に於ける 天皇政治は、決して權力政治ではない。それは、親殊に母性の愛情を以て單に精神的であるのみならず、同時に又經濟的にも民を愛育し給ふことである。既に「國體の理念・實相」の稿に於て述べたる如く、天照大神が天孫を降臨せしめ給ふに當り、三種の神器と共に齋穗の神勅を下し給ふたことは、深き大御心の存することが拜察せられる（詳しくは齋穗の神勅参照）さて「治む」の原理を徹底せしむる爲には、「しらす」を行はなければならない。されば天壤無窮の

神勅に於て

「宜シタ爾 皇孫就イデ治セ、」

とあるのである。「シラス」は「シロシメス」とも云ひ、共に語源は「シル」即ちよく知るの意味である。神の子にとつて國土の統治は、同時に國土の認識でなければならない。統治されるものと、統治するものとは共に神に依つて生産形成され、神の分靈としての「ワケミタマ」に他ならず、故にそこには

統治と被統治との對立がなく、却つて相互に認識することに依つて、相互の同一性を反省し、共に神意を奉體すると云ふことが「シラス」の眞意である。

この原理は神の統治範圍が擴大され、そこへ包容されて來る異種族に對しても適用されるのである。即ち民族を同化し、統一し、之を主宰して全一的一體性にまで生成化育するには、その自性を知り、過去を知り、現在を知り、未來の動向を察し、一切を我が存在と同一の根源に於て認識せねばならぬ。他を知らざることは、他を永遠に異物として助長せしめる他に、何等の意味もないことである。實に「シラス」は知ることによつて愛し、愛することに依つて治めるといふ統治の最高形態であり、これによつてのみ「八紘を宇と爲す」と云ふ神國日本政治の理想は實現されるのである。「シラス」なくして國體の進展持續なく、世界に對するその普遍性、絶對性はあり得ないのである。かくて天照大神によつて啓示せられたる「シラス」の教智的原理は、其の御直系たる天皇によつて天壤無窮に繼承せられ、今日に及んでゐる。

眞に世界歴史は、日本民族を世界の文化指導者たらしめる爲に仕組まれたる宇宙的ドラマとも思はれる。神國日本は長い間、亞細亞の「孤島の裡に匿されて來た。しかし、之は將來、日本が世界を「しるしめす」大偉業完成を期するが爲の準備工作であつたとも云へるのではあるまいか。其の間、全世界の凡ゆる文化、文物、即ち支那の儒教、印度の佛教の如き内省的、靜觀的な東洋文化より向外的、活動的

なる西洋文明に至る迄、皆秩序整然として日本に提供された。而して、日本人は悠久三千年の久しきに亘り、厭かず倦まず、これを吸収し、咀嚼して立派に活用し得るに至つた。今や我等は、動靜一如の新人類文化の創造に向つて、出發せんとしてゐる。かく觀じ來る時、建國の大詔に掲げられたる「八紘一宇」即ち世界を一つの家族とすると云ふ、高邁無比の大和民族の大理想は、現代日本國民に依つて實現さる可き必然性があるとも云ひ得るであらう。

個人主義世界觀の自己清算

惟ふに、西歐人に依つて築かれたる近世文明は、形式に於ては種々の變遷を経たりと雖も、その基調をなすものは、一貫して個人主義的世界觀である。

個人主義は、中世神學の獨斷及び法王のドグマの壓制による息苦しさ堪へず、恰も十五、六世紀に於ける新世界發見の客觀狀勢に伴つて、開かれたる「我」の自覺に基くものである。神學より科學及び哲學へ獨斷的信仰より理性的批判への「自我」の發見である。

この「自我の發見は考へることの自由としての宗教改革、語ることの自由としての言論の自由、働くことの自由としての資本主義を要求し、遂に政治革命としては、議會政治の確立、法律的には、私有財

產の保護と契約の自由に迄發展して、現に見る如き華麗なる文明を築き上げたのである。

かゝる華麗なる近世文明も、今や終焉を告げんとし、これに代つて新しく輝かしき時代が黎明しつつある。即ち日本的世界を創造す可き神機が歩一步と出現しつつある。然らば、斯くも華麗なる文明が、如何にして崩壊せざるを得なくなつたであらうか。

超人間の宗教の束縛より開放された所謂「個人」は自己を絶對化し、宇宙、或ひは神、或ひは民族と云ふが如き、超個人的な存在の權威を勇敢に否認し去つた。自己を絶對的中心となしたる個人は、自由奔放な人間生活を發足せしめた。而してこの大膽不敵な個人主義イデオロギイが、歐洲人を驅つて世界各地に進出せしめ、その結果、白人制覇の世界を現出せしめたのである。しかし乍ら、他面に於て近世自由主義イデオロギイは、個人を中心とし、個人の知性及び經驗のみを以て人生の指針となす故、極めて頼りなき性質のものである。人間が抱擁的な權威の中心より開放せられたことは、同時に人間が孤立的寂寥の裡に投げ込まれた事である。而して各個人は自由になり得たとしても、凡ての個人を無理なく一つに結び付けて、大調和の道義生活を営ましむる絶對原理が喪失されて終つたのである。かくて淺ましき對立、分裂、抗争の末世の人類社會が醸成せられた。

抑々、近代人の精神生活を基礎づけたものは、獨逸に於けるルーテルの宗教改革と、スウェーデンのジュネーヴァに於けるカルヴァンの宗教改革である。カルヴァンの宗教改革の趣旨は、神と個人との間に介在す

るあらゆる中間的存在を打倒して、個人は直接自己の良心の叫びに於て、神の言を聴く可きであると主張した。而して、彼はジュネーヴに於て、一種の宗教的共和政治を行ひ、自己の理想を實現せんと欲した。従つて彼の攻撃の直接の對象は、當然羅馬カトリック主義であり、法王であつた。彼の神學的理論に依れば、人間は二つの範疇に分たれる。第一のものは、あらゆる享樂生活を排撃して、只管嚴肅に自己の人生を築き上げるものであり、かゝるものゝみが神の恩寵に浴し得るものである。第二は、これに反して、勞働を回避して享樂生活に耽溺するものであり、従つて彼等の靈魂は、救済せらる可くもない。彼のかゝる神學的理論こそ、獨逸の經濟學者マックス・ウェーバーが、近代資本主義の淵源はカルヴィニズムであると唱へたる如く、近代資本主義に重大なる影響を與へた。即ち勞苦して而も享樂生活を忌避する者は、當然財を蓄積する。かゝる財の自然的蓄積より、近世の銀行業が、生れて來たのである。

當時、ジュネーヴには、各國の新教主義者が集つて來たが、就中スコットランド系英國人が多數を占めてゐた。彼等は自己の宗教生活と實利的經濟主義とを一致せしむ可く努力し、而してカルヴィニズムを以て最も理想的キリスト教であると考へた。斯くしてカルヴァンの教義は英國に移植せられ、清教徒主義として新しく開花した。併しながら英國に於ても當時宗教改革が行はれ、羅馬法王の權力を否定せんとするエリザベス女王は、敢然立つて英國々教を樹立した。而して英國々王は、政治上の主權者であ

ると共に、また宗教上の最高權威者となつた。然し乍ら、この種の宗教改革は、カルヴィニズムに比較して不徹底なものであつた。されば清教徒等は、我々は王の介在を許さず、直接自己の良心に於て神の聲を聴かねばならぬと主張し、これに反抗したが爲に國教と清教主義との間に激烈なる闘争が惹起された。英國政府は容赦なく清教徒を弾壓した。故に彼等の一部は、故郷を棄て、ルーソーが説いた所謂「社會契約」を結び、自由の國家を建設せんと欲して新大陸アメリカに渡航し、典型的な近代民主主義國家を建設した。されば米國人は一般に國家の政治的干渉を、個人の自由と絶對的に兩立し得ないものと信じてゐる。故に米國の政治形態こそは、近代個人主義の具現化であつて、その基礎は、自由平等なる個人間に締結せられた社會契約である。

米國の獨立は佛蘭西大革命の一大契機となつた。而して一七八九年に勃發したる大革命は、專制主義舊體制を打倒して歐洲近代國家の生みの親となつた。近代自由主義國家は、二元的機構を有するものである。即ち革命以前に於ける專制全體國家は極端に縮少せられ、僅かに「政府」（狹義の國家）として残存するのに反し、新に人民が君主より闘ひ獲つた自由活動領域、即ち「社會」は舊來の國家領域を深く蠶食するに至つた。實に社會と國家との對立こそ、近代自由主義國家の特徴である。而して社會は自由を、國家は權力を、夫々象徵する。自由平等なる個人の集合である「人民」は、社會の領域に蟠居して所謂天賦の人權を思ふ存分に行使する。斯の如き人民の「自由權」を確立するものが憲法である。議會

は人民の爲の政治の中心機關であり、そこに於て制定せられたる法律の根據に立つてのみ、政府は社會に干渉を行ふことが出来る。かくて近代自由主義の議會は、當然政府と對立する。

社會の領域に於ける個人の自由活動は種々あるが、その中でも經濟的活動と文化的活動とが重要なものである。各個人は皆自由なるを以て、他人に氣兼ね、或ひは遠慮する必要はなく、思ふ存分に活躍して最大の利潤を獲得することが出来る。故に經濟的に強き者はどしどし成功し繁榮するが、經濟的に弱き者は誰一人構つてくれるものなく、社會の底へ底へと轉落してしまふのである。これが弱肉強食の社會生活であり、そこより現代の資本主義が現はれて來た。發生したる當時の資本主義は、唯だ個人的イニシアテীবに依り世界資源が開發せられ、國家發達の源泉ともなつたが、世界産業が輕工業より機械工業、重工業へと高度化し、その建設に巨大なる資本のみが能くその存在に堪へるに過ぎぬ状態となつた。これに伴ひ、人的能力は第二義に陥ち、最早自由競争は、社會の推進力たる重要さを失つた。各個人は何れも皆自由を求めてスタートしたのであるが、その結果に於ては、社會の一部分の者のみが自由を享有し、繁榮し、大部分の者は全く豫期に反して、不自由と貧困とに陥つてしまつた。故に於て、これ等大衆は不平不満の聲を高くし、當初の自由を求めて焦慮する。この虚に乘じて社會主義が、階級闘争と社會闘争の理論を打ち樹て、人心を收攬せんと圖つた。彼等は自由主義者の唱へた「個人の政治的自由」に代るに、「個人の經濟的平等」と云ふ標語を以てした。而して眞の個人の自由を確保するに

は、國家が資本・土地・機械・其の他凡ての生産手段を共有化し、然る後に於て、個人の經濟的平等を實現し得ると主張した。而して各種の社會主義の中、最も科學的であると謂はれたるものが、マルクス主義である。これ、即ち現代に於ける共產主義運動の母胎である。

こゝに注意すべきは、共產主義が自由主義を温床として發生したるものであり、従つてこの二者を貫くイデオロギーが、何れも個人主義であると云ふ事である。個人主義は人間を神、宇宙・民族・家族と本質的に結び付けてゐる生命的有機關係を、不自然に解消せしめる。従つて、現實に於ける民族的性格を強いて理念的に否定し、總て同質平等の抽象的個人に變質せしめる。されば、社會主義運動は必然的に所謂國際的運動となる。何れにせよ、近代自由主義國家の最も重要な領域たる「社會」に於て、いとも悲惨なる階級闘争が發生し、資本主義と共產主義とが血みどろの軋轢を惹起するに至つた。この國內に於ける階級的矛盾こそ、近代の病をなすものであり、茲に早くも近世文明崩壞の種子が蒔かれたのである。

社會の經濟的自由活動が、近代の資本主義を生み出したる如く、社會の文化的自由活動が、近代のジャーナリズムを生み出した。ジャーナリズムは、一面近代社會の文化、思想、生活を活潑ならしめ、且つ豊富ならしめたとは云へ、他面に於て思想的無政府狀態を招來せしめた。斯くして所謂「思想問題」なるものが識者の重大なる關心事となつた。しかるに近代自由主義國家に於ては、國家の機能が僅かに表

面的秩序の維持と、外敵に對する防衛とに制限せられてゐる。故に、如何に社會の内部に於て憂慮すべき經濟的並びに文化的危機が發生するも、これに對して積極的な働きかけをなすことが出来ない。こゝに於てか、近代自由主義國家、そのものゝ根本的缺陷が白日の下に曝され、これを救正するため、全體主義指導國家制度が創案せられた。

かゝる國內に於ける對立、分裂、抗爭の現象を、國際的に反映せしめたものが第一次世界大戰である。歐米人もこの悲惨極まる戰爭の體驗を通じて、近代文明の内在する致命的缺陷に目醒めて來た。しかし乍ら、第一次大戰の後始末をつけたヴェルサイユ平和體制は、自由主義的イデオロギーを自己の思想的地盤となすものである。國內に於て表面上、各人の自由を説く個人主義が、實際に於て大衆の隷屬的不自由を招來せしめる資本主義と化したる如く、國際關係に於ても表面上、各國の自由平等を説くインターナショナルイズムは、實際に於て、僅少の強國が多數を搾取する帝國主義に代つてしまつた。國內に於ける階級的矛盾と、世界に於ける壓迫民族對被壓迫民族の對立矛盾こそは、近代政治組織の致命的弱點である。かくてブルジョア對プロレタリアの階級闘争及び「持つ國」と「持たざる國」との國際的水平運動こそは、近世の没落を決定的ならしめた。而して來る可きものは遂に來り、第二次歐洲大戰の必然的爆發となつた。かくて近世は既に終り、近世の據つて立つ個人主義的世界觀は、自己清算の餘儀なきに至つた。

皇道の世界光被

而して、世界史發展の運命的必然性は、皇國日本をして、個人主義の齎らした對立、分裂、相剋を超越して調和、統合、歸一の世界を、實現し得べき全個一體の產靈を指導原理とする「すめら時代」創始の原動力たらしめてゐる。如何なる人爲の策謀も、巧智も、天運を、阻止することは出来ない。近世文明の立役者英・米が「すめら文化」の指導者皇國日本の前に、拜跪せざるを得ない時代が到來した。歐洲に於ても、近代文明の危機を超越すべく必死の努力を展開したる獨伊は、全體主義國家を建設することに成功した。全體主義國家は「政府」と「社會」とを對立せしむる自由主義國家の二元性を克服して一つの正しき世界觀が、凡ての國家生活の分野に徹底す可き一元國家である。かくの如く全體主義は、個人を中心とする自由主義並びにこれを溫床として發生したる社會主義及び共產主義とは、別個の世界觀に立つ。それに個人ではなく、國家若しくは民族を中心とするものである。従つてその本質に於て世界史的變革の動向に隨順するものである。

しかし、獨・伊の全體主義は、個人と階級との誤れる理念が克服せられ、凡てのものが、國家若しくは民族に結ばれてゐるが、それより更に一步進めて凡ての民族を、一つの宇宙大生命に結ぶ根本的生

命原理が把握せられてゐない。故に彼等に假令個人的、又は階級的利己主義は排撃し得ても國家的、又は民族的利己主義の域に止まる可能性がある。茲に於てか、我が皇國の大自然生命原理のみが「すめら時代」の唯一絶對の指導原理とならなければならない。この指導原理の徹底的滲透に依つてのみ、階級鬭争と、帝國主義的侵略として顯現してゐる近代主義の二重の内面的矛盾が、始めて力強く克服せられ國內に於ては各個人が、世界に於ては各民族が、何れもその所を得、百姓昭明、萬邦協和の道義的新秩序が實現せられるのである。

支那人は世界の諸民族を「四海同胞」と呼び、我が日本民族は彼等を「よものうみなはらから」と稱してゐる。「はらから」とは、同じ母の腹の中から生れ出でたる多くの兄弟姉妹と云ふ意味である。歐洲語に於て、民族をネーション、即ち「産れたるもの」と云つてゐるのも同じことである。然るに、歐洲の國家は民族の移動、キリスト教の普及、祖先崇拜思想の衰滅、歴史的生命的斷絶、抽象的な科學體系の樹立、革命の勃發等に依つて、ネーション本來の意味を把握し得なくなつてしまつた。従つて、我々が歐米の文獻に頼る限り、民族の宇宙生命的本質は、毫も闡明せられない。かゝる點に於て、我が神曲古事記の「國生み」は、其の生命と本質とを明瞭に説明してゐる。

この高邁なる宇宙觀に従へば、すべての國家又は民族は、自由主義者の想定するが如き獨立自由なる所謂「個體」でなく、一つの宇宙根源生命に歸一還元せらる可き多くの有機的な「部分」である。換言

すれば、彼等は世界家族生命體の裡に於て、差別即平等に自から與へられてゐる「分」なのである。「分」と云ふ語は、ある全體的なものよりわかれて來たものであることを暗示してゐる。即ち本來の一つの大生命が、多くの民族の中に多様に「分在」してゐるのである。

斯く觀する時、彼等が平面的に對立、交渉、妥協、結合する並列的國際關係の外に、更に彼等の民族的生命が歸一すべき、一つの宇宙的な大生命淵源國家に對する立體的な上下的國際關係が、存在しなければならぬ。

國學者大國隆正は

「造化神靈の天地を鑄造し給へる時、我が大日本帝國を地球の本として、萬代不易の國王を下し、我が天皇を人の本として萬邦の人悉く之に歸順すべく定め置き給へるものなり」

と云ひ、佐藤信淵は

「皇國は萬國の根本にして全地球を使令すべき宗國」

と喝破してゐるが、實に神國日本こそは「萬國の祖國」であり、また萬物を生み出したる宇宙根元生命の本據である。而して、かしこくも 天皇は宇宙始初の時より今日迄、此の創造的大宇宙生命を直接に體現し給ひ、それに發源する多くの分派生命を荷ふ世界諸民族をして、何れも皆其の處を得しめんとし、皇道外交を行ひ給ふのである。これが「天業恢弘」であり、また「八紘一字の道義的使命」である

されば日本は、個々の獨立の國家が功利打算の取引外交に依り、暫定的に國際關係を結んでゐる現在の不安極まる世界を、かゝる「親なし子的」な諸民族が、再び親に當る惟神民族の懷に立戻つて、調和と信頼と統一の國際生活を營み得る生命歸一的國際關係を確立す可き世界に變へて行かねばならない。而して今次の大東亞の聖戰は、實に斯の如き世界家族新體制創造への、不可避的な段階である。

嘗て、滿洲國々民は、張學良政權下に在つて、如何に苛斂請求されて來たか。これが一度、日本の「八紘一字の道義的使命」に基く援助を得れば、僅か建國十年にして、五族協和の實を擧げ王道樂土と化して、我が日本を親邦と呼び、東亞新秩序建設に我等と一心同體となつて邁進してゐる。

回鑾訓民詔書に於て

「朕日本天皇陛下と精神一體の如し、爾衆庶等更に當に仰いで此の意を體し支那と一德一心以て兩國永久の基礎を奠定し東方道德の眞義を發揚すべし」と仰せられ、又帝位繼承法の前文に於て

「大寶儼然中を建て易らざる實に日本天皇陛下下の保佑に是頼る」

と仰せられてゐるのは、皇帝が 天皇の御稜威に依つて滿洲國を政治せられてゐると云ふ御心境の自然的發露ではなからうか。

かゝる滿洲國の實情を再認識することに依り、我々は一大世界家族の創立に益々確信をもち、斷乎、

邁進しなければならない。

長くも 明治天皇は

「斯ノ道ハ之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」

と仰せられたが、全くその通りであつて、道即ち我が國體こそ、普遍的眞理の顯現體である。而して、其の原理に立脚する新しき政治學、國家學、法學のみが嚴呼たる眞理性を主張し得るのである。

大國隆正は「新眞公法論」の内で、グロチユウスの創始せる歐洲萬國公法を徹底に批判し、

「眞天子と云ふものは我日本の天皇より外に地球上に在ることなし。近き頃興れる西歐の公法學も亦眞の公法にあらず。然れども公法學の西歐に起れるは我が大日本より起す眞の公法學遂には萬國に及ぶべき先ばしりと思ふことなり。」

と喝破してゐるが、我等はその思想の高邁なるに驚嘆せざるを得ない。

惟神民族の自覺

世界指導の必然性

皇紀二千六百年は、神國日本にとつて劃期的の一大轉換を遂げた。即ち待望久しかりし昭和の大革新は見事に斷行され、我等日本民族が神意に依つて與えられた世界指導の第一段階として、日本は東亞共榮圈の確立をなす上に一步を進めたのである。東亞を指導することは、やがて全亞細亞の指導を約束するものである。而して全亞細亞を指導し得る者は、やがて全世界の指導を約束せられるものである。

かくて國內到る處の若き血に燃ゆる青年の中に、或は革新的思想を抱く指導階級の中に、「世界を指導するものは我等日本民族である」と云ふ聲が、津々浦々にこだまして來た。而して大東亞戰爭の御詔勅下るや、國民は曾て見ざる緊張と勇氣とを倍加したのである。殊に十二月八日のハワイ眞珠灣に於ける米太平洋艦隊の撃滅の報、馬來沖海戰に於ける英國の東洋に於ける主力艦隊の撃滅は、眠れる日本民族の魂を蘇らせ、同胞悉くが皇國享生の歡喜に満たされたのである。それと同時に、愈々我等の世界指導の大使命も必ずや、成し得ると云ふ自信を深く胸に抱き、強く腹に納め得たのである。

我等日本民族の有つ大理想は、皇道を世界に宣布し、世界の民族をして各々皇道の惠澤に浴せしめ、その處を得さしむるにあるのである。日本の神話は、日本が宇宙の根本生命より自ら生成發展し來つた事を説いてゐる。従つて 天皇と國土と國民は、同一の生命根基より生成したる一大家族であつて、神皇不二、君民一體、身土同胞等の世界觀は、此處にその基礎を有し、日本が家族國家と云はれる所以も亦此處に存するのである。

家族的精神——同胞觀念は日本神話を貫く根本精神であつて、その構成が悉く血族關係に依つて統一されてゐる點からも立證せられる。この家族精神を最も明瞭に表示せばされたものは、神武天皇橿原奠都の大詔である。即ち八紘（世界）を以て宇（家）となすとは、一面に於て日本民族の世界的發展を基礎づけ、民族の氣魄と包擁力とを示すものであり、又皇道を世界に宣布し、世界の國家國民をして、我と同一世界觀に立たしめんとすることであつて、世界征服を意味するものではない。我等の祖先はこの精神を世々繼承し、その發揮に努めて來たのである。

而して舊を失ふことなくして新を抱擁し得る潑刺たる歸一の精神は、滔々として流入する異邦文化を悉く抱擁し、之を國民的生命の内容として攝取し、而して新しき全體となし、この新しき全體に於て、冒て存せざりし新しき生命と、新しき意義とを得來り、茲に東洋文化なるものを創造して西洋文化に相對するに至つた。

偉大なる西洋文化に接したる我等は、驚きの目を以てこれを迎へ、その美に眩惑され、思想の動搖その他種々の弊害を生じたと云へども、明治初年以來僅か八十年にして、我が國の文化は世界水準に達するに至つた。しかし乍らこれ等の文化は、活きた國民精神に攝取せられて、新しき全體となり、この新しい全體に於て、曾て存せざりし新しき生命と、新しき意義とを得る迄に至つてゐない。茲に我等國民の使命がある。

曾て、印度及び支那文化の渡來に際し、舊を失ふ事なく、我等はこれ等亞細亞に於ける一切の文化を攝取し、東洋文化なるものを創造したのである。然るに今亦、幸なるかな、異邦文化に接し得たる我等は、異邦文化の單なる模倣者たることなく、この西洋文化の一切を國民的生命の内容として攝取し、東洋文化を創造せる如く世界文化をも創造しなくてはならぬ。既に創造し得たる東洋文化をもつて全亞細亞を指導せんとしてゐる日本は、世界文化を創造することに依つて、世界も亦指導し得るのである。この世界指導こそ、我等日本民族に課せられたる歴史的大使命である。

斯くの如く我が國が、異邦文明に接觸する度に之を攝取し、我がものとして新たなる文明を創造し得たる所以は、實に日本精神に依つて正しき方向を與へたるが故である。

日本精神が、かく入り來る總ての文化に方向を與へることの出来るのは、取りも直さず正しき理想を抱くが故である。即ち我等の祖先がこの國を肇むるに當り、全心全靈を擧げて確立せる理想は、

「あまつひつぎのみさかえ、あめつちとともにかぎりなけむ」

ことであつた。實に日本建國の理想は、この一句に盡されてゐる。

天つ日嗣ぎの天壤と共に窮りなきことは、直ちに日本民族の永遠の發展を立證するものである。かゝる悠久にして森嚴なる建國の理想こそ、異邦文化の渡來に際し、我等をして精神的屬國たらしめず済んだのである。而して一度その根を我が國土に下ろせる所有文化は、決して凋落しない美はしき花を咲かせることが出来たのである。

最近東洋文化は教であり、西洋文化は學であるとされてゐる。儘に東洋文化、特に支那文化は教であつた。今日の如き科學の進歩せる時代にあつては、西洋文化に押され勝なのも、教と學の相違から起つて來た現象であつて、止むを得ない事であらう。

然るに、この西洋文化も明治維新以後、滔々として我が國に流入して東西の凡ゆる文化が我が國に集つたのである。世界の何れの國と云へども、我が國の如く東西の凡ゆる文化を吸收し得たる國はない。されば、前述の如く悠久にして森嚴なる建國の理想を有する日本民族が、世界の凡ゆる文化に接したる時、曾て東洋文化を創造し得たる如く、これ等の異邦文化を吾ものとして、新たなる世界文化を創造し得るは當然の事であり、而もその創造し得たる文化こそは、世界に於ける絶對最高至上の文化であらねばならぬ。

かくの如く日本文化を創造しつゝある根本の力、即ち日本文化の根源力は「神から來た力」であると謂へる。この「神から來てゐる力」に神の眞理を認めることが出来る。眞理なるが故に、それは絶對無礙であつて、親しみ近づき來るものゝ總てを受容して、毫末も害されざる金剛不壞性を有し、而して他を同化し渾一生命の中に作用せしめる力を發揮するのである。さればこれを完成して將來の世界歴史に貢獻するは必然の事である。

平田篤胤は、

「眞の道は教訓と云ふ事を記したる書物ではなく事實である。そして教は事實より甚だ下い物で、事實があれば教はいらぬ。道の事實がないから教が必要である」

と言つてゐる。即ち事實の上に眞の道が具はつてゐる事を明かにし、而して眞の道は、古の事實を記したる古事記、日本書紀であると云つてゐる。

亦、本居宣長は、

「天地一枚なれば、皇國も漢國も天竺も皆同一天地の内にして、皇國の天地、漢國の天地、天竺の天地と別々にあるものではない。されば其の天地の始まりは、萬國の天地の始まりである。然らば古事記、日本書紀に記されたる天地の始まりのさまは、萬國の天地の始まりのさまである。さればその時にいで給へる天之御中主神以下の神たちは萬國の神たち、日神は萬國を照し給ふ日神に外な

らぬ。然るに若し此の神たちを、たゞ日本のみの神とする時は、天地の始まりも又、日本のみの天地の始まり、日神も日本のみの日神にして、異國の天地日月は別のものとなつて来る。されど天地日月が國によつて異なるが如きことは有り得べき道理でない」

と言つて常に日本の天地の始りのさまは、世界の天地の始りのさまとして教えてゐた。

これ等の人々の語は實に我等の味ふ可き事であつて、我等の人生觀乃至世界觀は眞に茲に始まる可きである。

然るに萬世一系の理想をのみ餘りにも屢々口頭に上らせる爲に、今の世の人々は却つてその中に含まゝ深奥なる意義と事實を反省せざる傾があるのみならず、宣長の有つこの世界觀を、今日の學者及び精神運動者は聊も發展させてない。これ實に我等の遺憾とするところである。この世界觀の發展あつてこそ、始めて我等の言ふ世界指導の歴史的必然性が判明し來るのである。

我等は知ると知らざるとに拘らず、日本が世界を指導す可き準備は、着々として進められてゐる。これ實に神意に依るとでも云ふ可きであらう。即ち東洋文化を創造したる日本は、この文化に依つて全亞細亞を當に指導せんとし、而して世界文化の創造に依つて眞に世界を指導する日も眼前に迫つてゐる。

曾て、ギリシヤ文化の華かなりし頃、ギリシヤは四隣の國々を支配し、ローマ文化の盛なりし頃はローマは全歐洲を支配し、殊に西洋文化に至つては、東洋その他の國々をも支配した。支那、印度文化

に於ても然りである。斯くの如く高度の文化を保有する國民は、低度の文化國民を指導し、而して世界歴史の上に貢獻して來た。故に我等に依る世界文化の創造は、我等日本民族の世界指導を意味するものである。

蠶は始め極く小さい一つの卵に過ぎないが、幾度かの苦しい脱皮作業を経て、始めて繭となるのである。蠶が正に繭を造らんとする前には、出來得る限りの食物を攝取する。而してこの攝取せる食物の多寡は、忽ち繭に於て表れるのである。勿論多量に攝取せるものは良且つ大であることは言を俟たない。

我等は今世界最大にして最上の繭を造らんとしてゐるのである。故に蠶が最後の仕上をする爲に、出來得る限り多くの食物を攝取する如く、我等も亦、出來得る限り多くの食物を攝取せねばならぬ。幸にして、我等は全世界の凡ゆる文化を攝取し盡してゐる。故に世界最高の文化を創造す可き機會と立場とを與へられてゐる。

しかし乍ら、これは易々たる事ではない。この目的の爲には、我等國民の總てが、我等日本民族こそ世界を指導するものなりと云ふ自覺のもとに、一億一丸となり、各自は其の立場、職場に於て全能力を擧げてこれに邁進せねばならぬ。

斯くの如く國民の自覺及び國民の一致團結を必要とするは、勿論の事であるが、先づ凡ゆる文化の根幹をなす教育の根本的革新を必要とするのである。

國體の普遍性

我等日本民族が世界指導の實踐に當つて、その主流をなすものが、世界最高の文化であることは前述の通りであるが、その文化創造の魁をなすものは、教育の根本改造であり、而して教育の根本改造に當つて最も必要なものは、國體明徴の徹底でなければならぬ。

現時に於ける世界大戰は、神意に依る世界人類社會立直しのための戦争である。國體明徴は單なる國內に於ける國體明徴のみではない。我等の國體明徴は世界的な意味に於けるところの國體明徴である。今や、日本が世界人類、世界各國の眞の指導者として立つ時、我が國に於ける國體が眞に明徴されて、始めて世界の各國に、各々その向ふ可き方途を判然させるに役立つものである。

かゝる意味に於ける國體明徴が、國民に徹底し來れば、敢て總親和等と言ふ言葉を用ひなくても、自然に總親和になつて來るし、從來革新を要すると言はれた政治部面も、自然に是正されて來るのである。從來、日本に於ける革新論者は、國體明徴と盛んに叫んでゐながら、日本と云ふものを單なる近代國家の一つであり、米英ソ聯等と對立關係の地位に立つ國と見てゐるものが多かつた。故に、日本の革新を論ずるにも、専ら西洋論理に基いて政治組織がどうの、經濟機構がどうのと論ずる結果を生じたの

である。

抑々現代日本に於ける指導者、識者階級等が、極く最近まで歐米崇拜に凝り固り、日本そのものを野蠻國扱いにして來た事實は誠に寒心に耐えない。それは明治初年以來、外國の文物を輸入するにいとまなかつた我が國が、外國の而も自由主義の機構に適應する如く作られた教育機構をその儘直輸入し、何等の取捨選擇もなく、その陶冶もなくして、その儘を我等國民に與へた。而して我等は、爾後八十年間自由主義の教育と、學問を強要され、而も之を學ばざるものは、立身出世の道を絶たれたと言ふ、その結果に外ならないのである。

日本とは日の國、本の國であつて、この天地の續く限り繁榮すべき國である。換言すれば、世界の親國である。されば、今次の世界動亂は神意に依つて、日本が世界の親國、即ち世界の總本家であることをはつきりさせる爲の大動亂と言つてこそ、眞の國體論者であると云ひ得るであらう。

抑々、我が國は天孫降臨より 神武天皇に至る迄、永年専ら西偏にあつて、蒙くして以て正を養ひ給ふた、神武天皇御東征により、初めて大和の地に都を定め國を建て給ふたのであるが、全世界との關係に於ては、それより亦二千六百年間、謂ゆる世は鴻荒に屬し、時には草昧に繋るを以て徐ろに正を養ふと云ふ、いはゆる和光同塵の時代であつた。而して其の間世界の文物を採り入れ、幾分その餘弊を蒙つた事實もあるが、我等日本民族もその間、徐ろに鍛鍊されて來て今日の如き文化の進運を遂げたので

ある。而して今日に至りいよく機熟し、時來つたのである。即ち今次の戦争こそは、八紘一字の爲の天の岩屋戸開きの前提であらねばならぬ。今次の戦争と從來の戦争と同じに見、同じ方法で收拾されるものと云ふ見方は、實に無意味なことである。第一次歐洲大動亂に於て、英米のデモクラシー主義の連中は「戦争を終結させる爲の戦争だ」と言つた。更に又、今度の戦争を、その張本人ルーズベルト及びチャーチルは、「地上の戦争を終結する爲の戦争であり、これに他民族の軍備の負擔を除去してやり、自分達に依つて軍備を獨占して世界を治めるのだ」と言つてゐる。これはユダヤ的勢力が、長くも日本天皇の地上御經綸の天業皇謨を篡奪し奉るものである。

故に日本の國體を明徴にすると云ふことは、取りも直さず世界新秩序の建設と言ふ事と、同一の意味を持つものである。今日の維新は明治維新の如く、單なる日本國內のみの問題ではない。明治維新は國內に於ける幕府的存在を打倒して、王政復古の實を擧げるのが目的であつたが、今日の世界維新は世界の幕府を打倒し、晋く日本天皇の御地位と、皇道を世界に宣布すると言ふのが根本でなければならぬ。

然らば世界的幕府の存在とは何を指すか。それは差當り米・英であり、これ等を操つてゐるユダヤである。されど、明治維新の際、各藩の中に於ても勤皇・佐幕の二派に分れて相剋があつた如く、現在の各國内に於ても、世界の幕府を打倒する一派と、これを扶ける一派とがある。従つて日本國內に於ても最初は多少かくの如き觀があつたが、それは未だ、日本國民の中に大義名分が理解出來ず、我が國體の

如何なるものなるかを眞に把握し得ない者があるからである。現在に於ては、眞實腹の底から米英的な考へ及び思想は、清算しなければならぬと盛んに唱へてゐつゝも、國內に於て幕府的存在たる米英を援ける結果になるが如き行動を、知らず／＼の間にとつてゐるものもあるやうに見られる。かゝる人々を眞に覺醒させるには、何より先づ日本國內に於ける教育と政治とを、立派な神の國の教育、神の國の政治として、非難に價ひせざるものとせねばならぬ。名實共に、世界の親國であり、根の國であると云ふ事態を創造しなければならぬ。

世界の幕府的存在を以て自認せる米英が、世界各國の軍備の負擔を軽減して、彼等が世界の軍備を獨占すると言ふ理想が、今次大動亂の源泉であつた。然らば我が日本は何んの爲の戦争をしてゐるかと言ふに、世界の幕府的存在たる米英を、徹底的に打ちのめすと言ふ外觀的のものゝみならず、世界の總本家たる神國日本、その家長に當らせられる、天皇、即ち大御親の御愛撫の戰を戦つてゐるのである。神武天皇御東征は、「まつろはぬものをまつろはす」爲の戦ひであらせられた。故に、まつろはぬ者は直ちに武力を以て臨ませ給ひて、神意に依る戦ひに於て、常に正しき者の揮ふ劔の強き事を御示し下さると共に、まつろへる者には、その朝より、愛撫の大御心を以て臨ませ給ひ、大和の精神を御示し下さつた。

我等は世界の幕府的存在たる米英が、世界の軍備を引き受けると豪語して我が皇道の眞の意義を解せ

す、勝手氣儘な振舞をする間は、絶對優越なる軍備が必要である。それも、ただ單に量的に軍隊が存在
スル言ふ事のみでは足りない。總ての國民が精神的に、物質的に、これに對抗するだけの力を十分に
備へなくてはならぬ。

天皇の近衛兵

茲に於て、我等日本臣民の悉くが、天皇の近衛兵であると云ふ信念を保有す可きである。先づそこ
に日本民族の自覺が始まらなければならぬ。戦ひの強さに於て、他民族とは格段の差異あることは、事
新しく言ふ迄もなく、眞に神の業である。問題は我等日本國民の總てが、國體の本當の姿に歸るか否か
と言ふことになる。ある海軍の首腦者が、今度の戦争は天祐ではなく、神が戦争をして御座ると申した
さうだが、今、前線將兵の悉くが、神として戦つてゐるのだと思ふ。されば、前線の將兵のみならず、
銃後もかくあらねばならぬ。而して我も亦、神人合一の心境に達して、御奉公の誠を致さねばならぬ
かくすることに依つて、日本の國は神の國として、決して他より攻撃されることはない。今度の戦争は
長期戦だと言はれてゐるが、限られた年限の長期ではない。まつろはぬ國や、まつろはぬ者どもが、絶
對にまつろふ迄徹底してやらねばならぬ戦ひである。これを單に唯物的に考へると、戦争してゐる國は

何れの國も、遂に疲弊困憊するであらうと云ひ得るかも知れぬ。が而し、日本國民の總てが眞に神の道に歸ることが出來得れば、今後何十年何百年戰爭が續くとも、その力は却つて倍加するのみである。而して神意に依る戦ひを戦つてゐる世界の根の國、本の國、日本は神意に従つて親の國として永遠に發展するであらう

神武天皇は御東征の際、途中に於て御艱難をなめさせ給ひ、而も戦ひは不利であらせられた。茲に於て天皇は一度矛を御收めになられ、天神地祇を祀り賊徒の調伏を祈り給ひて、後双に血ぬらすして必ずや賊徒は平定されんと仰せられたのである。その結果は、戦はずして賊徒を御平定遊ばされたと云ふことである。これは洵に今日の日本民族にとつて偉大なる教訓である。

日本及び日本人が眞に國體の本義に徹すれば、米英も必ずや「どふぞよろしく頼みます」と降伏して來ることは疑ひなきことであらう。聖戰の目的も、本質も茲に存するのである。

たとへ今度の戰爭が何十年、或は何百年續かうとも、我等國民は絶對にへたばるが如き事あつてはならぬ。而して神國日本は、神州本然の姿に歸り、充實した力と、冷靜なる頭腦とを以て、この戰爭の結末をつけなければならぬ。我等がこの戰爭に特別の意義を認めてゐる點から云へば、只、戰爭に勝つて敵を降伏させると云ふ事のみでは、戰爭に勝ち抜いたとは言ひ得ないのである。

即ち米英を武力に於て降伏させる時が來ても、彼等は舊觀念より離脱することが出來ず、従つて過去

に於て幾度か、世界動亂の因をなした個人主義宇宙觀の上に樹てられた前世紀文明に執着を感じるであらう。茲に於て我等は、彼等をして我と同一世界觀に立たしめねばならぬ。かくする事に依つて、始めて今次戰爭の目的が達せられるのである。即ち世界に於ける個々の國家が、功利打算の取引外交に依り暫定的に國際關係を結んでゐる現在の不安定極まる世界、即ち「親なし子的」な諸民族が、再び親に當る惟神民族の懷に立ち戻つて、調和と、信頼と、統一の國際生活を營み得る生命歸一的國際關係を確立し得るのである。故に我等は、先づ我等が一體生命的世界觀に徹する事である。換言すれば、我等國民が國體の本義に徹することである。

かゝる意味から言つても、國體の明徴と云ふことが今日最も必要な事である。統後の務は全く國體明徴の一語に盡きる。これは戰爭完遂の凡ゆる必要を満たすことになり、國民の生活態度を一變させる事を意味するものである。

萬國の祖國

茲に於て、我等は先づその日常生活を一變し、而してその生活態度を整へ、物に對する考へ方は正から大行進を始めなければならない。國體の明徴と云ふことは、神の本質を眞に把握することに依つて

始めて徹底するのである。天皇は現神であらせられると云ふ、この事實に徹することに依つて、始めて神國日本の國體が理解出来る。

佐藤信淵は、

「皇國は萬國の根本にして全地球を使令すべき宗國」

と喝破してゐるが、實に日本こそ、「萬國の祖國であり、また萬物を生み出したる宇宙根元生命の本據である。而して畏くも 天皇は宇宙始初の時より今日迄、この創造的大宇宙生命を直接に體現し給ふのである。ただ單に二千六百年の歴史のみ見て、國體明徴と云ふのでは駄目である。

徳川幕府を崩潰させるにはそれでよかつたかも知れぬが、世界の幕府的存在を潰滅して世界人類を救ふには、かかる事では駄目である。故に我等は、天孫降臨の際に於ける御神勅の奥に含まれた深淵なる大理想をしつかりと把握してかゝらねばならぬ。

かゝる意味に於て日本の政治も、政治家の根性から立直してかゝらなければならない。日本の教育も教育家の頭の中から叩き直さなくてはならない。政治家並に教育家が只、目前の政治、經濟及び教育に専念するやうでは所詮駄目である。

従來、日本の政治家には、政治と云ふことを米國及び英國の政治と同一に見てゐる輩が多い。茲に實業會議確立と云ふ現代政治用語が生れざるを得なかつたのである。天皇政治が外國の政治と同一なら

ば、それは外國の政治をやると云ふことになる。大政とはかゝるものではない。大政とは地上經綸の天業宏謨であり、それを翼賛し奉ると云ふことは、日本臣民に生れ乍らにして課せられたる最大の務である。

斯の如く、天皇政治は人類救済の崇高なる使命であつて、外國流の政治と異なる所あるは云ふ迄もなき事であつて、これを外國人に徹底させる必要がある。即ち彼等は長い間國家主義、民族自決主義を以て一大信條として培はれて來りたるを以て、單なる天皇政治の不二を説いても認識出來ず、かへつて益々不安に思ふであらう。故に我等は、飽くまで八紘一字の眞實の姿を示さなければならぬと同時に、その依つて來つた崇高な意義を説き聞かせなければならぬ。

八紘一字の眞實の姿を示すには、先づ日本國內に於ける政治・經濟・教育その他凡ゆる施設を通して天皇政治とは、かゝる立派なものであると云ふ、模範を示さなければならぬ。かくする事に依つて蟻の甘きに集るが如く、期せずして彼等は日本を慕ひ集り來るであらう。

しかし乍ら、我が國體を一朝にして諒解させることは、中々難しき事である。力及び其他の關係からして今日までの日本は、外國に向つて我が國體の本義を徹底せしめる事が出来なかつた。故に從來日本の元老とか、重臣とか云つた方面の人々が、何彼につけて親米英派等と目された例も多々ある。かゝる人々は、日本と云ふ國の力を外形的に、數學的に判斷して、米英と對比することに依つて弱腰となつた

のである。思ふに、これ等の人々と云へども、日本と云ふ國、天皇政治と云ふものに對しては、認識してゐたのであらう。しかし、これ等の人々は國體の淵源に遡つて深く極め得ず、その本義に徹すること能はずして、眞の日本の使命を没却してゐたのではなからうか。かくの如き政治家が輩出するに於ては世界の指導はおろか、東亞の指導さへ覺束なくなつて来る。

抑々、我等日本民族は 天皇が「國生み」の神事に依り、地上萬物を生み出された、伊邪那岐・伊邪那美の二柱の神の宇宙生命を、かみながらに繼承せられた現人神であらせられ、従つて 天皇の御政治は、道その儘の創造化育、即ち「むすび」と少しも變らぬものであると、言ふ確乎不動の信念をもつてゐる。されば皇國は世界の他の諸國家とは、全然格式を異にするものであり、萬物の生命を統合する國家である。即ち我が國は、神ながらの「元靈國」であり、他國は宇宙生命から分派した「分靈國」たる構造をもつに過ぎない。この國體の全人類の普遍性を、はつきりと把握せずしては東亞新秩序の建設は行はれない。

今度の戦争の結果、大東亞の盟主となり、獨伊が歐洲を擔當する。而して米國が南北アメリカを支配すると、云ふ事が通説になつてゐるやうであるが、米國にその資格はないであらう。たとへ米國が崩潰しても、地域の關係からして此の地に何か中心となるものが、出来て來なければならぬ。それは皇道を眞に認識し、日本 天皇に歸一し奉る大人物が現はれない限り、世界人類の落伍者の寄集りである。

大動物園化するであらう。中心のない社會は存立し得ない。如何に考へても、世界は一に歸せねばならぬ。

現在、獨逸は盟邦として、日本と共に世界新秩序建設に邁進してゐるが、何時かは、日本と覇を爭ふ時が来るだらう等と心配してゐる者もあるが、日本は獨逸及び伊太利と無駄の戰爭をする必要はない。彼等は我が皇道に深く心酔し、如何にして日本の如き國體を創造しやうかと努力して來たが、矢張り世界は一に歸すことを知つて現在の日本を中心に彼等は彼等としてその處を得ることに懸命の努力を續けてゐる。幸にして、彼等國民全部が人類の中心は日本 天皇におはしますと云ふことを理解すればよいのである。獨逸の持つ世界觀は既にその方向に突進しつつある。即ち、ヒットラーは盛んに神と言つてゐるが、天に二日なく、宇宙に絶對神が二つ以上もある筈がない。それは、日本 天皇のみが、地上唯一の絶對の神であらせられると云ふことを結果に於ては意味してゐるのである。

歴史に於ける出來事は、凡て神意のしからしむる所である。神國日本を中心としな遠近の諸國が、日本を理解せず、飽くまで抗爭を續けるは結局、彼等自身の滅亡を意味するものである。ただ神國日本は神意に従つて萬事を處理して行くのみである。而して我等の最も大切な事は、惟神民族たるの自覺である。

人は馬鹿だ馬鹿だと云はれ、ば自ら馬鹿になる。故に我等は、日本こそは萬國の祖國であると云ふ確

信を以て、これに應へる可く國民は相互に勵まし、肇國の大理想顯現に向つて邁進せねばならぬ。

議會即天岩屋戸の神集

最後に一言したき事は、我が國に於ける多くの政治家が、議會制度を觀するに、西洋に於ける民主主義國家觀念を以てし、且かゝる概念のもとに運營されたが如き感ある事である。従つて自我を通すことに専念し、個人の意志、個人の自由が發揮されて、遂に國民の代表と稱する議員は、各々の利害得失乃至思想の相寄る者を叫合して政黨を組織し、政府と議會とは互に對立し、帝國議會は國民の心の中の最も機しい部分の品評會の如き觀があつた。かくて我が國も昭和維新の斷行に於て、先づ議會人の議會觀念の再檢討を必要とするに至つた。而して今次の推薦制度は、その改革の試験的第一步として用ひられたるものである。

從來の議會は外國のそれと何等變らず、只、人民の代表者が集つて政府を監督し牽制し、而して人民の自由を獲得する機關の如く考へられてゐた。しかし乍ら、神國日本に於ては、かゝる考へ方の間違ひである事は、今更ら言ふ迄もなき事である。即ち日本の政治は、天皇の御親政であり、國民が議會を通して翼賛し奉り、益々、天皇政治を莊嚴にするのが本來の立前である。

長くも 明治天皇の五箇條の御誓文の「廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ」との御詔勅の意義をはき違へて、民主義國家流の萬機公論と心得たところに大なる誤謬があつた。抑々、我が國は神代の昔より萬機公論を御採用になり、廣く會議を催された幾多の事實が残されてゐる。大拔祝詞に

「高天原ニ神ツマリ坐ス皇親神漏岐神漏美ノ命以チテ。八百萬ノ神等ヲ神集ヘニ集ヘ賜ヒ。神議リニ議リ賜ヒテ我皇御孫命ハ豐葦原ノ水穗ノ國ヲ安國ト平ケク知ロシ食セト事依サシ奉リキ」

とある如く、八百萬の神を集めて會議をなし、この豐葦原水穗國の繁榮を御相談遊ばされてゐる。現代の議會も、天皇がこの國の繁榮・延ひては世界人類福跡の爲に召集遊ばされる議會であつて、召集される國民の代表は、あの八百萬神の心を以て心としてこそ、初めて議會の莊嚴さがあるのである。

要するに、日本は神の國である。日本の議會も神の命に依つて召集される議會としての心構へ、即ち舊觀念から離脱することに依つて、議會人の根性の立直しをして臨まねばならない。抑々、日本民族は眞實に神と共に生活し、神意を地上に布くことを國家的使命とし、開國以來一貫して神を祀り、皇室を守護し奉つて來た民族である。而して其の間、純乎として日本的に固有なる文化個性を基本として、一切の外來文化の長所を統合しつゝ、修理・固成の神的大道を進み、而して世界人類的に、至大崇高なる絶對眞理への、最も理想的な歩みを續けてゐるのである。従つてこの總本家の政治、議會は、他の民族及び國家の基範とならねばならぬ大なる責任のあることを忘れてはならない。只、日本の本當の姿を事實を

以て示せばそれでよいのである。占領地區の民族に對しても、必ずしも宣撫のみを以てすることなく、要は事實を我等日本民族が示すことである。

民族設計

國力支柱と民族強化

國土と國民組織及び民族の質・量如何は、一國の國力を形成する三位一體と云ふより寧ろ基盤である。いかに國土計畫が立派であり、國民組織が系統化されようと、もしこれを構成する民族、その細胞たる個々人にして數少きか、或ひは質惡ければ、砂上の樓閣に過ぎない。最近に於ける歐洲各國の實情が何よりも雄辯に物語つてゐる。一國の運命を決する最後のものは、何んと云つても、その民族の能力であり、實力である。民族の力はその數と質とであり、如何に質が優秀であつても量が伴はねば、矢張没落の運命を免かない。

かつてマルサス一派の人々が、自由主義的享樂追求の觀念より結論した人口過剩論が、我が國に於ても盛んに歡迎されて、その危惧に基く人は制限論など持ち廻つて得意然とした人等も相當あつた。即ち彼等の言をかりて云ふならば、人口は一・二・四・八・と幾何級數に増大するが、食糧は一・二・三・四と算術級數にしか増加しない。この調子で行くと、百年後の世界には、人口と食糧の割合が段々遠く

離れて遂に人間の食ふものが殆どなくなるであらう。勿論その頃は空氣及び水の中からも食糧を得る事も出来るに至るであらうが、主として礦物の中から食糧を求めねばなるまい。だが、かゝることが幸ひになかつたとしても、現在の食物とは自然に異つた、かつて食糧に適しなかつた草木の類が、人間の主食となつて来るであらう。而してそれと同時に人間は次第に食糧不足のために死んで行つて、極く僅かな強健な種族のみが、地上に残された食物の糧に比例して残存するであらう。かく考へる時、現在の人口では既に多過ぎる。少くとも現在の六割程度に減少されなければならないと。

かゝる事を平氣で、而も如何にも物識り顔に話した學者及び高官連もあつた。だが、これも科學の發達しない十八世紀末頃の事であつて、最近に於ては、食物は豊富にあつても、人口増加しないフランスの如き國がある。

何故にフランス人口は、増加しないであらうか。ブドウ酒の中毒説、文弱説、即ち文明は個人的快樂或は名聲をのみ望んで、子孫を輕視する傾向をもつ、遺産均分法と佛人の二兒制説、即ち多くの子供を生むと、子供の受ける財産が小分されるから二人の子供で止めて置く風習等であると云はれてゐるが、かゝる原因に依つて減産するは、既にフランス民族が意氣地なき隱居根性がある爲であらう。フランスの最も華やかであつたのは、ルイ十四世時代であり、その元氣の最後は、フランス革命で竭きた感がある。

ナポレオンが、その兵力を餘り濫用して、歐洲征服のめに約十五年間も戦つた結果は、數十萬或は數百萬の立派な壯丁を喪つた。従つてナポレオンが、最初にアルプス越えをした時の軍隊と、ロシヤで、その寒さに慄へた軍隊とは、その體質に於て相當の差があつた。進んでワテルローに於て戦つた軍隊に至つては、ロシヤ行きの軍隊より更に低下した丙種に等しき連中であつた。故に、新來のウエリントンに敗北したるは當然の事である。英國は陸軍としては強くはないが、その軍隊は、とにかく新來の甲種合格者であり、佛軍は丙種と云ふ可きであるから、假令ナポレオンが、如何に戰略的に巧妙なりと雖その軍隊に粘りなく、武器も大差なき當時に於ては、丙種の佛軍が體負けしたのは自然の成行きと見る可きである。かくして、生き残りの丙種の子孫が十九世紀以降の佛人であつて、英獨人より身體が遙かに小さく、且つ金勘定のみして産兒すらも、節約しようとするのも餘儀なき次第であらう。

十九世紀より第一次歐洲大戰に至る迄の佛國は、普佛戰爭に於て少數の死者を出したに止り大戰争もなく、漸くその民族的エネルギーを恢復したが、第一次歐洲大戰に於て、八五〇萬人即ち全人口の約五分の一動員されて死者一四〇萬、傷者四三〇萬人に及んだのである。民族的致命傷たるや云ふまでもない。而して戦後二十年目の今日、再び世界大戰が起つたのである。人間の數が揃つてゐず、六千近き老人も二度勤めの應召である。戰鬪的氣魄なんて見出さうとしても有る筈はない。第一次歐洲大戰に於て人口多き獨逸の死傷率は動員數の六五%であるのに對して、人口少なき佛國の死傷率は、その動員數の

七三%であつた。一九三八年十月調で、獨逸（境・ブデーデン包含）は七千六百萬人、佛國は四千萬人、英國は四千七百萬である。

今度の大戦に於て、武器とか、意氣とか、國民組織とかを同じとしても、佛國は、固より獨逸の敵ではない。たゞ頼みとするは、マジノ線のみであつたのである。だが、それが頼みとするに足らなかつた。かく觀じ來る時、一國の人口動態程、その國の運命に重大なる關係を有するものはない。

數の設計

しからば民族の數の増加と質の向上は如何にす可きか。數の増加は生活と密接不離の立場に置かれるを以て、結婚し易き經濟環境を與ふる事である。即ち結婚獎勵金、或は家族數による賃銀・報酬割増金、産兒保護金・及び租稅政策として獨身稅と多産者の課稅低減等が考へられる。しかし乍ら、フランスはこれ等の多くを實行したにも拘らず、人口が一向増加しなかつた。それに前述の如く、佛人が既に人生と戦ひ抜き、働き抜かうとする意氣に乏しく、小金を貯めて吞氣に暮さうとする現狀維持的、快樂の人生觀に立つてゐるからである。

故に、かゝる物質的保障は、精神的支柱あつてこそ、始めて効果を擧げることが出来るのである。即

ち働くこと自身を楽しみ、何事かを、この世に建設しようとする若き民族、理想實現に健闘して、それを子孫に繼承せしめ、以て偉大なる民族の建設と莊嚴なる國家殿堂の構築に振ひ起つ氣力精神に溢れてゐる事を必要とする。

由來、東洋民族は歴史的に農耕民であるが、農耕民は祖先傳來の土地を受け繼ぎ、これを子孫に譲り且つその耕作には手助け者の多きを利とし、勢ひ家族主義とならざるを得ない。日本及び支那・印度が家族主義を社會生活の基本體としたるも、この爲である。

故に民族の數を論ずる場合には、單に獨伊の増産的制度のみを模倣せず、この東洋的性格を如何に長養すべきかも考へ併せて、友邦印度の人口増加の由つて來るところも調査研究す可きではなからうか。繼に數の強さは印度と支那にこれを見る。而してこれはまた東洋の強さの一面でもあるのである。

質の設計

民族は何故に各々その特長をもつか。それは云ふまでもない事であるが、その風俗と、その生活様式、その歴史が不適者を淘汰してその適者を残す。残された生存の勝者たる男女が、結婚して生れた子は益々その適性に一層遺傳的に強化するからである。而して、この遺傳的に強化された性格の子孫は、そこ

で再びその性格に適した生活様式を選び、さらにその環境に適者たる残存者の男女が、その遺傳性を残すことに依つて、一民族は一般的にその環境に適する普遍性を持ち、その環境に残存せる民族の普遍性と特殊な性格をもつに至るのである。(これを小にしては謂ゆる家風と云ふが如きそれである。)

斯くの如く、民族性は、環境と歴史の淘汰作用に依つて遺傳的に築き上げられる。これ即ち日本人と支那人とが肉體的に些ほどの相違もなく、且つ生活基調を同一農耕に置き乍らも、兩民族の性格には可なりの差異がある所以である。支那の歴史は民族相闘の連續史であつて、歴史上より云へば、むしろ歐洲人と似た環境を経てゐる結果である。生活基調は農耕であり、歴史的淘汰は、興亡常なき歐洲的である。而して、その住む自然は彌茫たるアジア大陸でもある所に、現在の支那民族が出來たと云へよう。

何れにしても、遺傳性は環境の淘汰作用で發生した先天的固定性であつて、これを變更し、助長し、消失するのも、主として遺傳則による他はない。謂ゆる優生學がこれであるが、人間の遺傳元素が複雑多様なだけに、メンデル則を應用しやうとしても、植物及び動物の如き公式が容易に發見されないのであらう。

吾人はその道の權威者でない。故に、多くを語ることは許されないが、兄弟の性格、才能、その他の心身素質は、ほどその両親、並びに祖父母(父系及び母系)の現した心身の性質以外に、出ないと云ふことは云ひ得ると思ふ。即ち昔から俗に云ふ「瓜のつるから茄子は出ない」と云ふ事になる。たゞ、兄

弟姉妹の中でも甲は兩親、祖父母の善い所のみ受取り、乙は悪い所を集めて受取り、丙は善惡相半ばして受取る。故に英雄とか天才の如き元來が非常な長所と缺陷とを具備する人の子孫には、その缺陷の方だけ受けとつたものは、鷹の子に鶺鴒が生れる結果になる。しかし乍ら、何故に或者は祖先の善い素質を受取り、他の者は悪い系統を受取るかは、現在の遺傳學上なほ不明とされてゐる。

かくて遺傳學の結論は、原則として一方的偏人とか天才を生みたければ、成る可く似た者が夫婦になり、中庸的常識者を生みたければ、心身の素質とも反對の者が夫婦になる事である。従つて、身長の高き子供を得るためには、共に身長のある男女が結婚す可きである。勿論祖父母の關係で、兄弟のすべてが一樣に高いとは云ひ得ないが、二代三代と高い者同志が結婚して行けば、その子孫は凡て必ず高くなるであらう。

しかし乍ら、身長高き者、必ずしも頑健とは云ひ得ず、且又智力優秀とも云ひ得ない。而して、將來に於ける機械化時代に果して適者であるか、否か、故に一つの遺傳質を目標に人種を改善することは、それだけ他の缺陷も發現するをもつて、考へ方如何に依つては、大なる危險も伴ふことになる。かゝる點から現在、我國に於て問題となつてゐる斷種法の如きも、慎重なる検討を要するであらう。

故に斷種法の實行には、先づ日本民族の長短のみならず、來らんとする時代には如何なる身體と、如何なる心的能力あるものが果して適者であるが、又一方長所を作るために、その犠牲として如何なる短

所を除かねばならぬか。これ等の分析と吟味とを加へず、優生結婚さへすれば、或る家系も、日本民族も、心身のすべてが改善されると思つては、大なる思ひ違ひを來たすであらう。

一つの長所を獲得する爲には、何物か失ふ所も覺悟しなければならぬ。これ、即ち宇宙の原則であり生物遺傳の原則である。民族設計もまづその指導理念から決めなければ、謂ゆる優秀が必ずしも優秀でない。況んや、その優秀を獲得する爲に何か失はれねばならぬか。現在の優秀者、天才に就て、如何なる天才は、如何なる缺陷をもつかの、心身能力の調査から着手す可きである。

あらゆる建設は困難であるが、あらゆる建設を建設する人間と民族の建設は、更に至難である。獨逸國民は二千年來、歐洲の眞中にあり、四方に敵を受けて流離艱難の歴史に鍛へられて、今日のゲルマン民族を鍛造したのである。日本民族の建設には、又何よりもかゝる歴史の斷種法即ち環境力による弱者淘汰が基本條件であらねばならぬ。世界歴史はいま日本に、之を強ひやうとしてゐるやうである。

今こそ、日本民族は力かぎき根かぎり、働きぬき生きぬき戦ひぬく時である。何人がこの強大なる歴史の斷種法にかゝつて淘汰されるか。それは相互に、自己の力と、信念を以て奮進する他はないのである。爰は人間が引くが、吉か凶か、それは歴史が審判する。この戦を戦として喜び勇んで進む心こそ、今後の時代に何よりも要請される基本的な民族的性格でなければならぬ。そこにまづ歴史の手に依る斷種を受ける可きであらう。

民族増強の源泉

一國の人口動態が、その國運の消長に關係を有するものであることは、既に述べ來つたところであるが從來歐米の諸文明國では何れも毎年その人口が減少してゐる。所謂人口の下り坂の現象を來しつゝあるのである。しからば我國はどうであつたか。こゝ十數年來の人口動態を見るに、歐米諸國程はないまでも、あまり樂觀的情態とは、云ひ得なかつたのである。試みに統計數字を見るに、出生率千人中、大正九年の三六人を山として、昭和四年の二三人、八年の三一人、十一年二九人、十三年二六人と次第に低下の現象を示めしてゐる。而して、それが専門家の推究によると、六十年前の英國の人口動態と極めて類似の情態にあるといはれてゐる。

かゝる事實が、近來人口問題に關して朝野の關心を高め來つた所以であつて、政府に於ても「生めよ殖せよ」とその對策に努力しつゝあるは、誠に喜ばしいことゝ云はねばならぬ。

從來日本の人口増殖率は、農村多く都會に少ない。人口の増殖を計るには、二つの事を前提として考へて置かねばならぬ。即ち出生率の向上と、死亡率の低下である。先づ死亡率から見ると、都會も農村も千人中十八人の割合で大差はない。しかるに出生率に於ては如何にといふに、都市の八人に對して、

農村の二十二人であつて、比率よりいへば、都市の出生率は、農村の約三分の一に過ぎないのである。然らば何故に都會に於ける出生率が少く、農村に多いかといふに、これには種々議論もあらうが概して云ふならば、都會人は横着であつて、神より與へられたる「子を生む」といふ聖なる義務を、自己の個人主義的享樂觀より嫌つてゐる。而して子供の二・三人も生めば、もう澤山だといふ考へ方をして、後はなるべく子供の出来ないやうな手段、即ち避妊を講じてゐるものが非常に多いのである。殊に、中産以上の所謂上流家庭婦人ほどこの風習が盛んであつた。これ等上流婦人が「子を生む」ことを嫌ふといふ根本の精神は、己の容貌を氣にし、且又社交と稱する會合やお饞べりするには子供があつては誠に都合が悪いと考へてゐることである。今一つは肉體的運動の不足に比して、その榮養の攝取が多過ぎる點であつたと思はれる。都會の出生率を見るも上流の家庭ほど少いことに依つても、これ等の理由がうなづけることと思ふ。

次に都會に於ける中産以下の所謂庶民階級は如何にといふに、これ等の中の大部分は出生率が悪い。それは精神的並びに肉體的の過勞より、身心共に疲勞して生殖力の減退に基くのが第一の原因であり、第二の原因は、収入が少く「また生れたらどうして育てゝ行けるだらうか」と云ふ生活上の不安定より來つたものであり、第三は比較的長期の學校生活が原因で、獨立生計を営むのが遅れ、從つて生活、其の他の關係より晩婚の傾向ある事に依るのである。

一方農村に於ては何故出生率が高いかと云ふに、それは一言にして言ひ得るのである。即ち農村は三千年以來の傳統精神をそのまゝ受け繼いで「子供は神からの授かりもの」として、何人でも喜んで生むのみならず、古人より言ひ傳へられた訓へに「女は七年居て子供がなければ離縁される」とある如く嫁入つた當初より最後まで「生まれなければ去られる」と云ふ觀念が何時も彼の女達の行動を支配してゐるからである。加ふるに農村は子供を育てるにも、産むにも非常に恵まれてゐる。即ち單に氣溫や風土に恵まれてゐるのみならず、大自然の中に活々とした日常を送りよく働き常に健康を保持することが出来るからである。而して生活が豊と云ひ得ない迄も、粗食しながら一ヶ年間を通じて食糧をたくはえて居る。故に農民の生活は安定し、同時に精神はその地から生へてゐる。従つて彼等の生活は、その地を離れては成り立たず、土地そのものが彼等の生活と一體になつてゐるのである。かゝる事は彼等をして如何に多くの子供が生れても、その土地に住む限り、而してその土地から離れない限り「子供は何んとかして育てることが出来る」と云ふ確心を抱かしめることが出来るのである。茲に農村に於ける出生率の高き原因があるのである。

かゝる見地よりして、農村は、實に民族増強の「源泉」である。而して農村が單に人口の量に於て、「源泉」であるのみならず、質に於てもまた「源泉」たるの實を充分に備えてゐる。現に軍隊に於ても農村出身の者が優秀である如く、工場に於てもその優秀性は實證せられてゐるのである。しかしながら

農村の人口が今日已に四割の情態にあることを思ふ時、これ等農村の者が今後益々都會へと流出するとは、遂に民族増強の源泉を枯渇せしめることとなり、延いては日本民族増強の百年の大計を誤らせることになるのである。今日農村は食糧増産の一翼を擔つて、戦時體制強化に邁進しつつあるが如く、人口問題、民族問題からも將來極めて重大なる意義を有つものである。

現在我等日本民族は、東亞十億の民を指導せねばならぬ重大な秋に直面してゐる。しかも、露西亞及び支那、印度は世界屈指の恐るべき人口増加の國である。世界の指導國日本は、質に於ても多くの優れたる人を要すると共に、量に於てもまた更に多くの人を必要とするのであつて、今後益々その増強を圖らねばならぬ。

故に農村を唯單に食糧増産の「勞力」としてのみ扱つてはならない。農民こそは日本民族の増強の源泉である。故にその源泉を涵養することに力を用ひなければならぬ。

結婚の奨勵

日本民族を量的に増加させることの前提として、日本人同志の結婚が先づ考へられるであらう。從來結婚は、人々の環境によつてその年齢が一定してをらず、結婚をすることも亦せぬことも個人の自由で

あつた。故に一生結婚しないで通る變り種は別として、兎角都會に住む多くの男女が、既述の通りその生活上の根本である収入の關係によつて概ね晩婚となつて來たことも止むを得ないことである。都會人の出産率の少いのも、他に種々な理由もあるが、一つは經濟上の問題より晩婚を餘儀なくせられ、ために女性の生理上多産は當然望めないといふことが一つの原因である。

又最近、戰爭の餘波は未婚女子の上に大きな影響を及ぼすに至つた。即ち女子は結婚年齢に達してゐても、相手の男子が種々の原因により今即座に結婚するわけに行かぬ状態にあり、その上幾多の尊い犠牲者の出た爲に、數の上に比較にならぬほど女子の餘剩が出來たのである。而して戦没勇士の遺妻が、今後幾人かの子供の母となるべき資格をもちながら、一生涯獨身で通し、或ひは遺兒を育成するため名譽ある未亡人として活き抜かうとする傾向を生じて來たのである。

かゝる現實は、忽ち日本民族増強の上に大きな影響を及ぼして來るのである。故に民族増強の見地から、これ等の女子の問題に善處することが急務であらねばならぬ。殊に戰爭によつて名譽の負傷された勇士の方々の結婚は、國家に於て媒介機關を設けて大いに奨励しなくてはならない。萬が一にもこれ等勇士の方々が一生獨身で通すが如きことあつては、銃後國民として眞に申譯なき事であり、且又、民族増強の見地から一日も忽にすること出來ない問題である。從來、早期結婚を奨励する意味から獨身課税が考慮され、諸外國に於ては、これを實施してゐる國もある。殊に自由主義的享樂的觀念より結婚を迴避

してゐた人々を根底から自覺させるためにも、獨身課税も必要であらう。だが、獨身者の中にも、實際収入の點より、結婚不可能な人々が極めて數多いのである。故にそれ等の人々のためには、先づ収入の増加を圖つてやると同時に、男女共稼ぎ結婚を大いに獎勵せねばならない。しかしこの共稼ぎ結婚は、子供が生れることによつて、忽ち破壊された過去の社會狀態を、現在人はよく知つてゐる。故に如何に共稼ぎを獎勵しても、現在の如く物價と収入の伴はない社會にあつては、將來に於ける子供の育英に對して危惧の念を抱き、終には結婚に對して躊躇するに至るのである。茲に於て考慮すべきは、現在の社會より見て、妻子を扶養するには最少限度月に百圓以上を必要とすると云ふ事である。故に男子は結婚するに月收百圓に達せざれば妻帯の能力を持たないことになる。然るに現在の社會情態に於ては官吏其他の事務系統のものにあつては百圓の月給を取るまでは、可成の歳月を要するのであらうが、産業方面に従事する者は、十七八歳で二百圓位の収入を得てゐるのである。而して前者は三十歳前後、後者は二十歳前後にして結婚生活に入つて居る有様である。これ等の實狀をよく考慮して、國民の誰もが早く結婚出来る制度を作ることが最も急務である。

民族前衛陣の覺醒

現在日本民族が海外に活躍してゐる總數は嚴密には不明であるが、日支事變直前の調査によると、在外邦人總數は概略百八十九萬二千人である。而してその内譯を見るに、アジアに、一、三五六、二二五五人、ヨーロッパに二、六八四人、北アメリカに、一、一三八、三四〇人、南アメリカに、二二〇人、大洋州に一六一、八七五人である（但し關東州及び南洋委任統治區域にあるものを含まず）。

かくの如く多數の日本人が海外に於て活躍してゐるのであるが、果してこれ等の日本民族が、日本人としての自覺の下に、日本民族としての意識の下に、日常生活を營んで居るかどうかと云ふことを在米日本人を引例して參考としやう。

事變前の在米日本人は、ハワイに十二萬二千八百八十八人、米本土に六萬二千八百六十五人、カナダに一萬一千九百六十六人であつて、總數十九萬七千二百九十八人に及んで居る。而してこれ等日本民族の第二世に就いて特に研究を要するのである。しかし乍ら同じ在米第二世と云ふ中にも、これを分類して少くも左の三通りの區別があることを知らねばならない。即ち

(い) 米大陸生れの第二世

(ろ) ハワイ生れの第二世

(は) 日本教育を受けて歸米した第二世

である。茲に我等の注意す可きは、この三通りの青少年がアメリカ大陸に混然と生活してゐるが、これ

等が大局的に而も民族的意識のもとに相提携しやうとしてゐないことである。即ち米大陸生れの者は、加州訛りの英語でベラ／＼喋り、米國かぶれの上つ調子な、兎角深みに缺けた所がある。而して己は、「生粹の大陸生れだ」といふ自負心のもとに、他の同胞を輕蔑する傾向がある。一方日本育ちの歸米二世は如何といふに、英語に於ては彼等に下り、ひけ目を感じるが、思想分別の點に於ては、祖國日本の教育を受け、精神が日本的に出来上り、何處となくしつかりして、大陸生及びハワイ生れの二世を話相手とするには、何となく物足らなさを感ずると云ふ理由のもとに、彼等を頭から馬鹿にしてゐる傾向がある。従つてその結果として、結婚問題或ひは職業問題等で、如何にしても、相互がうまく行かず、困つてゐるのである。

ドイツに於て隔地主義の國是を以て、何處で生れやうとも二重國籍を持たせることになつてゐるが、日本に於ては、二十歳を超へれば本人の希望によつて、容易に國籍も抜くことが出来るやうになつてゐる。

それにも拘らず、在米第二世等は、如何なることがあつても、本國の國籍有せず、飽くまで米國人で通そうとしてゐる者も少なくない。たとへば相當の年齢に達して彼等が日本に於て結婚することゝなつた場合、結婚して夫婦生活をする事は認められても、その妻は内縁の妻であり、子供は庶子の取扱ひを受けなければならない。

にも拘らず米國人で押し通そうとしてゐる。而して東洋人としては、容易に得られぬ米國市民權を獲得してゐる以上、この特權を善用して兩國間の楔となつて大いに役立つ時を待つのであると、言ひわけしてゐるのである。

しかしそれが第二世の眞の精神から出た言葉であれば、誠に喜ばしきことであつて、彼等が妻子の名前を犠牲にしてもこの意氣で立たうとする精神は、大いに買つてやらねばならない。しかし乍ら、日本地域の弱小を氣にし、或は家屋の見すばらしいとか、便所が臭い等の外觀に依つて祖國を見限り、見當違ひの日本觀に立つが如きものならかゝる氣持は除去してやらねばならない。只大東亞戰爭の戰果が世界的に傳送された今日に於ては、彼等と雖も、祖國日本を見直す絶好の機會が與へられ、従つて日本民族の血の中に眠つて居た大和魂がよみがへつて來つゝあるかも知れないが、從來、日本政府はこれ等第二世に對して如何なる態度を取つて來たか、二、三その例を擧げて見よう。今迄在留邦人が米國から歸朝する度毎に、種々第二世に關する問題を提げて來て、日本の官邊に交渉する場合が多かつた。しかるに日本の官邊は、第二世は外國人であると云ふたてまへから常に彼等を事務的に扱ふのが常であつた。即ち、その屬する國の政府より何等の話がない限り、日本政府より兎や角言ひ出すわけには行かぬと云ふ一本槍の返事でそのよき相談相手たり得なかつた點が多い。而してかゝる事を彼等が米國の父兄や或ひは日本人會等の連中にその儘傳へることに依つて、或ひはこれ等の人々は「それだから日本の役

人は何事も杓子定規で融通が利かぬので困る」とカン／＼になつて怒るのである。また二世が勉學のため日本にかへつて來た時に於ても、日本の官邊は日本の法規を楯に、日本に籍がないから入學させられないとか、言葉と行儀が悪いから純な日本少年等と一緒ににはされないなどと、折角日本に憧れて來た二世に對する取扱ひに親切味を缺く事が多かつた。故に彼等二世は、折角祖國を慕つて來ても、辛棒し切れず、父兄の下へ歸つて行くものも少くなかつた。その結果は勿論、父兄としては祖國の態度を良く言ひ、或はよく考へるが如き事があらう筈がない。而して次から次へと在米邦人の間に惡宣傳が行はれ、その結果在米邦人の一部の者は、祖國日本に好感を持たないやうになつた事例も少なくないのである。

前述の如く些細な己の感情に依つて祖國の惡口を云つて廻るのであるが、これがたとへ己の本心からでないまでも、かゝる事を言はせる様にした、日本官憲の取扱ひにも責任がないとは言ひ得ないのであらう。

「一犬吠て吠えて萬犬之を傳ふ」と云ふことがあるが同じ宣傳するにも、日本の長所を傳へて呉れるやうにせしめたいものである。

以上は唯米國在住者を一例に取つたに過ぎないのであるが、他の國には居る同胞にしても大差なきものと見て良からう。かゝる事は日本民族増強の見地より甚だ寒心に堪へざるところであつて、官邊と雖

も、これ等の取扱ひに慎重を期し、官民協力して彼等に日本民族たるの自覺を促し、以てその光榮に歡喜せしめねばならぬ。而して海外に在住する日本人の血の繋がった民族が、祖國日本のために、他日日本の前衛陣として眞に活躍するやうに教育せねばならない。

卷之六

其の二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

(出版會承認)
イ830204號

昭和十九年 二月十日 印刷
昭和十九年 二月二十日 發行
二千部

-(製 複 許 不)-

神國日本の世界觀 奥付

◎定價金二圓也

特別行爲稅相當額五錢
合計賣價二圓五錢

送料十五錢

著 者

田

邊

讓

發行者

渡

邊

正

夫

印刷者

阿

部

喜

太

郎

配給元

日本出版配給株式會社

東京都本郷區元町一丁目一番地

發行所
研
文
書
院

出文協會員番號二〇九三〇番
電話小石川(四)二四三七番
振替東京 五九五七五番